序　文

全国的に貴重な考古学的発見が続く昨今、地域住民の間では身近な地域への関心が高まり、個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みが様々な場面で多く見られるようになってきました。

しかし、一方では道路建設や、宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模な区画整理事業やほ場整備などの各種開発事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底し、充分な協議を重ねるなど貴重な埋蔵文化財を後世に伝えることに努めてまいりました。

本書は、宮城県土木部との保存協議に基づき、仙台港背後地土地区画整理事業に先立って実施した仙台市中野高柳遺跡の発掘調査のうち、平成１４年度の一部と１５～１７年度、そして平成１５年度に発掘調査された竹ノ内遺跡について調査報告をまとめたものです。背後地関連遺跡調査報告書の４冊目にあたり、また最終報告書となるものです。

中野高柳遺跡については遺跡のほぼ全域について発掘調査を実施し、平安時代から江戸時代までの様々な遺構や遺物が見つかりました。特に中世では、堀に囲まれた領主の屋敷とその周辺の小規模な溝で囲まれた屋敷群が確認され、中世における一つの集落の全体像が明らかになりました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

平成１８年３月

宮城県教育委員会
教育長　白石　晃

例　言

1．本書は宮城県教育委員会が行った仙台港背後地土地区画整理事業にともなう中野高柳遺跡の発掘調査のうち、平成14・15年度の住宅地区（５区）、平成15・16・17年度の流通地区（Ｄ区とＢ区南東部）について、さらに平成15年度に行った竹ノ内遺跡の確認調査の調査成果をまとめたものである。仙台港背後地関連発掘調査報告書の４冊目にあたる。

本書の内容は、上記の報告に加え、中野高柳遺跡については県教委が発行する最終の報告書となるため、調査成果全体のまとめを行った。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．本書における土色の記述については、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を使用した。

4．中野高柳遺跡の測量は、遺跡北西部の第Ｘ系国家座標Ｘ＝－191,850.000、Ｙ＝12,860.000を原点とした東西・南北の基準線をもとに３ｍの方眼を設定しておこなった。また、竹ノ内遺跡の測量は、遺跡中央の第Ｘ系国家座標Ｘ＝－192,633.000、Ｙ＝13,829.000を原点とした東西・南北の基準線をもとに３ｍの方眼を設定しておこった。

本書に掲載した遺構図中に示された方位はすべて座標北を指している。なお、磁北との偏差は西に８°30′40″である。

5．中野高柳遺跡の発掘調査は、仙台市教育委員会も実施している。本書の作成にあたり、市教委からは平面図の提供ならびに出土遺物の観察について配慮をいただいた。

6．本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、発掘現場で付されたものをそのまま使用した。その際、中野高柳遺跡は、仙台市教育委員会による遺構番号との重複を避けるため、1000番から付している。また、遺構は種別にしたがって、以下の記号を使用した。

掘立柱建物跡（ＳＢ）、塀跡・柱列跡（ＳＡ）、溝跡・河川跡（ＳＤ）、井戸跡（ＳＥ）
水田跡・畑跡（ＳＦ）、土壙（ＳＫ）、道路跡・竪穴遺構・その他の遺構・遺物包含層（ＳＸ）

7．発掘調査および整理・報告書の作成に際して、以下の方々と関係機関から指導、助言を賜った（五十音順、敬称略）。

浅田智晴、井上雅孝、小保内裕之、川又隆央、斎野裕彦、榊原滋高、佐藤甲二、塩田達也、篠原信彦、関根達人、高桑弘美、田中則和、千葉孝弥、羽柴直人、藤沼邦彦、堀江格、松本秀明、吉野武
岩手県教育委員会文化課、仙台市教育委員会文化課、多賀城市埋蔵文化財調査センター、東北歴史博物館、平泉町文化財センター、弘前大学、宮城県多賀城跡調査研究所

8．本書の整理、遺構・遺物のトレースは、村田晃一・保原恒雄・白崎恵介・大沼美代子・千田敦子浅野明美・加藤明日香・小泉博明がおこなった。

9．遺構のトレースは、平成13・14年度の平面図と各年度の断面図は、1/20の実測原図をスキャナーで、平成15年度以降の平面図はトータルステーションのデータをコンピューターに取り込み、それを下図としてデジタルトレースを行った。

10. 遺物の実測・トレースは、実測原図をスキャナーでコンピューターに取り込み、それを下図としてデジタルトレースを行った。
11. 第Ⅱ章１は、東北学院大学教授　松本秀明氏、東北大学大学院　野中奈津子氏から玉稿をいただいた。
12. 平成13・14年度調査で出土した植物遺体の分析は、㈱パレオ・ラボの三村昌史・新山雅弘・植田弥生の各氏が行い、その成果は附編として本書に収録した。
13. 動物遺体の分析は西村力が行い、その成果は附編に収録した。
14. 第Ⅱ章１、附編を除く本書の執筆・編集は、調査担当者との協議ののち村田晃一・保原恒雄・白崎恵介が担当した。
15. 中世陶器の産地や時期については、多賀城市埋蔵文化財調査センター　千葉孝弥氏、近世陶磁器については、弘前大学　関根達人氏にご教示いただいた。
16. 中世の陶磁器については、主として以下の文献を参考とした。

【中世陶器】

・中野晴久 1994「生産地における編年について」『中世常滑焼きをおって』資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所

・藤沢良祐 1995「瀬戸」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集　瀬戸市埋蔵文化財センター

・藤沢良祐 1997「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要』第５輯　瀬戸市埋蔵文化財センター

【輸入陶磁器】

・山本信夫 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ　－陶磁器分類編－』　太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会

17. 遺物観察表で簡略化した表現は以下のとおりである。

外→外面　　内→内面　　完形→完形もしくはほぼ完形

18. 遺物実測図に示した塗りは、以下の特徴と表現している。

黒色漆・漆　　赤色漆　　漆（付着物）　　曲物の樺皮　　油煙痕

土師器の黒色処理　　木製品の使用痕

19. 中野高柳遺跡や竹ノ内遺跡の調査成果については、平成13・14・16年度宮城県遺跡調査成果発表会や宮城考古学第４・５・７・８号、木簡研究第24・26号、中世みちの研究会第７回研究集会資料、東北地理学会一般公開シンポジウム2005でその内容の一部を報告しているが、これと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。
20. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目　次

第Ⅰ章　調査に至る経過……1
第Ⅱ章　中野高柳遺跡と竹ノ内遺跡の概観
　1．七北田川下流沖積低地における完新世後期の潟湖
　　埋積と自然堤防の形成……2
　2．周辺の遺跡と歴史的環境……10
第Ⅲ章　中野高柳遺跡……13
　A．調査の方法と経過
　1．調査の方法……15
　2．調査の経過……15
　B．基本層序……21
　C．発見した遺構と遺物
　1．古代……23
　（1）河川跡……24
　（2）第Ⅶ層上面検出遺構……26
　（3）第Ⅴ層検出遺構……36
　2．中世・近世……39
　（1）区画溝跡……41
　（2）遺物包含層……75
　（3）5区……96
　　a．掘立柱建物跡……104
　　b．井戸跡……119
　　c．土壙……132
　　d．溝跡……152
　　e．5区から出土した板碑……158
　（4）D区……158
　　a．掘立柱建物跡……159
　　b．井戸跡……189
　　c．土壙……205
　　d．溝跡……229
　（5）B区……234
　　a．掘立柱建物跡……240
　　b．井戸跡……246
　　c．墓壙……250

d．土壙……252
e．溝跡……262
D．考察
1．古代の遺物と遺構の概要
（1）遺物……270
（2）遺構……271
2．中世・近世の遺物と遺構の概要
（1）遺構の特徴と年代……271
（2）掘立柱建物跡の検討……285
（3）屋敷の様相……288
（4）黒漆二枚居木鞍について……297
E．中野高柳遺跡における遺構の変遷……299
第Ⅳ章　竹ノ内遺跡
A．調査の方法と経過……315
B．発見した遺構と遺物
（1）古代……316
（2）近世……318
C．まとめ……330

附編　中野高柳遺跡の古環境および植物利用等の分析……331
中野高柳遺跡出土の動物遺体……359
報告書抄録

遺跡全景（北から）　調査区は1～4区　左上に七北田川の河口がみえる

中野高柳遺跡　挿図目次

図版１　仙台平野の地形……3
図版２　仙台平野の後氷期海面変動曲線と完新世の地形変化……4
図版３　七北田川下流低地の地形と自然堤防の形成年代……5
図版４　中野高柳遺跡の自然堤防地形の形成時期……7
図版５　中野高柳遺跡が立地する自然堤防地形の模式的断面図……8
図版６　七北田川下流低地の4,000～3,200yrＢＰの潟湖範囲……8
図版７　完新世後期の海水準微変動と溢流による自然堤防形成時期…9
図版８　周辺の中世遺跡……11
図版９　遺跡の範囲と調査地点……16
図版10　遺跡周辺の空中写真……17
図版11　検出遺構と収録報告書……19
図版12　基本層序……22
図版13　ＳＤ1100河川跡……24
図版14　ＳＤ1100河川跡断面……25
図版15　ＳＤ1100河川跡と出土遺物……26
図版16　第Ⅷ層の検出遺構……27
図版17　ＳＦ2401畑跡・ＳＤ2400区画溝跡……28
図版18　ＳＦ2401畑跡……30
図版19　ＳＤ2400区画溝跡……31
図版20　ＳＤ2400区画溝跡出土遺物……31
図版21　ＳＤ2027溝跡、ＳＸ2030土器集積遺構、ＳＤ2026流路跡……32
図版22　ＳＸ2030土器集積遺構出土遺物（１）……33
図版23　ＳＸ2030土器集積遺構出土遺物（２）……34
図版24　ＳＸ2030土器集積遺構出土遺物（３）……35
図版25　ＳＦ1916水田跡……36
図版26　ＳＦ1916水田跡、ＳＤ1911水路跡……37
図版27　第Ⅴ層の検出遺構……38
図版28　ＳＦ1919水田跡……39
図版29　ＳＦ1470畑跡……39
図版30　検出した主な中・近世遺構（１）……40
図版31　検出した主な中・近世遺構（２）……41
図版32　５区北東部の検出遺構……42
図版33　５区北東隅の検出遺構……43
図版34　ＳＤ1466・1467区画溝跡……43
図版35　区画Ｊ空中写真……45
図版36　ＳＤ1828・1829区画溝跡……45
図版37　ＳＤ1828・1829区画溝跡断面……46
図版38　ＳＤ1467・1828・1829区画溝跡出土遺物……47
図版39　５区南部～Ｄ区北部の検出遺構……49
図版40　Ｄ区中央部～南部の検出遺構……50
図版41　ＳＤ1494・2363・2364区画溝跡断面……51
図版42　ＳＤ1494区画溝跡出土遺物……52
図版43　ＳＤ2301区画溝跡出土遺物……53
図版44　ＳＤ2363区画溝跡出土遺物……54
図版45　ＳＤ2364区画溝跡出土遺物……54
図版46　４・５区～Ｄ区北西部の検出遺構……56
図版47　ＳＤ2015区画溝跡断面、ＳＤ1633Ｂ区画溝跡遺物出土状況…57
図版48　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（１）……58
図版49　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（２）……59
図版50　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（３）……60
図版51　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（４）……61
図版52　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（５）……62
図版53　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（６）……63
図版54　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（７）……64
図版55　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（８）……65
図版56　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（９）……66
図版57　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（10）……67
図版58　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（11）……68
図版59　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡下層出土遺物（12）……69
図版60　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡上層出土遺物（１）……70
図版61　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡上層出土遺物（２）……71
図版62　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡上層出土遺物（３）……72
図版63　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡上層出土遺物（４）……73
図版64　ＳＤ1633Ｂ区画溝跡堆積層出土遺物……74
図版65　Ｂ２区中央部～Ｂ３区の検出遺構……76
図版66　ＳＸ1397遺物包含層（１）　断面……77
図版67　ＳＸ1397遺物包含層（２）　断面、遺物出土状況……78
図版68　ＳＸ1397遺物包含層（３）　遺物出土状況……79
図版69　ＳＸ1397遺物包含層下層出土遺物（１）……81
図版70　ＳＸ1397遺物包含層下層出土遺物（２）……82
図版71　ＳＸ1397遺物包含層下層出土遺物（３）……83
図版72　ＳＸ1397遺物包含層下層出土遺物（４）……84
図版73　ＳＸ1397遺物包含層下層出土遺物（５）……85
図版74　ＳＸ1397遺物包含層下層出土遺物（６）……86
図版75　ＳＸ1397遺物包含層下層出土遺物（７）……87
図版76　ＳＸ1397遺物包含層下層出土遺物（８）……88
図版77　ＳＸ1397遺物包含層中層出土遺物（１）……89
図版78　ＳＸ1397遺物包含層中層出土遺物（２）……90
図版79　ＳＸ1397遺物包含層中層出土遺物（３）……91
図版80　ＳＸ1397遺物包含層中層出土遺物（４）……92
図版81　ＳＸ1397遺物包含層上層出土遺物（１）……93
図版82　ＳＸ1397遺物包含層上層出土遺物（２）……94
図版83　ＳＸ1397遺物包含層上層出土遺物（３）……95
図版84　ＳＸ1397遺物包含層上層出土遺物（４）……96
図版85　ＳＸ1397遺物包含層確認面出土遺物……96
図版86　５区北端の検出遺構……97
図版87　５区北西部の検出遺構……98
図版88　５区中央部西側の検出遺構……99
図版89　５区中央部東側の検出遺構……100
図版90　５区南端の検出遺構……101
図版91　５区の検出遺構（１）……102
図版92　５区の検出遺構（２）……103
図版93　ＳＢ2031～2033建物跡……104
図版94　ＳＢ2031～2035建物跡柱穴断面……105
図版95　ＳＢ2034～2038建物跡……107
図版96　ＳＢ2039・2040建物跡……108
図版97　ＳＢ2036～2041建物跡柱穴断面……109
図版98　ＳＢ2041～2047建物跡……110

図版99　S B2042～2047建物跡柱穴断面……111
図版100 S B2051～2053建物跡……113
図版101 S B2054～2060建物跡……114
図版102 S B2061・2062建物跡……116
図版103 S B2061～2065建物跡柱穴断面……117
図版104 S B2063～2066建物跡……118
図版105 5区建物跡出土遺物……118
図版106 S E1786・1811井戸跡……120
図版107 S E1881井戸跡……121
図版108 S E2602井戸跡……122
図版109 5区井戸跡（1）……124
図版110 5区井戸跡（2）……125
図版111 5区井戸跡（3）……126
図版112 5区井戸跡（4）……127
図版113 5区井戸跡出土遺物（1）……128
図版114 5区井戸跡出土遺物（2）……129
図版115 5区井戸跡出土遺物（3）……130
図版116 S K1454・1458土壙……133
図版117 S K1454土壙出土遺物（1）……134
図版118 S K1454土壙出土遺物（2）……135
図版119 S K1454土壙出土遺物（3）……136
図版120 S K1458土壙出土遺物（1）……137
図版121 S K1458土壙出土遺物（2）……138
図版122 S K1761・1762・1834土壙……140
図版123 S K1761土壙出土遺物……141
図版124 S K1762土壙出土遺物……141
図版125 S K1834土壙出土遺物……142
図版126 S K1878・1880・1883土壙……143
図版127 S K1878土壙出土遺物……144
図版128 S K1880・1883土壙出土遺物……145
図版129 5区土壙（1）……147
図版130 5区土壙（2）……148
図版131 5区土壙（3）……149
図版132 5区土壙（4）……150
図版133 5区土壙出土遺物（1）……151
図版134 5区土壙出土遺物（2）……152
図版135 5区溝跡（1）……155
図版136 5区溝跡（2）……156
図版137 5区溝跡出土遺物……157
図版138 5区出土の板碑……158
図版139 D区北西部の検出遺構……160
図版140 D区北東部の検出遺構……161
図版141 D区中央部西側の検出遺構……162
図版142 D区中央部東側の検出遺構……163
図版143 D区南西部の検出遺構……164
図版144 D区南東部の検出遺構……165
図版145 D区の検出遺構（1）……166
図版146 D区の検出遺構（2）……167
図版147 S B2410建物跡……168
図版148 S B2412・2416建物跡……169
図版149 S B2411～2420建物跡……170
図版150 S B2411～2414建物跡柱穴断面……171
図版151 S B2411・2413・2414建物跡……172
図版152 S B2415・2417建物跡……173
図版153 S B2415・2417～2420建物跡柱穴断面……174
図版154 S B2418～2420建物跡……175
図版155 S B2421～2432建物跡……176
図版156 S B2421～2423建物跡……176
図版157 S B2421～2427建物跡柱穴断面……177
図版158 S B2424～2427建物跡……178
図版159 S B2428建物跡……179
図版160 S B2429～2432建物跡……179
図版161 S B2429～2432建物跡柱穴断面……180
図版162 S B2429～2432建物跡……181
図版163 S B2433建物跡……181
図版164 S B2434・2435・2437建物跡……183
図版165 S B2433・2436・2438・2439建物跡……184
図版166 S B2434～2437建物跡……184
図版167 S B2435～2446建物跡柱穴断面……185
図版168 S B2438・2439・2441～2443建物跡……186
図版169 S B2436・2440・2441建物跡……187
図版170 S B2444～2450建物跡……188
図版171 D区建物跡出土遺物……188
図版172 S B2451建物跡……189
図版173 S E2105井戸跡……192
図版174 S E2161・2162井戸跡……193
図版175 S E2198・2199井戸跡……194
図版176 S E2203・2204井戸跡……195
図版177 D区井戸跡（1）……196
図版178 D区井戸跡（2）……197
図版179 D区井戸跡（3）……198
図版180 D区井戸跡出土遺物（1）……199
図版181 D区井戸跡出土遺物（2）……200
図版182 D区井戸跡出土遺物（3）……201
図版183 D区井戸跡出土遺物（4）……202
図版184 D区井戸跡出土遺物（5）……203
図版185 S K2183・2185・2186土壙……206
図版186 S K2183・2238・2303土壙出土遺物……207
図版187 S K2185土壙出土遺物……208
図版188 S K2209土壙……209
図版189 S K2209土壙出土遺物（1）……210
図版190 S K2209土壙出土遺物（2）……211
図版191 S K2238・2246土壙……212
図版192 S K2246・2253土壙出土遺物……213
図版193 S K2190・2253・2300・2303土壙……214
図版194 S K2300土壙出土遺物……215
図版195 S K2258・2260・2294土壙……217
図版196 S K2190・2258・2294土壙出土遺物……218
図版197 D区土壙（1）……219
図版198 D区土壙（2）……220
図版199 D区土壙（3）……221
図版200 D区土壙（4）……222

図版201 D区土壙出土遺物（1）……223
図版202 D区土壙出土遺物（2）……224
図版203 D区土壙出土遺物（3）……225
図版204 D区土壙出土遺物（4）……226
図版205 D区溝跡……230
図版206 SD2020A・B溝跡出土遺物……231
図版207 D区溝跡出土遺物……232
図版208 B区中央部の検出遺構……235
図版209 B区中央部東側の検出遺構……236
図版210 B区南東部の検出遺構……237
図版211 B区の検出遺構（1）……238
図版212 B区の検出遺構（2）……239
図版213 SB1052～1058・2551～2553・2557～2559建物跡……241
図版214 SB1052～1058・2551建物跡柱穴断面……242
図版215 SB2554～2556建物跡……244
図版216 SB2552・2553・2557～2559建物跡柱穴断面……245
図版217 SE2480井戸跡……247
図版218 B区井戸跡……248
図版219 B区井戸跡出土遺物……249
図版220 SX2467・2514墓壙……250
図版221 B区墓壙……251
図版222 B区墓壙出土遺物……251
図版223 SK1008土壙……253
図版224 SK2475土壙……253
図版225 SK1008土壙出土遺物（1）……254
図版226 SK1008土壙出土遺物（2）……255
図版227 SK1008土壙出土遺物（3）……256
図版228 SK2475土壙出土遺物……257
図版229 SK2500土壙出土遺物……258
図版230 B区土壙……259
図版231 B区土壙出土遺物……260
図版232 SD1006・2485溝跡……262
図版233 B区溝跡……263
図版234 B区溝跡出土遺物……264
図版235 SD2241溝跡出土遺物（1）……266
図版236 SD2241溝跡出土遺物（2）……267
図版237 SD2474溝跡出土遺物（1）……268
図版238 SD2474溝跡出土遺物（2）……269
図版239 SX2030土器集積遺構出土土器……270
図版240 SX1397遺物包含層出土遺物……274
図版241 SX1397、SK1008・2185、SD1006出土遺物……275
図版242 SD1633B区画溝跡下層出土遺物……278
図版243 SD1633B区画溝跡上層出土遺物……279
図版244 建物群と区画の位置……286
図版245 屋敷F・H・K・Rの構成……290
図版246 屋敷I・Jの構成……291
図版247 屋敷G・G'の構成……292
図版248 屋敷L・M・Nの構成……294
図版249 屋敷P・Qの構成……295
図版250 鞍の変遷……298
図版251 第Ⅰ期の遺構……300
図版252 第Ⅱ期の遺構……301
図版253 第Ⅲ期の遺構……302
図版254 第Ⅳ期の遺構……304
図版255 第Ⅴ期の遺構……305
図版256 屋敷C・Eの構成……306
図版257 第Ⅵ期の遺構……307
図版258 第Ⅶ期の遺構……308

中野高柳遺跡　表目次

第1表 中野高柳遺跡周辺の中世遺跡……11
第2表 調査年度と調査面積……18
第3表 5区建物跡属性表……119
第4表 5区井戸跡属性表……131
第5表 5区土壙属性表……153
第6表 5区溝跡属性表……159
第7表 D区建物跡属性表……190
第8表 D区井戸跡属性表……204
第9表 D区土壙属性表（1）……227
第10表 D区土壙属性表（2）……228
第11表 D区溝跡属性表（1）……233
第12表 D区溝跡属性表（2）……234
第13表 B区建物跡属性表……246
第14表 B区井戸跡属性表……249
第15表 B区墓壙属性表……252
第16表 B区土壙属性表……261
第17表 B区溝跡属性表……269
第18表 中野高柳遺跡の遺構期と主な検出遺構……272
第19表 建物面積と桁行き平均柱間寸法……287
第20表 屋敷の規模と区画溝跡……289

竹ノ内遺跡　挿図目次

図版1 遺跡の範囲とトレンチの位置……316
図版2 1～5トレンチの検出遺構……317
図版3 6～9トレンチの検出遺構……318
図版4 2トレンチの検出遺構……319
図版5 SD1溝跡……320
図版6 SX6池跡と関連施設……321
図版7 SD4区画溝跡出土遺物（1）……322
図版8 SD4区画溝跡出土遺物（2）……323
図版9 SD12区画溝跡出土遺物（1）……324
図版10 SD12区画溝跡出土遺物（2）……325
図版11 SD2溝跡出土遺物……326
図版12 SX6池跡出土遺物（1）……327
図版13 SX6池跡出土遺物（2）……328
図版14 その他の遺構出土遺物……329

第Ⅰ章　調査にいたる経過

１．はじめに

本書は、仙台港背後地土地区画整理事業にともなう中野高柳遺跡住宅地区の５区、流通地区のＢ区南東部、Ｄ区の発掘調査と竹ノ内遺跡の確認調査に関する報告書である。調査は中野高柳が平成14・15・16・17年度、竹ノ内は平成15年度に実施した。宮城県教育委員会が発行する仙台港背後地土地区画整理事業関連調査報告書の４冊目にあたる。

同事業にかかわる中野高柳遺跡の発掘調査は、平成６・７年度に県文化財保護課、平成７～11年度は仙台市文化財課が担当した。平成12年度からは再び県文化財保護課が発掘調査を担当しており、平成17年７月に終了した。

本書の内容は、上記の報告に加え、中野高柳遺跡について宮城県教育委員会が発行する最終報告書となるため、これまでの成果を踏まえて全体のまとめを行った。

２．発掘調査にいたる経過

仙台港背後地土地区画整理事業は、仙台港の増大する物流需要と船舶の大型化・コンテナ化等の輸送革新に対応するため、仙台港に隣接する北側から西側の背後地一帯を対象とし、宮城県はもとより東北地方の国際貿易・交通拠点として、また仙台都市圏の物流拠点・工業生産拠点としての機能を持たせることを目的として平成２年11月16日に都市計画決定され、翌年７月23日に事業計画決定された。

この事業地内には、高柳Ａ遺跡、高柳Ｂ遺跡、竹ノ内遺跡、沼向遺跡（遠藤館跡が重複）、中野曲田板碑、耳取観音堂板碑が存在することから、平成２年度から土地区画整理を担当する県国際港都市整備課と、文化財保護行政を担当する県文化財保護課（以下、当課とする）および遺跡が位置する仙台市教育委員会文化財課（以下、市文化財課とする）との間で、事業と遺跡とのかかわりについて協議を重ねた。その一環として平成２年度には上記６遺跡について当課、市文化財課、県国際港都市整備課の３者で改めて分布調査を行い、さらに平成３年度から５年度にかけて当課が高柳Ａ・Ｂ遺跡と竹ノ内遺跡、市文化財課が沼向遺跡の確認調査を行った。その成果に基づいた報告会（平成５年９月７日）では、文化財側が事業とかかわりのある遺跡の範囲を確定し、調査の方法について説明を行った。この時、高柳Ａ・Ｂ遺跡については中野高柳遺跡と一本化し、範囲を若干変更している。

平成６年度からは中野高柳遺跡（担当：当課・市文化財課）、沼向遺跡（担当：市文化財課）について事前調査を開始した。中野高柳遺跡の発掘調査は、流通地区（＝都計道路南側）の道路部分について当課が平成６・７年度に担当したのちは、市文化財課が平成７年度から11年度まで調査（中央部の都市計画道路部分、住宅地区の道路部分、流通地区の事業所建物部分）を行った。平成12年度以降は、関係各課との協議に基づき再び当課が発掘調査を担当し、平成17年度に終了した。

発掘調査の方法は、住宅地区は宅地部分の土壌改良が必要となったため全面調査を行った。流通地区については、平成12～14年度は建築計画が決定した建物部分について発掘調査を実施していたが、平成15年度以降は背後地土地区画整理事務所が地区全体の土壌改良が必要と判断したため、残りの部分は全域を調査することにした。

2．周辺の遺跡と歴史的環境

古代・中世の七北田川は多賀城市新田の南で東に折れ、七ヶ浜町湊浜で海に注いでいたと考えられている。しかし、現在の七北田川の流路沿いも自然堤防が発達していることから、湊浜に注ぐ本流のほかに、現在の流路とほぼ同じ位置を流れて蒲生付近に注ぐ支流があったとみられている（田中則和1995）。高柳遺跡では、平安時代中頃から江戸時代までの遺構が検出されている。以下、遺跡が機能した時代における周辺の様相について、発掘調査成果を中心に概観する（図版８）。

奈良・平安時代

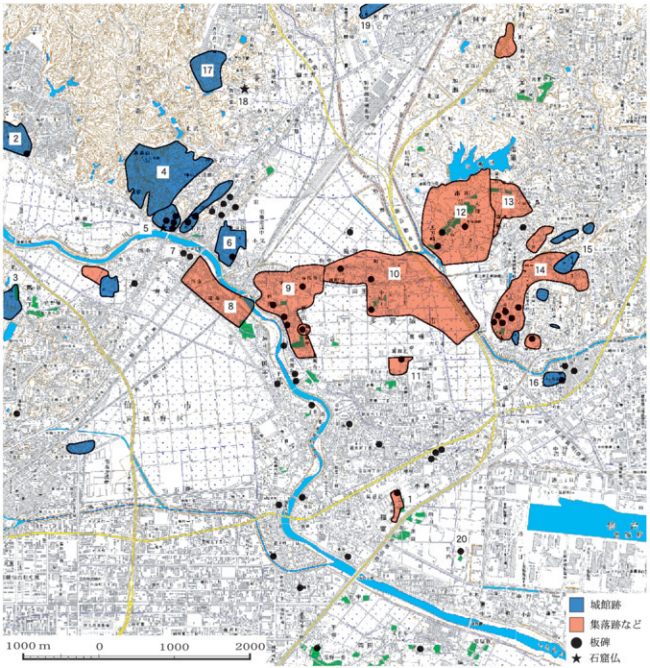
本遺跡の北４㎞の丘陵に724年陸奥国府多賀城が造られる。10世紀後半に廃絶するまで律令政府による東北経営の中心施設であり、奈良時代は鎮守府もおかれた。多賀城創建と同時に南東1.2kmの丘陵には付属寺院である多賀城廃寺が造られ、寺名は「観世音寺」と考えられている（多賀城市史編纂委員会1991）。また、多賀城の外郭南門の傍に建つ「多賀城碑」は、762年に多賀城を全面的に改築した藤原恵美朝臣朝狄の顕彰碑と考えられている（阿部辰夫・平川南編1989）。多賀城周辺の奈良時代の遺構は、自然堤防上の山王遺跡八幡・伏石・千刈田地区、市川橋遺跡館前地区、新田遺跡後・北寿福寺地区や丘陵部の多賀城廃寺周辺の高崎遺跡井戸尻・弥勒地区などで掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが発見されている。遺構のあり方は、平安時代と較べて広い範囲に散在し、閑散としている。

８世紀末頃になると、南北大路、東西大路の２本が多賀城外のメインストリートとなり、10世紀後半まで維持される。その後、南北大路の西側は２段階の整備を経て碁盤目状地割が形成され、多賀城を中心とした都市的空間＝町並みが完成した。遺構や遺物のあり方から見た地割内部は、東西大路沿いが国司など高級官僚の邸宅が並び、外側に中・下級役人の屋敷や庶民の住まい、各種の工房などがあったと考えられる。一方、南北大路の東側は西側ほどの街路の整備は行われなかったと考えられている（多賀城市教育委員会2001）。また、山王遺跡では道路による方格地割の外側で水田の大畦畔が110m間隔で発見されており、多賀城周辺の耕地は条里制に基づいた地割（条里型地割）が施行されていたと考えられる。条里型地割は仙台市内の南小泉（仙台東郊条里跡）・鈎取（山田条里遺構）・飯田・北目・袋原・富沢・市名坂をはじめ、利府町春日地区や名取市高館地区でも認められる（熊谷公男2000）。

多賀城周辺における都市計画的整備の実施は、方格地割の外側にも影響を及ぼす。周辺集落が増加・拡大するだけでなく、住居が竪穴住居から掘立柱建物へと推移し、それらの中には計画的配置をとるものがあるといった、集落構造そのものにも変化が起きている。こうした多賀城周辺における変革は仙台平野一帯でも認められ、集落や水田域が新たに出現したり、拡大する傾向が認められる（宮城県教育委員会1995）。

鎌倉・室町・戦国時代

鎌倉・南北朝時代の遺跡周辺、現在の仙台市岩切・高砂から多賀城市・利府町にかけての一帯は、八幡荘・南宮荘・田子荘という荘園と高用名と呼ばれた公領に分かれていた。八幡荘は、現在の宮城野区蒲生・中野から多賀城市八幡にかけての地域にあったと考えられており、高柳遺跡はこの中に位置する。既述のとおり古代・中世の七北田川は多賀城市新田の南を東流しており、その南側が八幡荘



図版8　周辺の中世遺跡

	№	遺跡名	種別	時代		№	遺跡名	種別	時代
仙台市	1	**中野高柳遺跡**	集落・屋敷・水田	古代～中世	多賀城市	11	大日南遺跡	集落・屋敷	平安～中世
	2	松森城跡	城館	中世		12	多賀城跡	国府・屋敷	奈良～中世
	3	笹森城跡	城館	中世		13	西沢遺跡	集落	古代～中世
	4	岩切城跡	城館	鎌倉～室町		14	高崎遺跡	集落・都市・屋敷	古代～中世
	5	東光寺遺跡	城館・寺院・石窟仏・板碑群	鎌倉～室町		15	留ヶ谷遺跡	城館	古代～中世
	6	洞ノ口遺跡	城館・屋敷・集落・水田	古代、中世、近世		16	八幡館跡	城館・散布地	古代～中世
	7	今市遺跡	集落	平安～中世	利府町	17	菅谷館跡	城館・散布地	平安～中世
	8	鴻ノ巣遺跡	集落・屋敷・水田	弥生～中世		18	菅谷磨崖仏	石窟仏	中世
富谷市	9	新田遺跡	集落・屋敷・水田	縄文～中世		19	利府城跡	城館・散布地	古代～中世
	10	山王遺跡	集落・屋敷・都市・水田	弥生～中世	仙台市	20	竹ノ内遺跡	集落	中世～近世

第1表　中野高柳遺跡周辺の中世遺跡

と推定されている。中世の文書には、荘内の地名として中野・蕨壇・柑子袋（こうじぶくろ）・藤木田（ふじきだ）・萩薗郷（はぎのそのごう）・蒲生郷などがみえる。

この地を治めていたのは、鎌倉時代が平姓陸奥介氏、南北朝時代以降は平姓八幡介（のちに八幡氏と称す）である。戦国時代に入ると、八幡氏は岩切城を居城（のち利府城に移る）とした留守氏の家臣となり、八幡荘は留守氏の領地の一部となった（大石直正2000）。留守氏の家臣団の居館と考えられる屋敷跡は、本遺跡の周辺で数箇所で確認されているが、これらの屋敷はいずれも16世紀の終わり頃に廃絶する。その理由としては、天正18年（1590）頃に留守氏が伊達政宗によって黒川郡に移転させられ、家臣もこれに従ったためと考えられている。

発掘調査が行われた中野周辺の中世遺跡は、本遺跡のほか仙台市岩切城跡、東光寺遺跡、若宮前遺跡、今市遺跡、鴻ノ巣遺跡、洞ノ口遺跡、多賀城市新田遺跡、山王遺跡、大日南遺跡、八幡館跡、利府町大貝窯跡などがあげられる。このうち高柳・洞ノ口・新田・山王・大日南遺跡などでは、溝や堀で方形に囲まれた敷地内部から掘立柱建物や塀、井戸などが検出されており、武士階級の屋敷跡と考えられている。また、洞ノ口・鴻ノ巣・今市・新田遺跡では、武士階級の屋敷跡とともに鎌倉時代から戦国時代の屋敷跡が数多く発見されており、町並みが形成されていたと考えられる。

新田遺跡では、出土陶磁器の中に占める中国陶磁器や瀬戸産施釉陶器などの高級品の割合が高いとの指摘がある。このため仙台市岩切から多賀城市新田にかけての地域は、中世の「多賀国府」とみる見方が強まってきている（入間田宣夫・大石直正編1992）。文献からみた多賀国府は、14世紀代まで機能していたと考えられており、役所や役人たちの居館のほか、河原宿五日市場、冠屋市場という２つの市場があった。そこで商業活動を行った在家が生活し、刀鍛冶や紙漉職人など、さまざまな職人の工房も存在した都市的な場であったと考えられている。利府町大貝窯跡では、14世紀以降とみられる製鉄炉跡７基、鍛冶炉跡21基、炭窯跡13基などが発見された。中世の製鉄関連遺構は、大貝窯の周辺に拡がることが確認されている。多賀国府城では、大量の鉄が必要とされたことは想像に難くなく、その需要を賄うため、大貝窯周辺に鉄生産コンビナートが設けられたとみられる。

高柳遺跡の北東部には1296年（永仁４）に造立された板碑が残っており、遺跡で発見された武士階級の屋敷に関わる人の墓、もしくは供養塔の可能性がある。遺跡周辺の高砂地区では、ほかに36基の板碑が確認されている。また、この地区の北西に隣接する岩切地区は、236基以上の板碑が確認されており、仙台市内最大の板碑密集地となっている（仙台市史編さん委員会1998）。その６割を超す158基以上が見つかっている東光寺の板碑の年代は、1278年（弘安元）が最も古く、他もほとんどのものが鎌倉時代後半に集中しており、多賀国府が国府としての機能が失われるとともに板碑の数が激減している。東光寺の板碑は種子だけのものが多く、墓碑もしくは死者の追善供養のために造立されたと考えられる。これに対して岩切地区の洞ノ口から多賀城市新田字安楽寺にかけては、造立者自身の極楽往生を願って生前に立てられた彼岸念仏板碑が多い。こうしたことから、中世都市「多賀国府」の西に位置する東光寺から羽黒前遺跡にいたる丘陵斜面は、墓地や大規模な追善供養の場であり、これと反対に国府の東は生者のための逆修供養の場であったと考えられている（岡田清一2000）。

第Ⅲ章　中野高柳遺跡

D区空中写真（南から）

調　査　要　項

遺跡名　：中野高柳遺跡（宮城県遺跡登録番号　01146）
遺跡記号：ＫＸ
所在地　：宮城県仙台市中野字県道前ほか（旧地名：中野字高柳）
発掘面積：約15,020㎡（５区、Ｂ区南東部、Ｄ区）
調査期間：平成14年４月８日～11月12日、平成15年４月７日～11月12日
　　平成16年４月12日～11月９日、平成17年４月18日～７月４日
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調査員　：平成14年度
　　村田晃一・茂木好光・岩見和泰・吉野武・西村力
　　平成15年度
　　村田晃一・佐久間光平・奥山芳明・三好秀樹・白崎恵介
　　平成16年度
　　村田晃一・保原恒雄・白崎恵介
　　平成17年度
　　村田晃一・白崎恵介・生田和宏

A．調査の方法と経過

1．調査の方法

平成12年度からの調査は、住宅地区北西隅に測量原点（第Ｘ系国家座標）を設置し、それをもとに東西・南北に基準線を延長し、調査区全域に３ｍ方眼を設定した。方向は真北を基準とし、グリッドの呼称は原点からの東西・南北方向の距離で表した。

検出した遺構の平面図作成や遺構の写真撮影は、平成14年度までと同15年度以降で異なる。前者の平面図は原則として縮尺1/20で作成した。その際、図は前述したグリッドを基準に作成している。遺構写真は、35㎜と６×７㎝のカメラを使用し、それぞれモノクロとリバーサルフィルムを使用して行った。

平成15年度からは、平面図の作成をトータルステーションを用いて行い、遺構写真は通常６×７㎝モノクロフィルムとデジタルカメラで撮影し、重要度が高いものについては６×７㎝カラーリバーサルフィルムも用いた。本遺跡の遺構面は、大きく古代と中世以降に分かれるが、後者は前者に較べて遺構の拡がりや種類、数が卓越する。このため、各年度とも中・近世遺構の精査が進んだ段階で、空中写真を撮影した。

2．調査の経過

中野高柳遺跡の発掘は遺跡全体が事前調査の対象となるため、調査面積が広大で多年次にわたると予想された。そこで、平成12年度からの発掘調査では、住宅地区を市文化財課の調査区や湿地跡を反映した低地部分を境にして１～５区に、流通地区は既存道路や湿地跡を反映した低地部分を境にしてＡ～Ｄ区に区分した（図版９）。県文化財保護課が行った発掘調査の概要は、以下の通りである。年度ごとの調査地点と調査面積、その成果を収録した報告書については、図版11と第２表にまとめた。

①平成６年度の調査

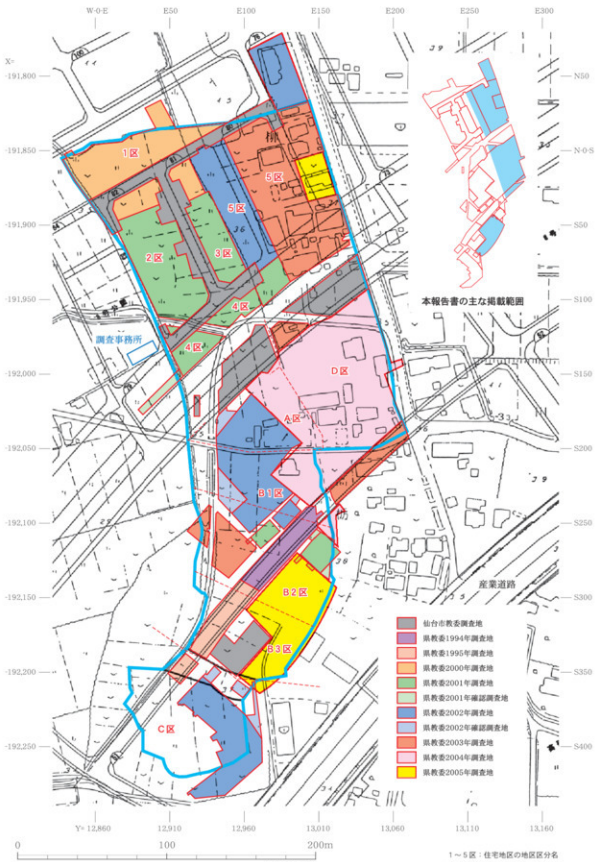
平成６年度は、流通地区内を都市計画道路「中野線」に平行して南を走る幅12ｍの道路予定地のうち、北半部の調査を行った。調査面積は1,050㎡である。その結果、鎌倉～南北朝時代の在地領主（＝武士階級）の屋敷跡（区画Ｇ）を検出した。主な遺構は掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、溝跡などである。特筆すべき出土遺物としては、ゴミ穴とみられる大型土壙から出土した、修験者もしくは僧を墨で表現した「人物墨書礫」があげられる。

②平成７年度の調査

前年度に続き、道路予定地南半部を調査した。調査面積は950㎡である。主な検出遺構は、南北道路跡の東側溝、溝跡、掘立柱建物跡などである。東西溝跡は前年度に確認した屋敷の南辺を画する可能性が考えられた。

③平成12年度の調査

本年度より仙台市教育委員会から発掘調査を引き継ぐこととなり、住宅地区の１区・２区と３区の北端部について調査を実施した。住宅地区については、建物の建築にあたり土壌改良やパイル工法が採用されることとなったため、全面調査が必要となった。調査面積は3,250㎡である。その結果、平安時代と中世より新しい遺構を確認した。平安時代は河川が住宅地区中央を南へ流れ、右岸の自然堤防



図版9　遺跡の範囲と調査地点

縁辺から後背湿地は水田として利用されており、10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰で廃絶した。その後、自然堤防部に畑がつくられるが、河川の氾濫で廃絶した。平安時代の遺構は、食料生産に関わる遺構であり、２度の自然災害を受けていることがわかった。

中世より新しい遺構は、幅３ｍの溝で方形に区画された屋敷跡が新旧２時期確認された。その規模や出土遺物から、屋敷の主は在地領主層と考えられる。古い屋敷（区画Ａ）は単独の区画であるが、新しい屋敷（区画Ｃ・Ｄ・Ｅ）は三つの区画で構成されていることがわかった。なお、古い屋敷は発掘調査前に策定した遺跡の範囲（以下、遺跡の範囲とする）外へと延びたため、東辺を一部拡張したが、北辺は確認できなかった。

④平成13年度の調査

発掘調査は本年度から通年（４月～11月）となり、中野高柳遺跡の事前調査と東に１㎞離れた竹ノ内遺跡の遺構確認調査を行った。

図版10　遺跡周辺の空中写真（写真上が北、白線は遺跡の範囲　縮尺=1/10000）

※「国土画像情報（昭和59年度カラー空中写真、整理番号：CTO-84-2）国土交通省」を一部加工して転載

調査年度	調 査 地 点	事前面積(㎡)	確認面積(㎡)	掲載報告書	備　考（区名は調査時）
平成6年	流通 B2	1,050		Ⅱ(宮文報197)	
平成7年	流通 B2	950		Ⅱ(宮文報197)	
平成12年	住宅 1,2･3の一部	3,250		Ⅰ(宮文報194)	遺跡範囲外295㎡
平成13年	住宅 2～4,5の一部	5,550	210	Ⅰ(宮文報194)	遺跡範囲外210㎡
	流通 B2	650	90	Ⅱ(宮文報197)	①･②区
	小計	6,200	300		
平成14年	住宅 5	3,650		本書	E･N区 遺跡範囲外1,070㎡
	流通 A	1,560	270	Ⅲ(宮文報201)	⑦･⑦－S･N区
	流通 B1･B2	1,800	470	Ⅲ(宮文報201)	③区
	流通 B2	170	90	Ⅲ(宮文報201)	④･⑧区
	流通 C	2,100	290	Ⅱ(宮文報197)	⑤･⑥区 遺跡範囲外1,050㎡
	小計	9,280	1,120		
平成15年	住宅 5	5,000		本書	E区
	流通 B2	960		Ⅱ(宮文報197)	⑨区 遺跡範囲外220㎡
	流通 D	330		本書	⑩区
	流通 D	640		本書	⑪区 遺跡範囲外545㎡
	小計	6,930			
平成16年	流通 D	8,000		Ⅲ(宮文報201)、本書	⑫区 遺跡範囲外430㎡
	流通 Bの一部	200		Ⅲ(宮文報201)	⑬区
	小計	8,200			
平成17年	流通 Bの南東部	2,300		本書	
	住宅 5の一部	600		本書	
	小計	2,900			
合　計		38,760	1,420		

第2表　調査年度と調査面積

中野高柳では、住宅地区が昨年度の継続部分（２・３区）と４区、流通地区ではＢ区の２箇所で調査を行った。その際、流通地区は建築計画に基づいて建物部分について調査を実施している。調査面積は事前分が6,200㎡、確認分が300㎡である。平安時代の遺構は住宅地区に認められ、２区や３区で昨年と一連の畑跡や水田跡を確認したほか、４区で灰白色火山灰より古い畑跡を検出した。また、河川は灰白色火山灰降下後の氾濫よって流路が他所へ移動し、元の場所は湿地化したことがわかった。湿地は12世紀代にゴミ捨て場（＝遺物包含層）となっており、土器・陶磁器・漆製品・木製品・石製品・金属製品・動植物遺体などが出土した。

中世より新しい遺構は、住宅地区の屋敷跡が２時期加わって４時期となり、年代は古いほうから鎌倉～南北朝時代（区画Ａ）→室町時代（区画Ｂ）→戦国時代（区画Ｃ・Ｄ・Ｅ）→江戸時代（区画Ｆ）とみられた。また、鎌倉～南北朝時代の南北道路跡を検出した。道路の路面幅は３～４ｍで、両側に側溝を伴っている。流通地区は、平成６年度の調査区の南北両側を調査した。その結果、鎌倉～南北朝時代の屋敷（区画Ｇ）に伴う建物、ゴミ穴とみられる大型土壙などを検出した。屋敷東側の湿地はゴミ捨て場として利用されており、土器・陶磁器・漆製品・木製品・石製品・金属製品・動植物遺体などが出土した。

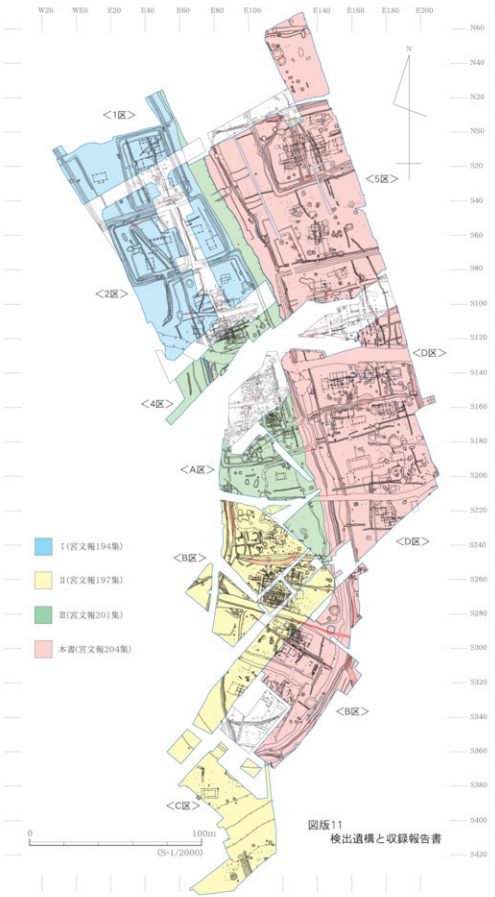
特筆すべき遺物としては、12世紀の遺物包含層から出土した「鉄地銅象嵌轡」があげられる。象嵌技法から平泉の製品もしくはその技術系譜に連なること、さらに、土器・陶磁器の組合せが平泉と共通することから、12世紀に屋敷を構えた主は、平泉藤原氏と密接な関係にあったと考えられた。

中世より新しい遺構の調査が一段落し、全体の見通しが付いた段階で、記者発表（７月５日）と現地説明会（７月７日）を行った。説明会の参加者は、150名ほどであった。

⑤平成14年度の調査

住宅地区は５区西端と５区北東隣接地の２箇所、流通地区はＡ区で４箇所、Ｂ区で３箇所、Ｃ区とその隣接地で２箇所、あわせて11箇所で調査を行った。調査面積は、事前分が9,280㎡、確認分は1,120㎡である。５区西端では、湿地跡とその東で平行して南北に延びる溝跡や新たな近世屋敷（区画Ｈ）の区画溝跡を検出した。湿地跡からは12世紀の遺物が出土したが、その量は昨年度の４区に隣接する南側に多く、北にいくほど希薄となった。５区北東隣接地は遺跡の範囲外であったが、工事に伴う掘削で遺構が発見されたため急遽調査を実施し、平安時代の畑跡や鎌倉～戦国時代とみられる大型土壙などを確認した。

Ｃ区は、南東側の隣接地に中世遺構が延びると予想されたため、仙台港背後地土地区画整理事務所（以下、事務所とする）と相談の上、調査区を南へ拡張した。一方、Ｃ区中央は遺構数がきわめて少



図版11
検出遺構と収録報告書

なく、近世より古い遺構が認められなかったため、西側の事前調査は行わなかった。

流通地区の遺構は、平安時代がA・B区で灰白色火山灰に覆われた畑跡、区画溝跡を検出した。また、住宅地区と一連の河川跡がA・B区東縁を南へ流れ、C区北東部で向きを西へ変えていることを確認した。中世より新しい遺構は、昨年度検出した南北道路跡をA～C区で検出し、遺跡内を縦断（390m）してさらに南に延びることがわかった。B区では、平成6・7・13年度に確認した鎌倉～南北朝時代の屋敷跡（区画G）の北辺と西辺を検出し、屋敷の規模は東西70m前後、南北50～53mとみられた。また、A区では住宅地区の室町時代頃（区画B）、江戸時代の屋敷跡（区画F）の南辺を確認した。

⑥平成15年度の調査

中野高柳遺跡と竹ノ内遺跡の調査を実施した。中野高柳遺跡は、住宅地区で5区中央から東側、流通地区はB区西端で1箇所、D区は北端と南端の2箇所、あわせて4箇所で調査を行った。調査面積は、6,930㎡である。その結果、住宅地区は立ち退きの終了していない宅地部分を除いて全て発掘調査が終了した。また、流通地区は事務所が土壌改良が必要と判断したことを受け、今年度から残りの部分については全面を調査することとなった。

住宅地区の検出遺構は、平安時代が河川跡左岸で灰白色火山灰に覆われた畑跡を検出した。中世以降は、昨年度発見した南北溝跡と一連とみられる溝跡が東へ折れること、近世屋敷跡（区画H）の北辺区画溝が東へ延び、屋敷の規模が南北52m以上、東西60m以上あることを確認した。また、北東部で新たな屋敷跡を二つ確認した。古い区画Ⅰは、前年度5区北東隣接地で確認した東西溝と北辺として南北約85m、東西46m以上の方形とみられたが、新しい区画Ⅰは、南北約40m、東西46m以上あり、北西コーナーは内側に大きく入り込んでいた。

流通地区では、B区で前年度検出した畑跡の南端を確認した。畑跡は4区で検出したものと一連と考えられ、耕作域は東西16～32m、南北約170mと判明した。中世以降のものとしては、南北道路跡などを確認したが、全体に密度は希薄であった。また、D区で湿地跡東側の調査を行ったところ、古代の畑跡が遺跡の範囲外に延びることを確認したため、事務所の了解を得て発掘調査を実施した。その結果、灰白色火山灰に覆われる畑跡と区画溝跡を確認し、後者は灰白色火山灰降灰後の凹地から10世紀前半頃の土師器食器がまとまって出土した。一方、中世より新しい遺構の分布は希薄であった。

竹ノ内遺跡は、平成13年度に実施できなかった部分について遺構確認調査を実施した。その結果、堆積土に灰白色火山灰が入る東西溝跡1条を除くと、近世以降の屋敷や寺に関わる遺構などを確認するにとどまった。したがって、遺構精査の対象は古代の溝跡のみとなることから、事務所と協議したのち、継続して事前調査も実施することとなった。調査面積は1,850㎡である。古代の東西溝跡は、遺構ではなく、自然流路跡である可能性が考えられた。また、近世屋敷の区画溝跡からは割材の片面に墨書が記された木簡が出土した。

⑦平成16年度の調査

流通地区はA・B区東側とD区について調査を行った。調査面積は、8,200㎡である。検出遺構は、平安時代が河川跡両岸で灰白色火山灰に覆われた畑跡を検出した。左岸では、5区から延びる区画溝

の南北長が415m以上であることがわかった。中世以降は、A区で室町時代頃（区画B）と江戸時代（区画F）の屋敷跡の南西隅を検出し、それぞれの規模が確定した（B：東西約43m、南北101～108m、F：東西約48m、南北約59m）。

D区では方形区画が複数確認された。これらは、遺跡西側で確認した屋敷（区画A～G）と比較して区画溝の幅が狭い、内部の建物構成が異なり、建替えの回数が少ない、出土遺物が少ない、といった特徴が認められた。こうした違いは居住者の階層差を示すと考えられ、D区の区画は西側の屋敷の主と主従関係にあった人々、職人や一般農民などの住まいと考えられる。A・B区の東端は湿地跡で13年度調査地の北にあたる。鎌倉時代から南北朝時代はゴミ捨て場（＝遺物包含層）となっており、土器・陶磁器・漆製品・木製品・石製品・金属製品・動植物遺体などが出土した。遺物の出土状況は、西側の南よりが多く、北へ行くほど希薄であり、在地領主の屋敷である区画Gに近い場所で多く出土する傾向があった。

中世の調査が終了し、古代の調査が一段落した段階で、記者発表（10月22日）と現地説明会（10月24日）を行った。説明会の参加者は、80名ほどであった。

⑧平成17年度の調査

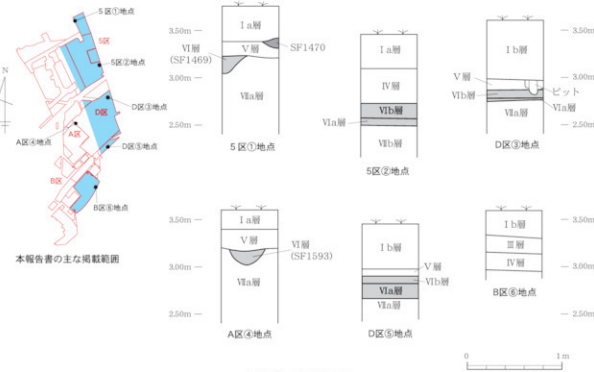
流通地区のB区南東部と住宅地区5区中央部東側の調査を行った。調査面積は2,900㎡である。B区は、鎌倉～南北朝時代の屋敷跡（区画G）の南東部にあたり、副屋や屋敷内部の区画溝跡、ゴミ穴とみられる大型土壙などを検出した。また、屋敷の東端は湿地に面しており、土器・陶磁器・漆製品・木製品・石製品・金属製品・動植物遺体などが出土した。その結果、区画Gの規模は平成14年度の見解とは異なり、平面形は南半部がすぼまり規模は南北約108m、東西は北半で60～75mであることがわかった。5区は区画Ⅰ・Jの南辺を調査し、新しい屋敷（区画J）の南入口は、土橋であったことを確認した。

特筆すべき遺物としては、13世紀前半から中頃の遺物包含層から出土した「鞍」の前輪部分があげられる。本来は黒漆塗りで、鞍の出土例が少ないため年代が特定できる貴重な発見となった。今年度の調査がほぼ終了した段階で、記者発表（6月30日）と現地説明会（7月2日）を行った。説明会の参加者は、60名ほどであった。

B．基本層序

遺跡内の表土から遺構面までの基本層序は、大別で7層に分けられた。図版12は、今回報告する住宅地区2地点と流通地区4地点の基本層序を柱状図にして模式的に示したものである。

遺跡内の微地形をみると、住宅地区の中央から流通地区の東縁に古代の河川跡（SD1100）が認められ、その両側に自然堤防が形成されている。自然堤防の幅は右岸が50～60m、左岸は60m前後とみられる。住宅地区の河川跡右岸は、河川跡の凹地に接続する東西方向の凹地が4条あり、それらをつなぐ南北の凹地が観察できた。流通地区の河川跡右岸もまた、それに接続する東西方向の凹地が2条認められた。発掘調査の結果、これらの凹地は中世の屋敷をめぐる区画溝跡であり、近世以降になると、区画溝跡や河川跡の凹地は水田（1c層）として、水田で囲まれた高い部分は、宅地や畑として



図版12　基本層序

利用されていたことがわかった。これら水田・畑・宅地によって遺跡全体は削平されており、中世以降の旧表土である第Ⅲ層は、D区の一部で確認したのみである。

第Ⅰ層

表土である。盛土（a層）、畑耕作土（b層：黒褐色～黄褐色シルト）、水田耕作土（c層：褐灰色～灰色粘土）に分けられる。c層の上にはa層が認められる部分が多い。厚さはa層が20～80㎝、b層は30～40㎝、c層は10～50㎝ある。

第Ⅱ層

にぶい黄褐色（10YR5/4）シルトで、中世遺構を覆う。面的な広がりは確認できなかったが、B・C区の中世遺構の最上層で認められた。

第Ⅲ層

暗褐色（10YR3/4）や黒褐色（10YR3/2）シルトで、中世以降の旧表土である。1区東部やD区南端で認められたが、他の場所では確認できなかった。厚さは10～20㎝ある。

第Ⅳ層

にぶい黄褐色（10YR4/3）の砂質シルトもしくはシルトを主体としており、河川の氾濫を起源とする層である。SD1100河川跡を中心に認められる。氾濫によって、畑や水田とその区画溝は、河川と接する部分などが壊されている。住宅地区のSD1100では、厚さが260㎝あった。層の細分が可能で、砂や粘土も認められる。

第Ⅴ層

にぶい黄褐色（10YR5/3）シルトを主体としており、河川の氾濫を起源とする層と考えられる。遺跡

全体で認められ、第Ⅲ層の残りが悪いため中世より新しい遺構は、第Ⅳ層や本層で確認したものが多い。層の厚さは自然堤防上で10～20㎝、その縁辺部では30～40㎝ある。

第Ⅵ層

灰白色火山灰層である。１次堆積（ａ層）と２次堆積（ｂ層）に細分できる。第Ⅶ層の遺構の多くはⅥａ層に覆われており、厚さは10㎝前後ある。Ⅵｂ層は遺跡のほぼ全域で認められ、厚さは自然堤防上で10～20㎝、河川跡は岸付近で20～30㎝あり、最大で80㎝認められたところがある。これに対し、Ｃ区のⅥ層は中央部の湿地（ＳＸ1608）から南で認められた。検出レベルはＡ・Ｂ区に較べて80～90㎝低く、その下で水田跡は検出できなかった。したがって、Ｃ区は中央部以北を河川（ＳＤ1100）が流路を変えながら流れ、その南岸は湿地となっており、１・２区西側のように水田はつくられなかったと考えられる。

第Ⅶ層

ａ層は灰黄褐色（10YR5/2）やにぶい黄褐色（10YR5/3）の砂質シルトもしくはシルトを主体とする。自然堤防部に認められ、厚さは20～30㎝あり、畑（ＳＦ1593・2401）や区画溝（ＳＤ2027・2400）が掘り込まれた。自然堤防縁辺部には、グライ化した暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土のⅦｂ層が認められ、１・２区西端や５区北東端で水田（ＳＦ1199・1916）や区画溝（ＳＤ1155・1911）がつくられた。一方、Ｃ区南端では、100～120㎝の厚さで褐灰色粘土質シルト（Ⅶｃ層）が認められ、その下層は砂層であった。

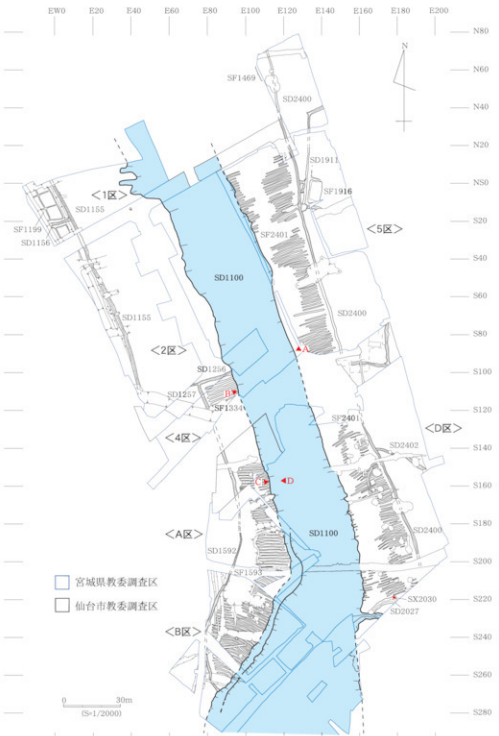
Ｃ．発見した遺構と遺物

今回報告するのは、５区、Ｄ区およびＢ区南東部である。第Ⅶ層上面と第Ⅴ層で古代の畑耕作痕・水田跡・河川跡、第Ⅳ層で中世および近世の集落跡を検出した。

本遺跡の発掘調査報告書は、過去に３冊刊行している。それらを引用する場合は、『中野高柳遺跡Ⅰ』（宮城県文化財調査報告書第194集）を『Ⅰ』、『中野高柳遺跡Ⅱ』（宮城県文化財調査報告書第197集）を『Ⅱ』、『中野高柳遺跡Ⅲ』（宮城県文化財調査報告書第201集）を『Ⅲ』と略すことにする。また、『Ⅰ』～『Ⅲ』で報告した中世以降の屋敷跡（＝方形区画）は、区画Ａ…区画Ｇ、大別７期の遺構期は第Ⅰ期…第Ⅶ期と表記する。

１．古代

古代の遺構は、５・Ｄ区の第Ⅶ層上面で検出した畑跡や水田跡、５区第Ⅴ層で検出した畑跡である。第Ⅶ層の畑は５区とＤ区の西半部にひろがり、遺跡中央を南北に流れる河川（ＳＤ1100）と接続する溝で南と東を画されている。水田は５区北東部で検出され、溝で三方（北・西・南）を囲まれている（図版16）。これらの遺構は、10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰とその後の氾濫によって埋没する。第Ⅴ層の畑は、５区北東部で検出された（図版27）。一方、Ｂ区は調査区のほとんどが河川や河川敷となっているため、遺構は確認できなかった。古代は、同じ遺構が地区をまたいで検出されていることから一括して記述する。

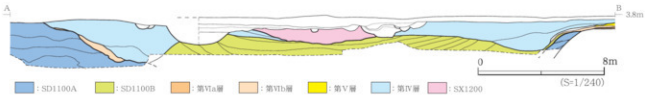


図版13　SD1100河川跡　　ー第Ⅶ層段階ー

（１）河川跡

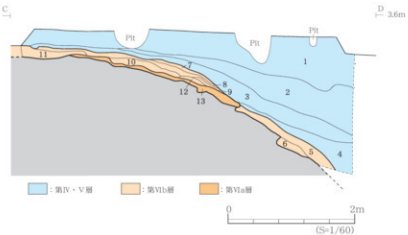
【ＳＤ1100河川跡】（図版13・14）

５・Ｄ区の西端を南へ流れ、Ｂ区南東隅で西へ向きを変える河川跡で、南北420ｍ分を確認した。灰白色火山灰（第Ⅵ層）を指標として、火山灰降灰頃からそれ以後の河川跡（Ｂ河川跡）とこれよりも



SD1100河川跡・SX1200遺物包含層断面模式図

A—B断面写真　（東半部　北から）



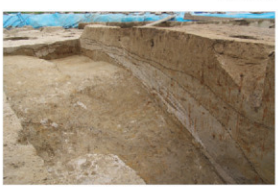
第VI層の堆積状況

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	ことい(黄褐色)10YR4/3)シルト		第IV・V層
2	ことい(黄褐色)10YR5/4)砂質シルト		
3	灰黄褐色(10YR6/2)シルト	第VI層を薄い縞状に含む	
4	灰黄褐色(10YR6/2)細砂	青灰色細砂を縞状に、第VI層ブロックを含む	
5	第VI層内等質層	第VIb層ブロックを含む	
6	第VI層・青灰色細砂の縞状等層		第VIb層
7	灰白色(10YR7/1)シルト		

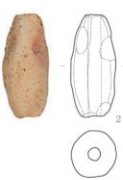
No.	色・土性	混入物など	備考
8	灰白色(10YR7/1)シルト	青灰色細砂を薄い縞状に含む	第VIb層
9	第VIb層主体層		
10	灰白色(10YR7/1)シルト		
11	灰白色(10YR7/1)シルト	第VI層ブロックを多量に含む	
12	ことい(黄褐色)10YR5/4)砂質シルト		
13	灰白色(10YR8/1)		第VIa層

図版14　SD1100河川跡断面

西岸とSF1593：D区北部（西から）



西岸の堆積状況：D区北部



No.	大別層位	種別	器種	産地	特徴	登録
1	堆積土	赤焼土器	小型坏		口径(12.0) 底径3.9 器高(3.4) 残存：3/4 ロクロナデ 底部：回転糸切 内：コテナデ	05145
2	堆積土	土製品	錘		長8.2 幅3.6 孔径1.0	05171

図版15　SD1100河川跡と出土遺物

古い河川跡（A河川跡）に大別できる。B河川跡は、東西35.0m、深さは2.4m以上ある。下層は粗砂や砂がラミナ状に堆積するが、上層は氾濫を起源とする黄褐色の砂やシルト（第Ⅳ層）であり、これによって河川は埋没し、その後、湿地化する（東西9.0m、深さ0.8m）。灰白色火山灰下の河川跡（SD1100A）は、断割り調査を行っていないため不明であるが、B河川跡よりやや大きいと考えられる。

遺物は、B河川跡の第Ⅳ・Ⅴ層対応層から土師器・赤焼土器・須恵器・土錘が出土している（図版15－1・2）。

（2）第Ⅶ層上面検出遺構

【SF2401・1469畑跡、SD2027・2400区画溝跡】（図版16～19）

5区からD区西半部で、溝によって区画された畑跡を検出した。耕作域は西がSD1100河川跡に面し、東端と南端をSD2400・2027溝跡によって区画されている。耕作痕の底面や溝跡の底面近くに灰白色火山灰（第Ⅵa層）が認められる。また、畝本体は残存せず、そこに火山灰の2次堆積（第Ⅵb

図版16　第Ⅶ層の検出遺構

D区中央部～南部（北から）　左側の溝がSD2400

5区西側（南から）　中央の溝がSD2400

5区南西部（東から）

SF2401確認状況：D区中央部（東から）

5区北部（東から）

図版17　SF2401畑跡・SD2400区画溝跡

層）が認められることから、ＳＦ2401は耕作時あるいはそれに近い頃に火山灰が降灰して廃絶し、その後まもなく洪水によって畝が失われたとみられる。こうした畑跡は、５区北東部の調査区西側壁面でも確認されており（ＳＦ1469）[註1]、一連の遺構と考えられる。灰白色火山灰に覆われた畑跡は、４区とＡ・Ｂ区（ＳＦ1334・1593）でも確認しており、ＳＤ1100河川跡の両岸で畑跡が検出されたことになる。

ＳＤ2400とＳＤ2027は、規模や堆積土の状況から同じ遺構と考えられる。ＳＤ2027とＳＤ1100河川跡は、間に一時的な流路（ＳＤ2026）が介在するが、河川西岸の畑区画溝が河川と接続していることからみて、両者は本来接続していたと考えられる。ＳＦ2401の耕作痕は区画溝とＳＤ1100の縁辺付近まで密接に認められ、方向は河川に対してほぼ直交する。耕作域の規模は、東西が25～30m、南北は298m以上である。耕作痕は上幅60～80㎝、下幅40～50㎝、深さ20㎝前後、溝中心間の距離は1.2～1.5mで、底面に凹凸がある。

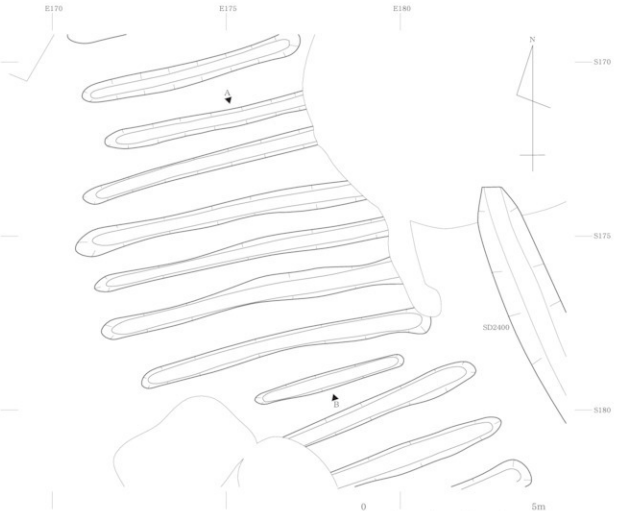
ＳＤ2400区画溝跡は上幅1.2～1.8m、下幅0.7～0.9m、深さは0.7～0.9mある。検出総長は、南北278mになり、Ｄ区北部で東へ分岐する（ＳＤ2402）。底面は平坦で、断面形は下部が箱形、上部が逆台形である。方向はＮ－15°～20°－Ｗである。堆積土は４層に大別できる。４層は壁の崩落土や砂を主体とする機能時の水性堆積、３層は灰白色火山灰層の１次堆積、２層は水成堆積で灰白色火山灰の２次堆積を顕著に含む層、１層は基本層序の第Ⅴ・Ⅳ層に対応し、ＳＤ1100河川跡の氾濫によって短時間に形成された層と考えられる。２層から土師器坏（図版20）が出土した。

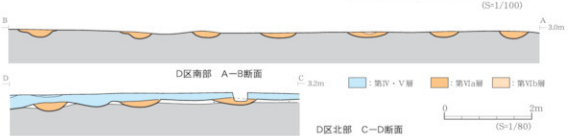
【ＳＸ2030土器集積遺構・ＳＤ2026流路跡】（図版21）

ＳＤ2026は、Ｄ区南端で確認した流路跡である。ＳＤ1100から東へ分岐し、ＳＤ2027区画溝跡より新しい。堆積土は褐色や灰黄褐色のシルト・砂である。ＳＤ1100の氾濫によって一時的に形成された流路跡と考えられる。

ＳＸ2030は、ＳＤ2027区画溝跡の屈曲部で認められた土器集積遺構である。ＳＤ2027が灰白色火山灰の降灰で埋まったのちの凹地から土器食器が口縁部を上にして出土しており、その後洪水で埋没する。食器類は高台椀を除いて残存率が高く、22点の坏は完形のまま置かれたと考えられる（図版22～24）。出土位置やその状況からみて、火山灰降灰後に祭祀もしくは飲食儀礼が行なわれ、その場で使用された食器が廃棄された跡と考えられる。赤焼土器小型坏のなかには、底部が穿孔されたものが１点（15）あり、廃棄時に穴が開けられたと考えられる。

土師器坏（１～10）・高台椀（11）・長胴甕（21）、赤焼土器小型坏（13・17～20）・坏（12・14～16）、須恵器（23～25）、製塩土器（22）が出土している。土師器・赤焼土器・須恵器のいずれも回転糸切りで、再調整は認められず、体部下半に膨らみを持つ椀形の器形である。底面に回転糸切りののちスノコ状圧痕が認められるものがある（１・７・14・25）。赤焼土器や須恵器の中には内面に顕著なコテナデが認められるものがある（13・18～20）。須恵器は焼成が不充分であり、灰白色・軟質で、内外に黒斑が認められる。土師器坏・椀の内面は、ミガキの幅が広く、ミガキのない部分があったりと仕上げが雑である。土師器の中には口縁部に顕著な使用痕が認められるものがある（２・３）が、赤焼土器や須恵器は土師器ほどの使用痕は観察できない。また、灯明皿として使用された15の小

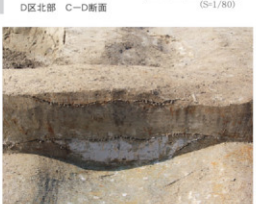




D区南部　A－B断面

D区北部　C－D断面

SF2401断面写真：D区中央部

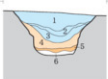


SF2401、SX2403断面写真：D区中央部

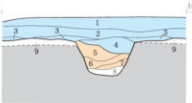
図版18　SF2401畑跡

5区北部　E－F断面写真（南から）

D区中央部　G－H断面写真（北から）

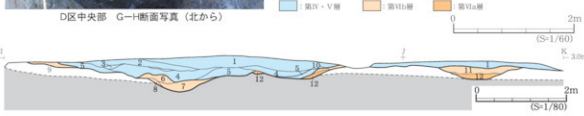


No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルト		
2	褐色(10YR4/6)砂質シルト		
3	にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質シルト		
4	灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト	第VIa層ブロックを大量に含む	第VIb層
5	灰白色(10YR8/1)火山灰		第VIa層
6	灰黄色(10YR6/2)粘土質シルト		



No.	土色・土性	混入物など	備　考	
1	にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト			
2	にぶい黄橙色(10YR5/4)細砂		第IV-V層	
3	灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト			
4	灰黄褐色(10YR6/2)シルト	第VI層-第VII層シルトの混合		SX2403堆積土
5	灰黄褐色(10YR4/2)細砂	第VI層をラミナ状に含む		
6	褐灰色(10YR6/1)シルト	第VI層をラミナ状に含む	第VIb層	SD2400堆積土
7	褐灰色(10YR6/1)砂	第VI層ブロックを含む		
8	褐灰色(10YR5/1)シルト	第VI層砂をラミナ状に含む		
9	灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト		第VIa層	古代の旧表土

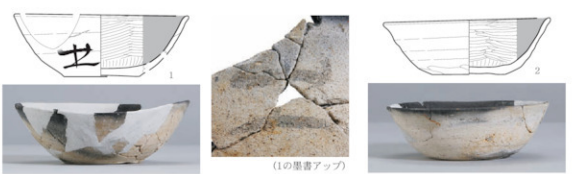
第IV・V層　第VIb層　第VIa層



No.	土色・土性	混入物など	備　考	
1	にぶい黄橙色(10YR5/4)細砂			
2	にぶい黄橙色(10YR4/3)粘砂			
3	2層	第VI層シルトブロックを多量に含む		
4	灰黄褐色(10YR5/2)粘砂		第IV-V層	SX2403堆積土
5	にぶい黄橙色(10YR6/3)砂	第VI層シルトブロックを多量に含む		
6	灰白色(10YR7/1)シルト	第VI層ブロックを含む	第VIb層	SD2400堆積土

No.	土色・土性	混入物など	備　考	
7	褐灰色(10YR6/1)シルト	第VI層シルト粉を多量に含む		SD2400堆積土
8	褐灰色(10YR5/1)細砂	第VI層ブロックを含む		
9	灰白色(10YR7/1)シルト	第VI層シルトブロックを含む	第VIb層	
10	灰白色(10YR7/1)シルト			
11	褐灰色(10YR6/1)シルト			SD2402堆積土
12	第VI層		第VIa層	

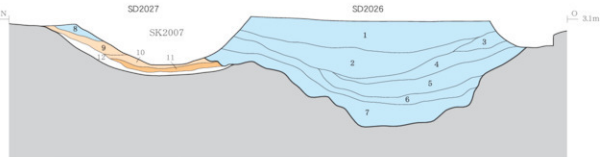
図版19　SD2400区画溝跡



（単位：cm）

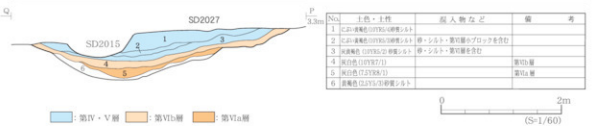
No.	出土層位	種　別	器　種	特　徴	登　録
1	2層	土師器	杯	口径(14.6)　底径6.2　器高5.1　残存：3/5　ロクロナデ　底部：回転糸切　内：ヘラミガキ→黒色処理　体部に墨書「出」	030990
2	2層	土師器	杯	口径(13.9)　底径6.0　器高4.6　残存：4/5　ロクロナデ　底部：回転糸切　内：ヘラミガキ→黒色処理	04536

図版20　SD2400区画溝跡出土遺物



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐色(10YR4/4)砂質シルト		SD2026埋積土
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質砂	礫七層・砂を含む	
3	にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト		
4	にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト		
5	にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質シルト	砂・シルトの互層	
6	にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト	第VI層ブロックを含む	

No.	土色・土性	混入物など	備考
7	灰黄褐色(10YR6/2)シルト	第VI層ブロックを多量に含む	SD2026埋積土
8	灰黄褐色(10YR6/2)シルト	第VI層・砂・シルトのブロックがカクハン状に堆積	
9	灰白色(10YR8/1)	第VI層	SD2027埋積土
10	灰白色(10YR8/1)	第VI層	
11	灰白色(7.5YR8/1)	第VI層	
12	黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルト	第VI層がブロックを含む	



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト		
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト	砂・シルト・第VI層ブロックを含む	
3	灰黄褐色 (10YR5/2)砂質シルト	砂・シルト・第VI層を含む	
4	灰白色(10YR7/1)		第VIb層
5	灰白色(7.5YR8/1)		第VIa層
6	黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルト		

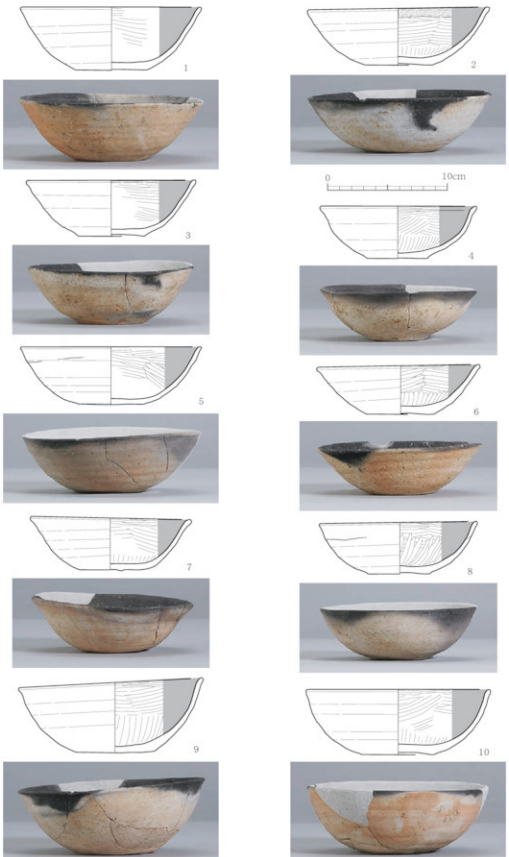
N—O 断面写真（西から）

SX2030土器出土状況1

Q—P 断面写真（東から）

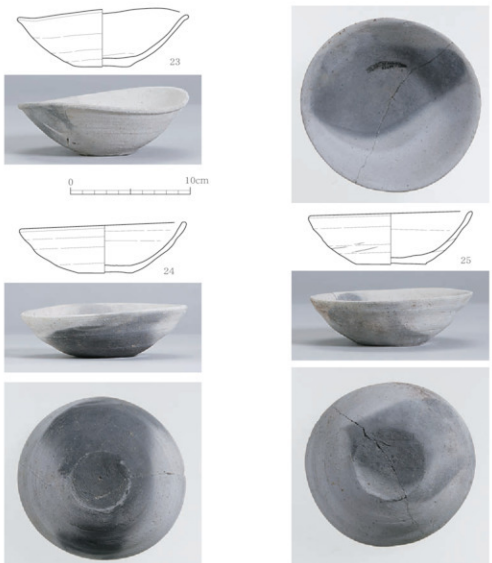
SX2030土器出土状況2

図版21　SD2027溝跡・SX2030土器集積遺構・SD2026流路跡



図版22　SX2030土器集積遺構出土遺物（1）

図版23　SX2030土器集積遺構出土遺物（2）



（単位：cm）

No.	種別	器種	特徴	登録
1	土師器	坏	口径15.1　底径6.0　器高5.3　残存：ほぼ完形　ロクロナデ　底：回転糸切→スノコ状圧痕　内：ヘラミガキ→黒色処理	03024
2	土師器	坏	口径15.2　底径5.6　器高(4.8)　残存：9/10　ロクロナデ　底：回転糸切　内：ヘラミガキ→黒色処理	03027
3	土師器	坏	口径14.2　底径5.5　器高4.7　残存7/10　ロクロナデ　底：回転糸切　内：ヘラミガキ→黒色処理	03026
4	土師器	坏	口径13.1　底径4.9　器高4.4　残存：7/10　ロクロナデ　底：回転糸切　内：ヘラミガキ→黒色処理	03029
5	土師器	坏	口径15.1　底径5.6　器高4.8　残存：2/5　ロクロナデ　底：軽い手持ちケズリ　内：ヘラミガキ→黒色処理	03028
6	土師器	坏	口径13.5　底径5.6　器高(4.1)　残存：完形　ロクロナデ　底：回転糸切　内：ヘラミガキ→黒色処理	03031
7	土師器	坏	口径13.4　底径(5.2)　器高(4.3)　残存：9/10　ロクロナデ　底：回転糸切→スノコ状圧痕　内：ヘラミガキ→黒色処理	03025
8	土師器	坏	口径13.2　底径5.2　器高(4.3)　残存：3/5　ロクロナデ　底：回転糸切　内：ヘラミガキ→黒色処理	03033
9	土師器	坏	口径15.4　底径5.5　器高(5.8)　残存：ほぼ完形　ロクロナデ　底：回転糸切　内：ヘラミガキ→黒色処理	03030
10	土師器	坏	口径(15.9)　底径6.0　器高5.4　残存：3/5　ロクロナデ　底：回転糸切　内：ヘラミガキ→黒色処理	03032
11	土師器	高台椀	口径(15.8)　高台径(8.0)　器高5.6　残存：1/4　ロクロナデ　底：回転糸切→ロクロナデ　内：ヘラミガキ→黒色処理	03034
12	赤焼土器	坏	口径(13.4)　底径(5.6)　器高(4.1)　残存：完形　内外：ロクロナデ　底：回転糸切	03039
13	赤焼土器	小型坏	口径(11.2)　底径4.9　器高(3.4)　残存：完形　ロクロナデ　底：回転糸切　内：ロクロナデ→コテナデ	03042
14	赤焼土器	坏	口径14.2　底径4.8　器高4.9　残存：3/5　ロクロナデ　底：回転糸切→スノコ状圧痕　内：ロクロナデ	03038
15	赤焼土器	坏	口径(12.9)　底径4.4　器高(3.4)　残存：完形　内外：ロクロナデ　底：回転糸切　灯明痕　底部に穿孔	03037
16	赤焼土器	坏	口径(12.8)　底径5.8　器高(3.4)　残存：4/5　内外：ロクロナデ　底：回転糸切→手持ちケズリ	03040
17	赤焼土器	小型坏	口径(12.2)　底径4.4　器高(3.4)　残存：完形　内外：ロクロナデ　底：回転糸切	03043
18	赤焼土器	小型坏	口径(11.9)　底径4.8　器高(3.2)　残存：完形　ロクロナデ　底：回転糸切　内：ロクロナデ→コテナデ	03045
19	赤焼土器	小型坏	口径11.7　底径4.7　器高2.9　残存：4/5　ロクロナデ　底：回転糸切　内：ロクロナデ→コテナデ	03044
20	赤焼土器	小型坏	口径11.8　底径4.4　器高3.3　残存：完形　ロクロナデ　底：回転糸切　内：ロクロナデ→コテナデ	03041
21	土師器	甕	口径(23.0)　残存：一部　ロクロナデ→ヘラケズリ	03035
22	製塩土器			03036
23	須恵器	坏	口径(14.2)　底径4.6　器高(4.5)　残存：3/5　ロクロナデ　底：回転糸切　内：再ロクロナデ	03048
24	須恵器	坏	口径(13.9)　底径4.6　器高(4.0)　残存：完形　内外：ロクロナデ　底：回転糸切	03046
25	須恵器	坏	口径(13.6)　底径5.7　器高(4.3)　残存：完形　内外：ロクロナデ　底：回転糸切→スノコ状圧痕	03047

図版24　SX2030土器集積遺構出土遺物（3）

SF1916・SF2401（東から）

SF1916、SD1911（北から）

図版25　SF1916水田跡

型坏は、内面に油煙状付着物が認められ、底部に外から穿孔されている。

【ＳＦ1916水田跡、ＳＤ1911水路跡】（図版25・26）

５区北部で確認した。耕作域は北・西・南をＳＤ1911水路跡によって区画されており、東は調査区外へ延びる。規模は東西9.5m以上、南北51.0mである。耕作土や畦畔が確認できたのはその南西隅で、他は後世の削平で失われている。ＳＤ1911の東には幅1.0～2.0mの畦がつくられている。

小区画の水田跡を２区画確認した。残りの良い方の規模は、東西7.3m以上、南北12.0mで、面積は87.6㎡以上ある。耕作土は褐灰色砂質シルトで、厚さは10㎝ほどあり、下面は凹凸がある。

ＳＤ1911は南北51.0m、東西は北辺で9.0m、南辺で10.6m分を検出した。上幅1.3～1.7m、下幅0.6～0.7m、深さは0.3～0.6mあり、断面形は皿形、方向は西辺でＮ－５°－Ｅ前後である。堆積土は４層に大別できる。４層は機能時の水成堆積、３層は灰白色火山灰の１次堆積、２層は水成堆積で灰白色火山灰の２次堆積を顕著に含む層、１層は基本層序の第Ⅴ・Ⅳ層に対応し、ＳＤ1100河川跡の氾濫によって短時間に形成された層と考えられる。

本水田跡は、ＳＦ2401畑跡やＳＤ2400区画溝跡とは方向が大きく異なる。また、ＳＤ1911の南西コーナーがＳＤ2400と0.6m前後ときわめて近接することから、ＳＦ1916水田跡とＳＦ2401畑跡は、同時に機能せず時期差があると考えられる。

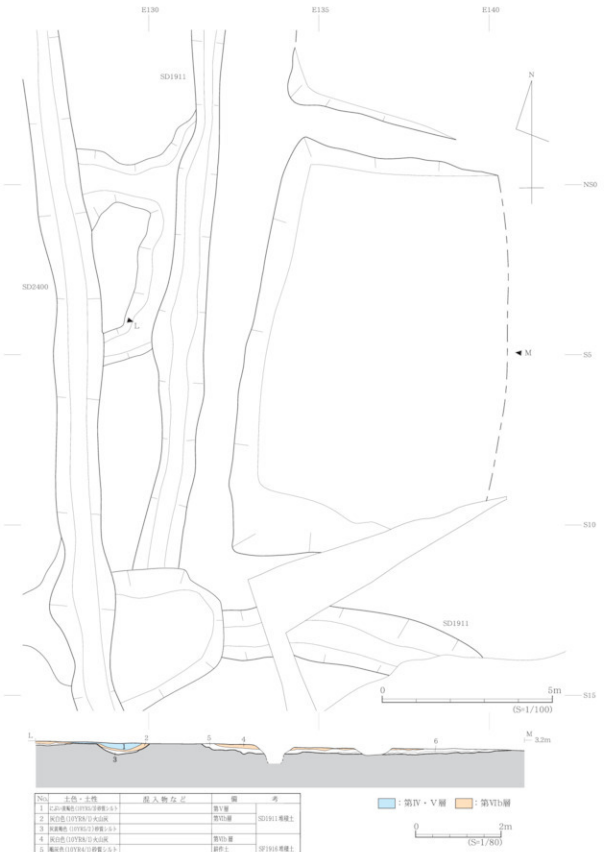
（３）第Ⅴ層検出遺構

【ＳＦ1470畑跡】（図版27・29）

５区北東部の調査区西側壁面で検出した畑耕作痕である。耕作痕は上幅50㎝、下幅30㎝、深さ15㎝前後、溝中心間の距離は0.8mである。

【ＳＦ1919畑跡】（図版28）

５区北部で耕作痕を６条確認した。方向はＥ-15°-Ｓで、耕作域は東西8.1m、南北8.9mほどである。ＳＦ1470とは一連の遺構である可能性がある。耕作痕は上幅60～70㎝、下幅30～40㎝、深さ10㎝前後、溝中心間の距離は1.4～1.6mで、底面に凹凸がある。第Ⅴ層の畑跡は、ＳＤ1100西岸でも確認しており（ＳＦ1303・1333）、ＳＤ1100河川跡の両岸で畑跡が検出されたことになる。第Ⅴ層の畑は、ＳＦ1303が第Ⅶ層で非耕作域、ＳＦ1919が第Ⅶ層で水田耕作域であったところにつくられていること

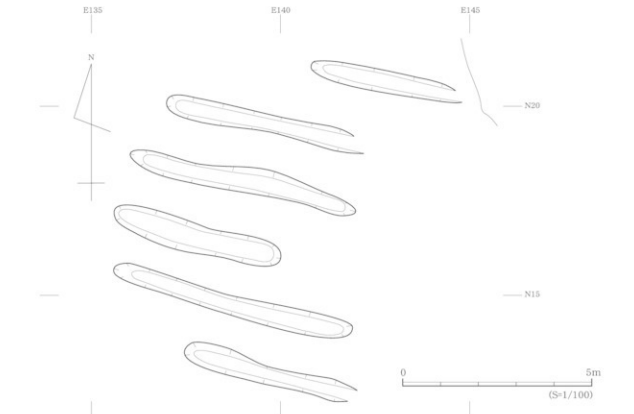


図版26　SF1916水田跡・SD1911水路跡

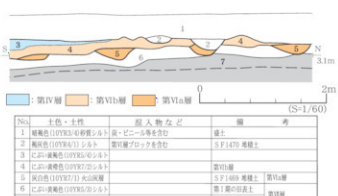
図版27　第Ⅴ層の検出遺構

から、灰白色火山灰の前と後では土地利用のあり方が異なる。

（註１）５区北東部は、遺構確認面が他と較べて30cm低いため、ＳＦ1469・1470は調査区壁面での確認に止まった。



図版28　SF1919畑跡



No.	土色・土性	混入物など	備考	
1	暗褐色(10YR3/4)砂質シルト	炭・ビニール等を含む	盛土	
2	褐灰色(10YR4/1)シルト	第Ⅵ層ブロックを含む	SF1470 堆積土	
3	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト			
4	にぶい黄色(10YR7/2)シルト		第Ⅵb層	
5	灰白色(10YR7/1) 火山灰層		SF1469 堆積土	第Ⅵa層
6	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト		第Ⅰ層の旧表土	
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト			第Ⅶ層

SF1469・1470畑跡耕作痕断面写真　（東から）

図版29　SF1470畑跡

2．中世・近世

５区は、３・４区とＳＸ1200遺物包含層を挟んだ東にあり、住宅地区全体からみて東半部に位置する。Ｄ区は、５区と東西に走る市道を挟んで南側、Ａ区とはＳＸ1397遺物包含層を挟んで東側にある。５区、Ｄ区で発見した中・近世の遺構は、区画溝跡のほか掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、溝跡などである（図版30）。Ｂ区は、屋敷の区画溝跡を反映した凹地によって３区に大別している。『Ⅱ』で西半部を報告しており、今回報告するのは残った東半部（Ｂ２・Ｂ３区の東部）である。中・近世の遺構は掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、溝跡などを確認した（図版31）。

図版30　検出した主な中・近世遺構（1）

図版31　検出した主な中・近世遺構（2）

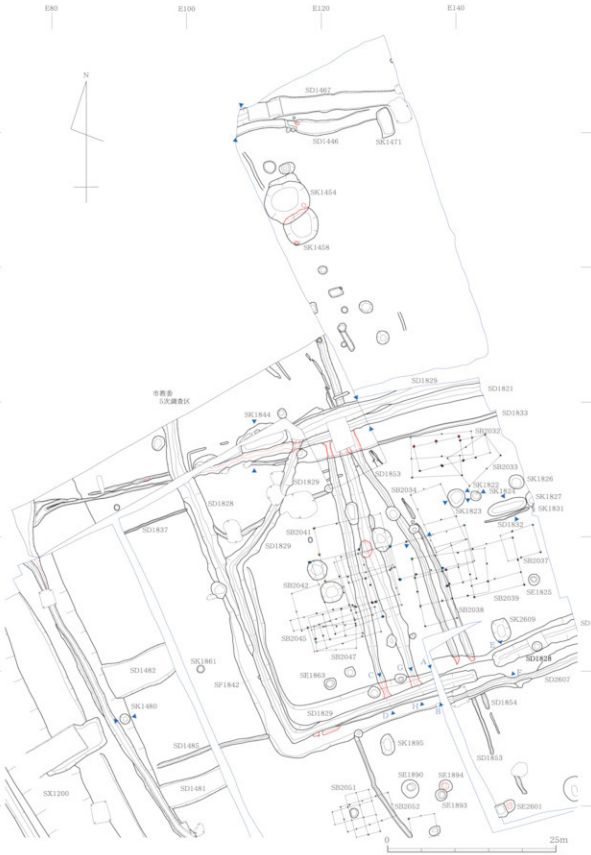
中・近世の遺構は、第Ⅳ・Ⅴ層で確認した。これらの記述は、区画溝跡や遺物包含層といった、複数の調査区にまたがるものから行い、個別の遺構は調査区ごとに述べることとする。

（１）区画溝跡

一定の範囲を区画する溝跡である。『Ⅲ』までの検討で幅が2.5m前後を超えるものは区画溝と考えられる。これに加えＤ区南端では東西39.0m以上、南北26.0mの範囲を画する幅0.8m前後の区画溝跡を確認した。

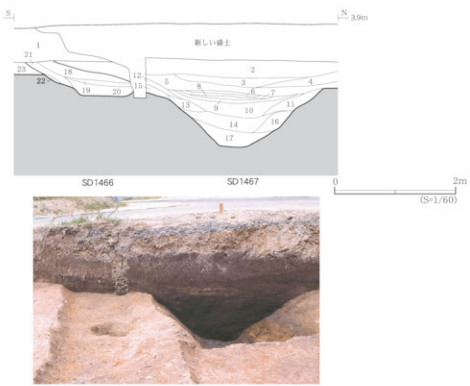
【ＳＤ1466区画溝跡】（図版32・34）

５区北端で確認した東西溝跡で長さ17.1m分を検出した。ＳＤ1467区画溝跡より古い。調査区西壁



図版32　5区北東部の検出遺構

図版33　５区北東隅の検出遺構（北から）　手前がSD1466・1467



断面（東から）

No.	土色・土性	混入物など	備　考
1	褐灰色(10YR5/1)砂質シルト		盛土
2	褐灰色(10YR6/1)砂質シルト		
3	褐灰色(10YR6/1)粘土質シルト		
4	褐灰色(10YR6/1)シルト		
5	褐灰色(10YR5/1)砂質シルト		
6	灰褐色(10YR5/2)砂		
7	褐灰色(10YR4/1)粘土		SD1467 堆積土
8	灰褐色(10YR5/2)砂		
9	褐灰色(10YR4/1)粘土		
10	褐灰色(10YR4/1)粘土		
11	にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト		
12	にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト		

No.	土色・土性	混入物など	備　考
13	にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト		
14	褐灰色(10YR4/1)粘土	炭化物・砂ブロックを含む	
15	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		SD1467 堆積土
16	褐灰色(10YR4/1)粘土	炭化物・砂ブロックを多量に含む	
17	黒褐色(10YR3/2)砂質シルト	地山・にぶい黄褐色土・砂ブロック含む	
18	にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト		
19	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト		
20	褐灰色(10YR4/1)粘土		SD1466 堆積土
21	にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト		
22	にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト		
23	褐灰色(10YR5/1)シルト	地山ブロックを含む	

図版34　SD1466・1467区画溝跡

で測ると上幅は2.1m以上、下幅0.8m、深さは0.6mある。底面は平坦で、断面形は逆台形である。方向はE－0°～8°－Nである。堆積土は５層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。確認面から龍泉窯系青磁鎬蓮弁文椀が出土している。

【ＳＤ1467区画溝跡】（図版32・34）

５区北端で確認した東西溝跡で長さ21.0m分を検出した。ＳＤ1466区画溝跡より新しい。調査区西壁で測ると上幅4.7m以上、下幅0.5m、深さは1.4mある。方向はE－2°～7°－Nである。上幅に比べて下幅が非常に狭く、断面形は薬研形に近い。堆積土は16層に分けられるが、いずれも自然堆積とみられる。堆積土から陶器、磁器、染付、砥石（図版38－10）が出土している。

【ＳＤ1828区画溝跡】（図版32・35～37）

５区北東部で確認した西端が北に折れるＬ字形の溝跡である。東西45.5m、南北42.3m分を検出した。ＳＫ1899土壙、ＳＤ1840・1845溝跡より新しく、ＳＤ1829区画溝跡、ＳＤ1830・2607溝跡、ＳＦ1842水田跡より古い。上幅2.3m、下幅0.8m、深さは0.6～1.0mある。断面形は逆台形である。堆積土は６層に分けられるが、いずれも自然堆積と考えられる。

遺構の特徴や出土遺物から、５区北端で検出したＳＤ1466区画溝跡と一連の遺構と考えられる。その場合、ＳＤ1466・1828は、東西45.0m以上、南北81.0～85.0mの範囲を画することになり、これを**区画Ⅰ**と呼ぶこととする。

遺物は底面や堆積土から出土している（図版38）。底面からは青磁椀（６）、連歯下駄（13）、４・５層から常滑産片口鉢（８）・甕（３・７・９）、在地産甕、青磁椀（５）、かわらけ、漆椀、曲物、茶臼（上臼）（11）、鉄滓（15）やイヌの頭骨、２層から常滑産甕、石臼（上臼）、転用砥（２）やウマ下顎骨・歯、１層から常滑産片口鉢・甕（４）、ロクロかわらけ、砥石、鉄鏃（14）が出土している。

【ＳＤ1829区画溝跡】（図版32・35～37）

５区北東部で確認したＬ字形の溝跡である。西辺北側は東へ折れるため、南辺と北辺の長さが異なる。東西は南辺で45.5m、北辺で29.1m、西辺は南西コーナーから北へ29.6mの地点で東へ折れ、さらに25.2m延びて北辺と接する。また、南辺は南西隅から東へ29.0mの地点に幅3.0mの土橋（ＳＸ1902）が設けられる。ＳＤ1828区画溝跡、ＳＫ1852・1899土壙、ＳＤ1821・1840・1845溝跡より新しく、ＳＤ1830・1838溝跡、ＳＥ2611井戸跡、ＳＦ1842水田跡より古い。上幅2.1～2.8m、下幅0.8～1.5m、深さは0.6～0.9mある。断面形は逆台形である。堆積土は５層に分けられるが、いずれも自然堆積と考えられる。ＳＤ1829は東西が南側で45.0m以上、南北は40.0mの範囲を画しており、これを**区画Ｊ**と呼ぶこととする。

遺物は堆積土から出土したが、ＳＤ1828に較べて量が少ない（図版38）。４層からロクロかわらけや折敷？、３層から常滑産甕、かわらけや砥石、２～３層から砥石、２層からかわらけ、茶臼（下臼）（12）や砥石、１層から常滑産甕、ロクロかわらけ、白磁椀（１）、砥石が出土している。

【ＳＤ1494区画溝跡】（図版39・41）

５区南部で確認した西端が南に折れるＬ字形の溝跡である。東西61.9m、南北27.0m分を検出した。

図版35　区画J 空中写真　上が北

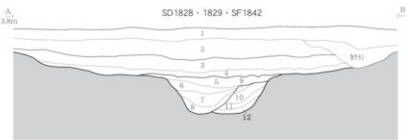
SD1829南辺中央部付近（東から）

SD1828・1829南辺調査風景（南から）

SD1828 4・5層茶臼出土状況

SD1828 4・5層イヌ下顎骨出土状況

図版36　SD1828・1829区画溝跡



A－B 断面アップ（西から）

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)シルト		第1a層
2	暗褐色(10YR3/3)シルト	黒色土・地山ブロックを含む	第1c層
3	褐灰色(10YR4/1)シルト	黒色粘土ブロックを含む	耕作土
4	黄灰色(2.5Y4/1)シルト	黒色粘土ブロックを含む	床土
5	黒褐色(2.5Y3/1)シルト		自然堆積
6	褐灰色(7.5YR4/1)シルト		

SF1842 堆積土

SD1829－1層

SD1829－2層

No.	土色・土性	混入物など	備考
7	褐灰色(10YR4/1)粘土		自然堆積
8	黄灰色(2.5Y4/1)炭質粘土	炭を含む	
9	にぶい黄色(10YR4/3)シルト		
10	褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土	地山ブロック状を含む	
11	黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト		
12	暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質砂	地山ブロックを含む	

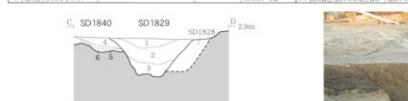
SD1829－3層

SD1829－2層

SD1829－3層

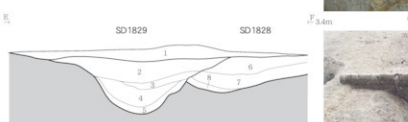
SD1828－4層

SD1828－5層



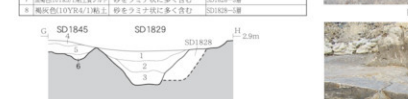
C－D 断面写真（西から）

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	炭化物や地山ブロックを含む	SD1829－2層
2	褐灰色(10YR4/1)粘土	砂をラミナ状に含む	SD1829－3層
3	黄灰色(2.5Y4/1)粘土		SD1829－5層
4	黒褐色(10YR3/2)シルト	炭化物や地山ブロックを含む	
5	黄灰色(2.5Y4/1)シルト	粘土をラミナ状に含む	SD1840堆積土
6	暗黄灰色(2.5Y5/2)シルト		



E－F 断面写真（西から）

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト		SD1829堆積土
2	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	地山ブロックを多量に含む	SD1829－2層
3	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む	SD1829－3層
4	黒褐色(10YR3/1)粘土	炉の薄層を多く含む	SD1829－4層
5	黄灰色(2.5Y4/1)砂	粘土をラミナ状に含む	SD1829－5層
6	黒褐色(10YR3/2)シルト	地山ブロックを多く含む	SD1828－1層
7	黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト	砂をラミナ状に多く含む	SD1828－3層
8	褐灰色(10YR4/1)粘土	砂をラミナ状に多く含む	SD1828－5層



G－H 断面写真（西から）

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	炭化物や地山ブロックを含む	SD1829－2層
2	褐灰色(10YR4/1)粘土	砂をラミナ状に含む	SD1829－3層
3	黄灰色(2.5Y4/1)粘土	炭(炉)を含む	SD1829－5層
4	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山ブロックを多量に含む	人為堆積
5	褐灰色(10YR4/1)粘土	砂をラミナ状に含む	SD1845堆積土
6	暗灰黄色(2.5Y4/2)砂	褐灰黄色粘土ブロックを含む	

0　2m
(S=1/60)

図版37　SD1828・1829区画溝跡断面

(単位：cm)

No.	出土遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	登　録
1	SD1829 1層	白磁	椀			03082
2	SD1828 2層	転用硯			須恵器壺の破片を硯石に転用	03078
3	SD1828 4・5層	陶器	壺	常滑	押印(重伏)	03077
4	SD1828 1層	陶器	壺	常滑	押印(重伏+×)	03079
5	SD1828 4・5層	青磁	椀		内：櫛描花弁文(蓮弁)	05191
6	SD1828 底面	青磁	椀			05183
7	SD1828 4・5層	陶器	壺	常滑	押印(屋敷+斜格)	05184
8	SD1828 4・5層	陶器	片口鉢	常滑	高台径(12.0)　残存：一部　外：回転ケズリ　高台接合後回転ナデ　内：回転ナデ	05185
9	SD1828 4・5層	陶器	壺	常滑	押印(菊花状)	05189
10	SD1467 掘削土	石製品	硯石		長(9.5)　幅(4.5)　厚1.6	02356
11	SD1828 4・5層	石製品	茶臼(上臼)		径(18.2)　高6.7　挽手穴2.7×2.7　造り出し部6.6×(6.4)　残存：一部	05190
12	SD1829 2層	石製品	茶臼(下臼)		最高(10.5)　残存：一部	03177
13	SD1828 底面	木製品	漆椀下駄		長(18.3)　幅(10.1)　高5.0　残存：2/3	05211
14	SD1828 1層	鉄製品	鏃		長(2.5)　幅・厚0.6	03211
15	SD1828 4・5層	鉄滓				05192

図版38　SD1467・1828・1829区画溝跡出土遺物

ＳＤ1495・1801溝跡より新しく、ＳＫ1764土壙より古い。上幅2.5～3.4m、下幅0.9～1.2m、深さは0.8～1.1mある。断面形は逆台形である。堆積土は６層に分けられるが、いずれも自然堆積と考えられる。

遺構の特徴や出土遺物から、Ｄ区北端で検出したＳＤ1756・2301区画溝跡と一連の遺構と考えられる。その場合、ＳＤ1494・1756・2301は、東西65.0m以上、南北53.0～61.0mの範囲を画することになり、これを**区画Ｈ**と呼ぶこととする。

遺物は堆積土から出土した（図版42）。４層から在地産甕や転用砥（９）、３層から陶器碗・擂鉢、渥美産甕、転用砥（８）、砥石（14）や折敷？、２層から志野織部陶器丸皿（１）、陶器碗・鉢、常滑産甕（６）、転用砥（11）、砥石（12）やウマ歯、１層から瀬戸美濃産陶器輪禿皿（３）、陶器碗・小皿・擂鉢、染付碗・皿、磁器碗、常滑産甕（５）、龍泉窯系青磁椀（７）、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文椀（10）、白磁椀（４）、茶臼、砥石（13）、鉄鎌（17）や鉄滓（16）、堆積土から肥前産陶器大皿（２）、常滑産甕、渥美産甕、差歯下駄（15）、不明木製品、砥石やウマ上／下顎歯が出土している。

【ＳＤ2301区画溝跡】（図版40）

Ｄ区北東部で確認した東西溝跡である。東西38.8m分を検出した。現在の濠と重複しており、その底と南岸の一部を確認したのに止まる。ＳＤ2363区画溝跡、ＳＥ2256井戸跡、ＳＫ2271土壙、ＳＤ2360溝跡より新しい。上幅は2.0m以上、深さは0.7m以上あり、断面形は逆台形とみられる。堆積土は自然堆積と考えられる。

遺構の特徴や出土遺物から、５区南部で検出したＳＤ1494区画溝跡、Ｄ区北部で検出したＳＤ1756区画溝跡と一連の遺構と考えられる。また、調査区際となるため詳細を確認できなかったが、ＳＤ2364区画溝跡と接続する可能性がある。

遺物は堆積土から出土した（図版43）。下層からは漆椀（10）や木製の部材、上層から切込産とみられる磁器碗（１）、陶器徳利・蓋（３）・鉢・大皿（４）・甕（２）・ひょうそく（８・９）、鉄釘や砥石、堆積土から陶器碗・鉢（６）・擂鉢、染付徳利、磁器小坏、常滑産甕（７）や龍泉窯系青磁盤（５）、確認面から龍泉窯系青磁椀や常滑産甕などが出土している。

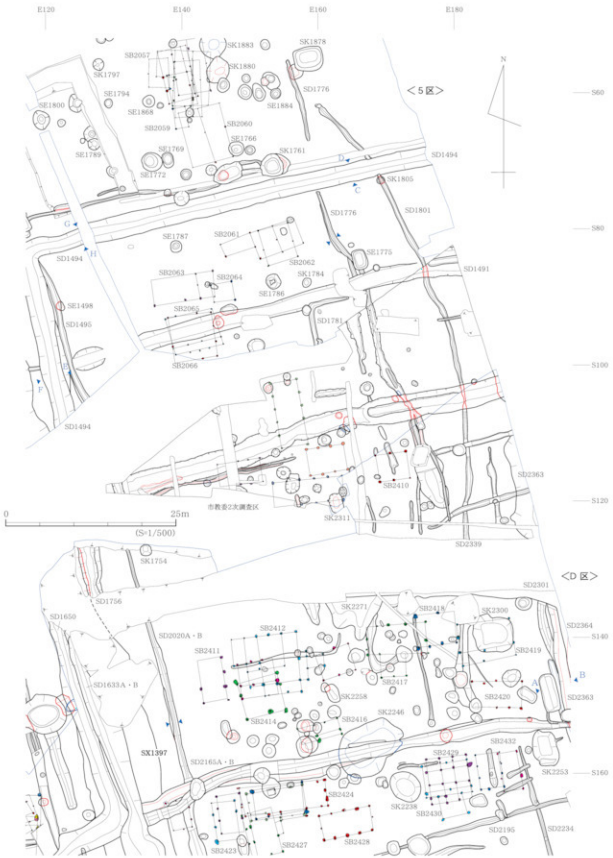
【ＳＤ2363区画溝跡】（図版40～42）

Ｄ区北東端で確認した南北溝跡である。南北50.8m分を検出した。ＳＤ2362溝跡より新しく、ＳＤ2301・2364区画溝跡、ＳＥ2361井戸跡、ＳＤ2366溝跡より古い。上幅2.5m以上、下幅1.0m前後、深さは0.8mある。断面は逆台形である。堆積土は５層に分けられ、自然堆積（２～４層）ののち埋め戻される（１層）。

遺物は堆積土から常滑産片口鉢・壺・甕（３・６・８）、渥美産甕（７）、在地産片口鉢（４）・壺（５）・甕、ロクロかわらけ皿・小皿、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文椀（１・２）、転用砥（９）やウマ上顎歯、ウシ下顎歯が出土している（図版44）。

【ＳＤ2364区画溝跡】（図版40・41）

Ｄ区北東端で確認した南北溝跡である。南北25.2m分を検出した。調査区際で確認したため、幅や

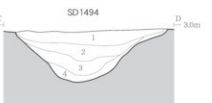


図版39　5区南部～D区北部の検出遺構

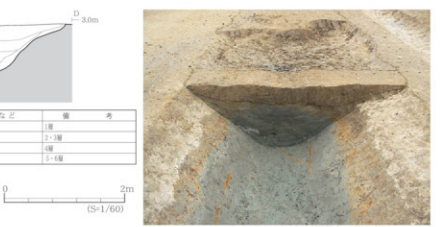
図版40　D区中央部～南部の検出遺構

SD2363　A－B 断面写真（南から）

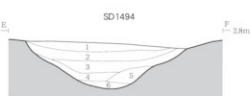
No.	土色・土性	混入物など	備考
1	にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト	焼土主体	入為堆積
2	灰黄褐色(10YR5/2)シルト	鬱砂を多量に含む	
3	褐灰色(10YR4/1)シルト	鬱砂をラミナ状に多く含む	SD2363埋土
4	暗褐色(10YR3/3)粘土	植物遺体を含む	
5	暗褐(10YR3/2)粘質シルト	鬱砂ブロックを含む	
6	黒褐色(10YR3/1)シルト	地山ブロックを多く含む	SK2358埋土
7	灰黄褐色(10YR4/2)粘土	鬱砂をラミナ状に多量含む	
8	黒褐色(10YR2/2)シルト		SD2362埋土
9	黒褐色(10YR3/2)粘質シルト	地山ブロックを含む	



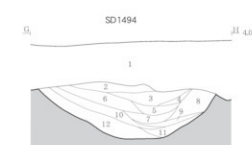
No.	土色・土性	混入物など	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)シルト	均質	1層
2	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	砂をラミナ状に含む	2・3層
3	黒褐色(10YR2/1)粘土		4層
4	灰黄褐色(10YR4/2)粘土		5・6層



SD1494　C－D 断面写真（北から）



No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR6/1)シルト		
2	黒褐色(10YR3/2)粘土		
3	黒褐色(10YR3/1)粘土		
4	黒褐色 (10YR3/2　地土質)シルト		
5	褐灰色(10YR5/1)砂質シルト	地山ブロックを多量に含む	
6	褐灰色(10YR5/1)砂質シルト	地山ブロックを含む	



SD1494東半部（西から）

No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐色(10YR4/4)シルト		第1a層
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト		
3	灰黄褐色 (10YR4/2)シルト		SD1494－1層
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト		
5	褐灰色(10YR4/1)粘土		SD1494－2層
6	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト		
7	褐灰色(10YR4/1)粘土		SD1494－3層
8	にぶい黄褐色 (10YR4/3　シルト		
9	褐灰色(10YR5/1)粘土質シルト		SD1494－4層
10	にぶい黄褐色 (10YR4/3　シルト		
11	褐灰色(10YR4/1)粘土		SD1494－5層
12	にぶい黄褐色 (10YR4/3　シルト	褐灰色土ブロックを含む	SD1494－6層

図版41　SD1494・2363・2364区画溝跡断面

(15：S=1/4)

(単位：cm)

No.	出土層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	登　録
1	2層	陶器	丸皿	志野織部	口径(13.2)　高台径8.4　器高2.2　残存：1/3　内：鉄絵あり　【17c初】	03069
2	堆積土	陶器	大皿	肥前	【17c後半～18c前半】	02106
3	1層	陶器	輪花皿	瀬戸美濃	【17c第3/4半期】	03072
4	1層	白磁	椀		浅い沈線	03073
5	1層	陶器	甕	常滑	押印(籠状+×)	03076
6	2層	陶器	甕	常滑	【常滑1b型式期】	03071
7	1層	青磁	椀	龍泉窯系		03075
8	3層	転用紙			押印(籠状)　龍泉産甕の破片を紙石に転用	03067
9	4層	転用紙			在地産甕の破片を紙石に転用	03065
10	1層	青磁	鎬蓮弁文椀	龍泉窯系		03074
11	2層	転用紙			常滑産片口鉢の破片を紙石に転用	03068
12	2層	石製品	紙石		長(8.6)　幅5.9　厚(2.3)	03070
13	1層	石製品	紙石		長(5.8)　幅3.0　厚1.7	03173
14	3層	石製品	紙石		長(8.7)　幅11.2　厚4.5	03066
15	堆積土	木製品	差歯下駄		長(22.0)　幅(7.6)　歯(2.3)　残存：一部	02208・02209
16	1層	鉄滓				03202
17	1層	鉄製品	鎌		長(11.8)　幅(3.7)　厚0.3	03219

図版42　SD1494区画溝跡出土遺物

（単位：cm）

No.	出土層位	種別	器種	産地	特徴	登録
1	上層	染付	碗	切込ヵ	口径(11.6)　高台径(4.0)　器高5.9　残存：2/5　外：縦縞に蝙蝠文　内：蛇の目釉剥ぎ	04537
2	上層	陶器	甕		口径18.2　残存：一部　【18c末以降】	04539
3	上層	陶器	蓋		口径16.0　つまみ径3.8　器高3.0　残存：1/2	04540
4	上層	陶器	大皿			04538
5	堆積土	青磁	蟹ヵ	龍泉窯系	二重沈線	04549
6	堆積土	陶器	鉢			04485
7	堆積土	陶器	甕	常滑	押印(籐状)	04548
8	上層	陶器	ひょうそく		口径4.1　底径5.2　器高7.7　残存：4/5　底部：回転糸切→ナデ	04542
9	上層	陶器	ひょうそく		口径(5.2)　底径5.2　器高6.5　残存：3/4　底部：回転糸切	04543
10	下層	漆器	椀		残存：一部　外・底部：黒色漆塗り　内：赤色漆塗り	04158

図版43　SD2301区画溝跡出土遺物

深さは一部で確認したのに止まる。ＳＤ2363区画溝跡、ＳＤ2165溝跡より新しい。調査区際となるため詳細を確認できなかったが、ＳＤ2301区画溝跡と接続する可能性がある。上幅は5.9m、下幅は3.5mとみられ、深さは0.6mある。断面形は逆台形である。堆積土は４層に分けられるが、いずれも自然堆積と考えられる。

遺物は堆積土から染付碗・皿・壺、陶器碗・鉢（１）・土瓶・擂鉢・甕、軟質施釉土器焙烙、転用砥（２）、瓦、キセル（６）、包丁（８）、不明鉄製品（７）、砥石（３～５）などのほかモミ殻が

（単位：cm）

No.	出土層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	登　録
1	堆積土	青磁	鎬蓮弁文碗	龍泉窯系	【大宰府分類Ⅱ類】	04493
2	堆積土	青磁	鎬蓮弁文碗	龍泉窯系	沈線(単線)	04501
3	堆積土	陶器	甕	常滑	押印(籠状＋斜線)　外：ハケメ状工具を用いたナデ	04495
4	堆積土	陶器	片口鉢	在地	内：ハケメ状工具を用いたナデ	04494
5	堆積土	陶器	壺	在地		04506
6	堆積土	陶器	甕	常滑	【常滑３型式期】	04505
7	堆積土	陶器	甕	製美	押印(籠状)　内：ハケメ状工具を用いたナデ	04503
8	堆積土	陶器	甕	常滑	押印(籠状)	04496
9	堆積土	転用紙			常滑産甕の破片を紙石に転用	04502

図版44　SD2363区画溝跡出土遺物

（単位：cm）

No.	出土層位	種　別	器　種	特　徴	登　録
1	堆積土	陶器	鉢	内：沈線(単線)　鉄絵あり　連続ぎ	04517
2	堆積土	転用紙		大戸産須恵器の長頸壺の破片を紙石に転用	04516
3	堆積土	石製品	紙石	長(7.1)　幅2.4　厚2.0	04514
4	堆積土	石製品	紙石	長(7.1)　幅4.9　厚3.5	04515
5	堆積土	石製品	紙石	長12.4　幅4.9　厚2.6)	04513
6	堆積土	銅製品	キセル(吸い口)	長5.4　口径0.4～1.2　残存：完形	04509
7	堆積土	鉄製品	不明鉄製品	長(4.2)　幅(3.4)　厚0.2	04512
8	堆積土	鉄製品	包丁	刀身：長(7.4)　幅4.7　厚0.3　茎：長(4.3)　幅2.0　厚0.3　残存：4/5	04511

図版45　SD2364区画溝跡出土遺物

多量に出土している（図版45）。

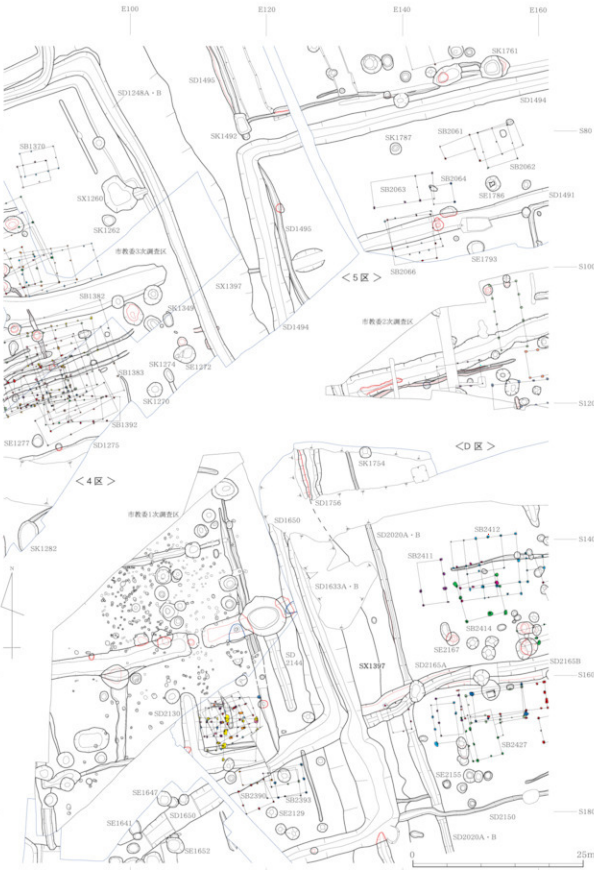
【ＳＤ1633Ａ・Ｂ区画溝跡】（図版46・47）

Ｄ区北西部からＡ区北部で確認したコ字形の溝跡である。２時期の変遷（Ａ→Ｂ）があり、東西57.0m、南北47.0m分を検出した。４区で検出した**区画Ｆ**の溝跡ＳＤ1275・1288と一連の遺構と考えられる。Ｂ期は上幅2.0～3.0m、下幅0.8～1.0m、深さは0.6～0.8mある。断面形は残りのよいところでみると上部が大きく開く逆台形である。堆積土は２層に大別でき、自然堆積（下層）ののち、人為的に埋め戻された（上層）と考えられる。Ａ期は上幅1.7m以上、下幅1.0m前後、深さは0.8～1.0mで、Ｂ期に比べて20㎝ほど深い。断面は逆台形とみられる。堆積土は４～５層に細別できたが、いずれも自然堆積とみられる。

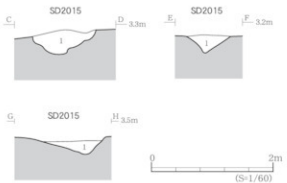
遺構の説明は『Ⅲ』で行ったが、その際遺物の説明は、Ａ区出土品についてのみ行った。Ｄ区では、とくに南東コーナー付近から多量の遺物が出土しており、ここではその概要を述べる（図版48～64）。Ｂ期は底面から瀬戸美濃産陶器皿、磁器碗、鋤（25）、塔婆（24）、下層から肥前産染付小碗（11）・碗・小杯（15）・皿（６）、肥前産青磁皿（10）、肥前産陶器碗・呉器手碗（13・14）・陶胎染付碗（７）・折縁皿（９）・皿（８）、瀬戸美濃産陶器端反皿（４・５）・片口鉢（17）・笠原鉢（19）、志野織部陶器皿（12）、岸産陶器香炉（16）・小甕（20）・猿形水滴（22）、陶器碗・皿・鉢・壺・徳利・擂鉢・小甕、軟質施釉土器花瓶（18）、瓦質土器火鉢（３）、土師質土器灯明皿（１・２）、砥石、硯（21）、漆椀（27・29～39・41～44）・椀蓋（26・40）・皿（28）、白木小皿（45・46）、箸、柄杓（47・48）、曲物側板・底板（49・50）、桶？、横櫛（51）、差歯下駄（57～64）、連歯下駄（52～56）、鋤（75）、横槌（67）、木錘（68）、道具柄（66）、木製部材（65・71・72・78・79）、塔婆（76・77）、不明木製品（69・70・73・74・81）、不明竹製品（80）、籠編物（図版47）、俵（図版47）、不明鉄製品、不明銅製品、巴文軒丸瓦（23）や砥石アカニシ？の殻、同定不能な骨片、マツ種子、モモ核、クルミ核が出土している。

Ｂ期上層からは染付碗・皿・猪口・急須、肥前産陶器碗（83・84）・折縁皿（82）、瀬戸美濃産陶器天目茶碗（85）、志野織部陶器皿（89）、大堀相馬産陶胎染付碗（86）、岸窯系陶器擂鉢（92）、陶器碗・皿・土瓶蓋（88）・鉢・擂鉢・小甕・火鉢、瓦質土器擂鉢（91）・風炉？、堤産軟質施釉土器焙烙（87）、軟質施釉土器花瓶（93）、漆椀（94～99）、砥石（107～111・115・116）、石臼（112・113）、茶臼（114）、硯（106）、鉄釘（100）、キセル（101・102）、ルツボ（90）、鉄滓（103）、差歯下駄（104・105）、瓦、同定不能骨片、モモ核が出土している。

また、Ｄ区ＳＤ1633の堆積土や確認面からは、ロクロかわらけ、常滑産片口鉢（120・121・123・124）・三筋壺（130）・鉢・甕（126・131・132）、渥美産甕（128・129・133）、瀬戸産瓶子（119）・折縁深皿（122）、在地産片口鉢（125）・壺（127）、龍泉窯系青磁盤（117・118）、転用砥（134・135）など中世の遺物が出土している（図版64）。これらは本来、ＳＤ1633と重複するＳＸ1397遺物包含層やＳＤ1650区画溝跡に帰属する遺物と考えられる。



図版46　4・5区～D区北西部の検出遺構



SD1633B底面　塔婆出土状況

SD1633B下層　漆椀出土状況

SD1633B下層　差歯下駄出土状況

SD1633B下層　籠編物出土状況

SD1633B下層　俵出土状況

SD1633B底面　鋤出土状況

SD1633B下層　連歯下駄出土状況

図版47　SD2015区画溝跡断面、SD1633B区画溝跡遺物出土状況

（単位：cm）

No.	大別層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	下層	土師質土器	灯明皿		口径8.2　底径4.8　器高2.3　残存：3/5　内外：ロクロナデ　底：回転糸切	04185
2	下層	土師質土器	灯明皿		口径7.0　底径3.8　器高1.8　残存：5/10　内外：ロクロナデ　底：回転糸切	04186
3	下層	瓦質土器	火鉢			04187
4	下層	陶器	端反皿	瀬戸美濃	口径14.6　高台径6.0　器高3.6　残存：1/2　【17c後半】	04189
5	下層	陶器	端反皿	瀬戸美濃	口径15.4　高台径6.6　器高3.5　残存：1/3　【17c後半】	04199
6	下層	染付	皿	肥前	口径13.0　高台径6.0　器高3.2　残存：1/2　内面に文様　【17c中頃】	04194
7	下層	陶胎染付	碗	肥前	口径10.6　高台径5.2　器高6.9　残存：2/5　【17c末～18c前半】	04193
8	下層	陶器	皿	肥前	口径13.2　高台径5.0　器高3.2　残存：一部　銅緑釉　内：蛇ノ目釉剥ぎ　【17c末～18c前半】	04206
9	下層	陶器	折縁皿	肥前	口径12.2　高台径4.9　器高3.4　残存：1/2　内：蛇ノ目釉剥ぎ　【18c】	04200
10	下層	青磁	皿	肥前	口径14.0　高台径5.2　器高3.5　残存：一部　内：蛇ノ目釉剥ぎ　【17c末～18c前半】	04195
11	下層	染付	小碗	肥前	口径10.0　高台径4.0　器高5.4　残存：1/4　【17c後半】	04192
12	下層	陶器	皿	志野織部	口径10.8　高台径5.8　器高2.3）残存：1/3　【17c前半】	04201
13	下層	陶器	筒器手碗	肥前	口径11.6　高台径4.6　器高7.8　残存：1/3　【17c後半】	04196
14	下層	陶器	筒器手碗	肥前	口径10.6　高台径5.2　器高8.1　残存：2/5　【17c後半】	04197
15	下層	染付	小杯	肥前	口径7.0　高台径2.8　器高3.0　残存：1/2　体部に「コンニャク印」　【18c前半】	04191
16	下層	陶器	香炉	岸	口径13.6）底径9.6）器高6.0　残存：一部　【17c後半～18c初め】	04204

図版48　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（1）

（単位：cm）

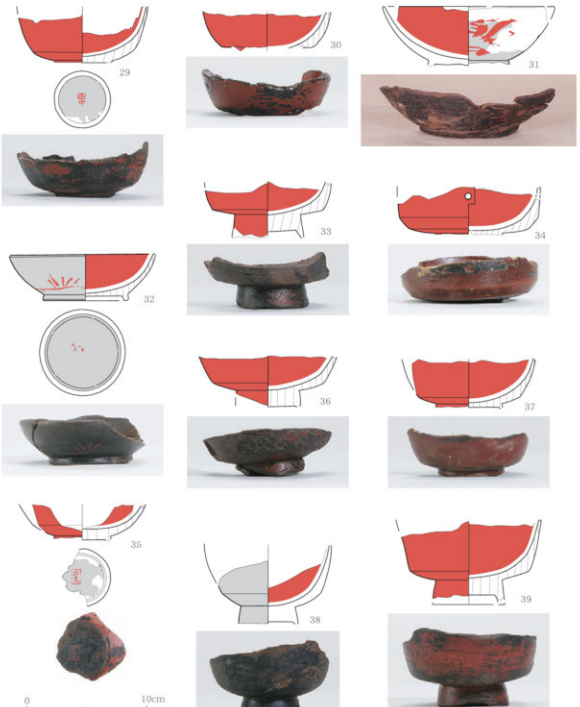
No.	大別層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	登　録
17	下層	陶器	片口鉢	瀬戸美濃	口径14.8　高台径9.0　器高9.2　残存：1/2　底部墨書　内面に目跡3方所　【18c中頃】	04203
18	下層	軟質施釉土器	花瓶		口径2.2　底径2.1　器高5.4　残存：頭部完形	04205
19	下層	陶器	筒形鉢	瀬戸美濃	口径(38.0)　高台径(18.6)　器高(8.4)　残存：一部　【17c後半】	04534
20	下層	陶器	小皿	岸	底径10.8　残存高8.3　残存：一部　【17c中頃～18c前半】	04190
21	下層	石製品	硯		残存長10.2　幅5.4　厚1.4　残存9/10	04219
22	下層	陶器	水滴(猿)	岸	残存高3.5　幅4.0　厚4.1　残存：1/2　【17c後半～18c初め】	04202

図版49　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（2）

（単位：cm）

No.	大別層位	種 別	器 種	特 徴	登 録
23	下層	瓦	巴文軒丸瓦		04207
24	底面	木製品	荷札	「［　］」残存長8.5　幅1.8　厚0.2～0.3　裏面に多数の刃痕	04730
25	底面	木製品	鍬	残存長56.0　幅：身15.1　柄3.4　厚2.5	04044
26	下層	漆器	椀蓋	口径(9.4)　つまみ径(4.6)　器高2.7　外：黒色漆塗り→漆絵(赤色漆)　内：赤色漆塗り	04003
27	下層	漆器	椀	残存高5.3　残存：1/4　内外・底部：黒色漆塗り→漆絵(赤色漆)	04001
28	下層	漆器	皿	口径13.40　残存高2.4　残存：4/5　外：黒色漆塗り　内・底部：黒色漆塗り	04004

図版50　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（3）



（単位：cm）

No.	大別層位	種　別	器　種	特　徴	登　録
29	下層	漆器	椀	残存高4.7　残存：4/5　内外：赤色漆塗り　底部：黒色漆塗り→赤色漆で「田中」	04005
30	下層	漆器	椀	残存高3.3　残存：一部　内外：赤色漆塗り	04006
31	下層	漆器	椀	口径(14.4)　残存高5.0　残存：2/5　外：黒色漆塗り→漆絵(赤色漆)　内：赤色漆塗り　底部：黒色漆塗り	04007
32	下層	漆器	椀	口径12.3　高台径7.2　器高3.9　残存：4/5　外：黒色漆→漆絵(赤色漆)　内：赤色漆　底部：黒色漆→赤色漆書	04014
33	下層	漆器	椀	残存高台径6.0　残存高4.7　残存：2/5　内外：赤色漆塗り　底部：黒色漆塗り	04008
34	下層	漆器	椀	残存高4.0　残存：1/2　内外：赤色漆塗り　体部に穿孔1カ所	04011
35	下層	漆器	椀	残存高3.0　残存：一部　内外：赤色漆塗り　底部：黒色漆塗り→赤色漆書	04009
36	下層	漆器	椀	残存高4.3　残存：2/5　内外：赤色漆塗り　底部：黒色漆塗り	04015
37	下層	漆器	椀	残存高4.2　残存：4/5　内外：赤色漆塗り　底部：黒色漆塗り	04013
38	下層	漆器	椀	残存径10.6　高台径7.0　残存高6.6　残存：2/3　外：黒色漆塗り→漆絵(赤色漆)　内：赤色漆塗り	04019
39	下層	漆器	椀	残存径10.1　高台径6.0　残存高：6.9　残存：3/4　内外・底部：赤色漆塗り	04017

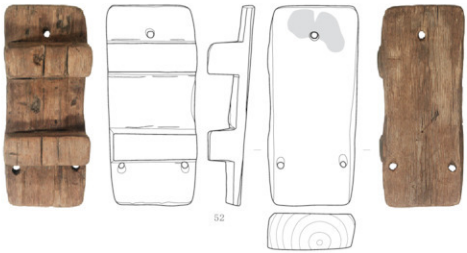
図版51　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（4）

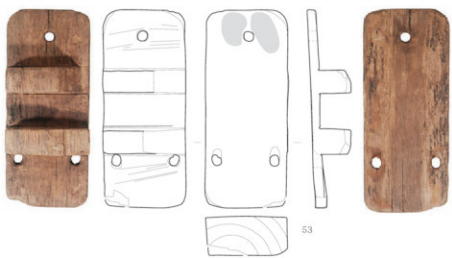
(51：S=1/2)

(単位：cm)

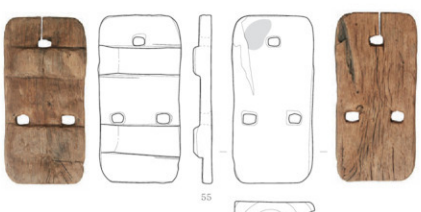
No.	大別層位	種 別	器 種	特 徴	登 録
40	下層	漆器	椀蓋	口径(9.1)　残存高2.1　残存：1/3　外・底部：黒色漆塗り　内：赤色漆塗り　外部に紋	04010
41	下層	漆器	椀	残存高3.0　残存：3/5　内外：赤色漆塗り　底部：黒色漆塗り　底部に穿孔１カ所	04012
42	下層	漆器	椀	残存高3.7　残存：2/5　内外・底部：黒色漆塗り	04016
43	下層	漆器	椀	残存径12.4　残存高台径 5.4　残存高6.0　残存：2/3　内外・底部：黒色漆　底部に赤色漆書	04020
44	下層	漆器	椀	口径11.7　残存高台径5.4　残存高6.5　残存：3/4　内外：黒色漆塗り　体部に穿孔１カ所	04018
45	下層	木器	小皿	口径(10.8)　残存高1.6　残存7/8	04022
46	下層	木器	小皿	高台径5.6　残存高1.4　残存2/3	04021
47	下層	木製品	斜戸(底板)	径11.5～11.7　厚0.6　横面に目釘穴３カ所　中央に穿孔	04041
48	下層	木製品	斜戸(底板)	残存径8.7　残存幅2.4　厚0.4　残存：1/4	04039
49	下層	木製品	曲物底板	残存径15.7　残存幅7.3　厚1.0　残存2/5　目釘２本・目釘穴２カ所残存	04573
50	下層	木製品	曲物底板	残存径19.1　残存幅6.1　厚0.7	04572
51	下層	木製品	横櫛	残存長8.2　幅4.5　厚0.9	04049

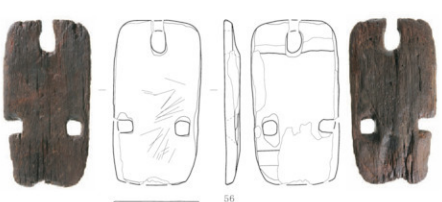
図版52　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（5）





図版53　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（6）

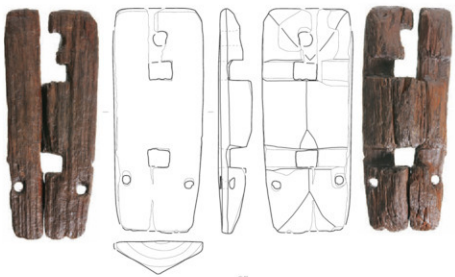


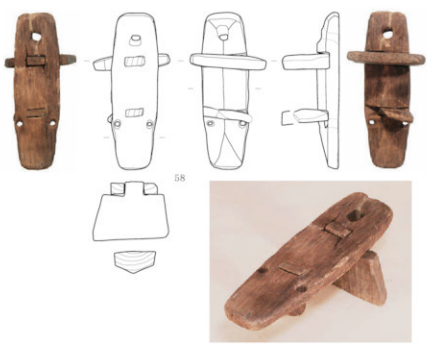


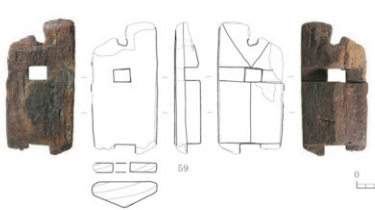
（単位：cm）

No.	大引層位	種　別	層　種	特　徴	登　録
52	下層	木製品	遺構下駄	長22.5　幅10.2　高5.3　残存：完形	04032
53	下層	木製品	遺構下駄	右用　長22.3　幅9.4　高5.0　残存：ほぼ完形　裏面に加工痕	04033
54	下層	木製品	遺構下駄	右用　長16.9　幅7.3　高2.5　残存：完形	04034
55	下層	木製品	遺構下駄	左用　長18.7　幅9.2　高2.1　残存：完形	04030
56	下層	木製品	遺構下駄	長18.4　幅9.8　高1.8　残存：2/3　表面に刃物痕多数	04031

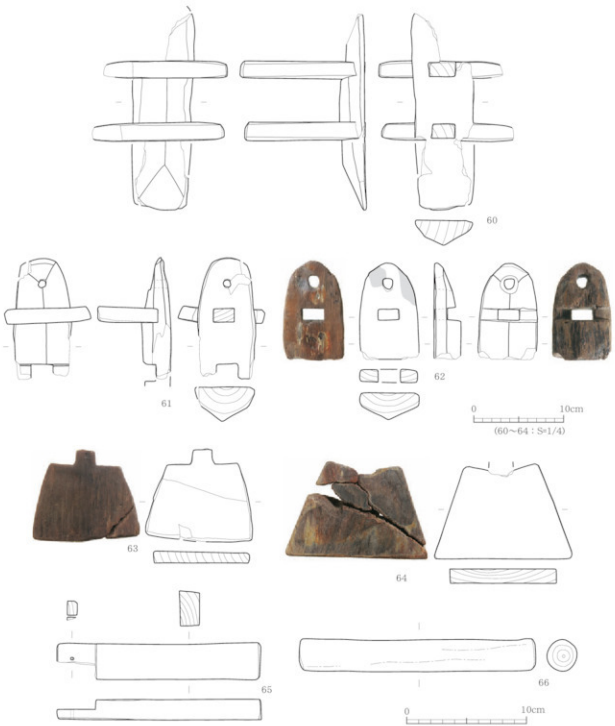
図版54　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（7）







図版55　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（8）



(単位：cm)

No.	大別層位	種　別	器　種	特	徴	登　録
57	下層	木製品	差歯下駄	長25.0　幅10.0　高3.8　残存：2/3		04029
58	下層	木製品	差歯下駄	長17.5　幅8.5　高6.3　残存：4/5		04026
59	下層	木製品	差歯下駄	残存長15.7　幅7.4　高2.9　残存：1/2		04028
60	下層	木製品	差歯下駄	残存長21.9　幅14.7　高13.9　残存：3/5		04045
61	下層	木製品	差歯下駄	残存長13.6　幅8.6　高8.2　残存：1/2		04037
62	下層	木製品	差歯下駄	残存長10.8　幅7.0　高3.0　残存：2/5		04027
63	下層	木製品	差歯下駄	高10.4　幅12.0　厚1.3　加工痕が残る		04036
64	下層	木製品	差歯下駄	残存高10.6　幅15.3　厚2.1		04038
65	下層	木製品	部材	長17.2　幅3.0　厚1.7　残存：9/10　穿孔1方所		04022
66	下層	木製品	道具柄	長19.7　径2.5～2.7　完形		04024

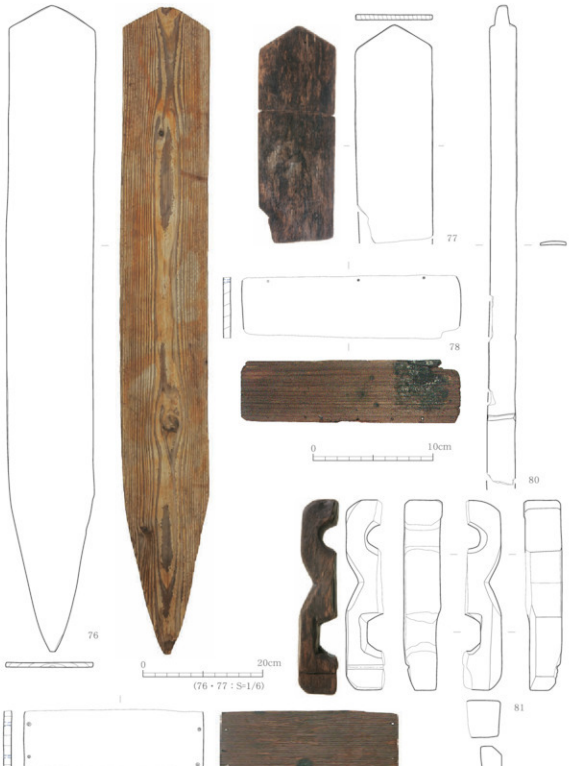
図版56　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（9）

図版57　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（10）

（単位：cm）

No.	大別層位	種　別	器　種	特　　徴	登　録
67	下層	木製品	棒状	長30.1　幅：身7.3～8.0　柄3.6　残存：ほぼ完形	04051
68	下層	木製品	鍬	長18.1　径9.0～9.5　残存：ほぼ完形	04050
69	下層	木製品	不明木製品	残存長7.8　幅3.0　板状の芯材1.0に樹皮状のもの(幅0.4)を巻いている	04047
70	下層	木製品	不明木製品	長3.8　径3.4～3.5　残存：完形　芽ずれ？	04040
71	下層	木製品	部材	長51.1　幅3.5　厚2.3　残存：9/10	04579
72	下層	木製品	部材？	長61.9　幅2.6　厚1.3　残存：完形　目釘・目釘穴計６カ所	04580
73	下層	木製品	不明木製品	長22.3　幅0.7　厚0.7　残存：完形	04578
74	下層	木製品	不明木製品	長26.9　幅2.4　厚0.8　残存：ほぼ完形　目釘穴５カ所	04576
75	下層	木製品	鍬	残存長36.8　幅11.7　厚2.3　残存：2/5	04043

図版58　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（11）



(単位：cm)

No.	大別層位	種　別	器　種	特　　徴	登　録
76	下層	木製品	蕊婆	長107.6　幅14.4　厚0.8　残存：完形	04589
77	下層	木製品	蕊婆	残存長36.5　幅13.0　厚0.9	04023
78	下層	木製品	部材	長18.3　残存幅5.4　厚0.6　目釘穴3カ所	04574
79	下層	木製品	部材	長14.9　残存幅5.1　厚0.6　目釘穴4カ所	04575
80	下層	竹製品	不明竹製品	残存長40.0　幅2.3　厚0.3	04042
81	下層	木製品	不明木製品	残存長15.9　幅3.3　厚3.2	04035

図版59　SD1633B区画溝跡下層出土遺物（12）

（単位：cm）

No.	大別層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
82	上層	陶器	折縁皿	肥前	口径12.0　高台径4.8　器高(3.3)　残存：2/3　内：蛇の目釉剥ぎ　【18c】	04231
83	上層	陶器	碗	肥前	口径10.8　高台径4.5　器高(6.7)　残存：ほぼ完形　【18c代】	04232
84	上層	陶器	碗	肥前	口径11.0　高台径4.1　器高6.2　残存：2/3　【18c代】	04233
85	上層	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	口径(11.0)　高台径3.8　器高5.8　残存：1/4　内外：鉄釉　【17c後半】	04226
86	上層	陶胎染付	碗	大堀相馬	口径(9.0)　高台径3.6　器高5.1　残存：2/5　外：鉄絵　【19c前半】	04237
87	上層	軟質施釉土器	焙烙	堤	口径(12.2)　底径10.6　器高2.5　残存：1/3　【19c】	04235
88	上層	陶器	土瓶・蓋		口径7.7　つまみ径1.2　器高2.0　残存：3/4　【19c】	04236
89	上層	陶器	皿	志野織部	内面文様あり　【17c初め】	04234
90	上層	土製品	ルツボ		銅付着	04239
91	上層	瓦質土器	擂鉢			04230
92	上層	陶器	擂鉢	岸焼B	【18c前半】	04238
93	上層	軟質施釉土器	皮袋		口径1.9　底径2.2　器高6.3　残存：ほぼ完形	04259

図版60　SD1633B区画溝跡上層出土遺物（1）

（単位：cm）

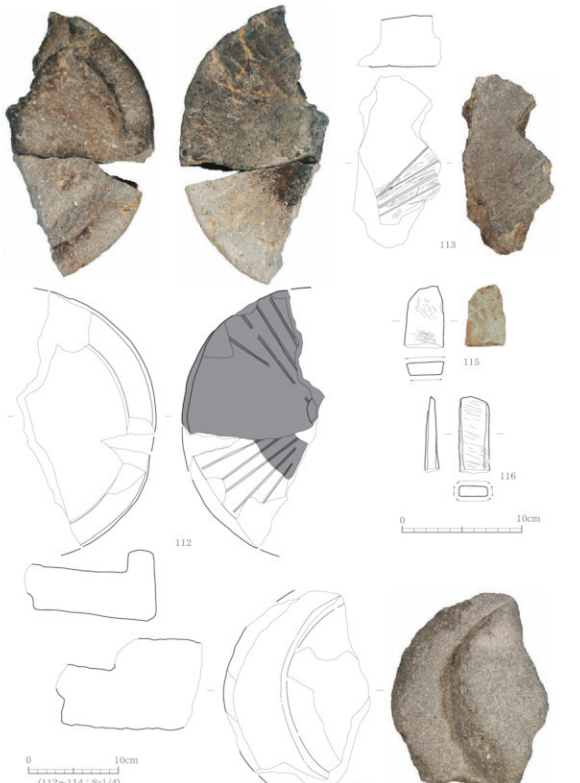
No.	大別層位	種別	器種	特徴	登録
94	上層	漆器	椀	口径(16.2)　高台径7.0　器高6.1　残存：4/5　外：黒色漆塗り→漆絵(赤色漆)　内：赤色漆塗り　底部：黒色漆塗り	04052
95	上層	漆器	椀	口径(11.4)　残存高7.4　残存：3/5　外：黒色漆絵　内：赤色漆塗り　底部：黒色漆塗り→赤色漆書	04055
96	上層	漆器	椀	残存高2.9　残存：2/5　内外：赤色漆塗り　底部：不明　高台内うに穿孔1カ所	04053
97	上層	漆器	椀	残存高4.1　残存：2/5　外：黒色漆塗り　内：赤色漆塗り　底部：不明　底面中央に穿孔	04056
98	上層	漆器	椀	残存高4.2　残存：一部　内外：赤色漆塗り　底部：黒色漆塗り	04054
99	上層	漆器	椀	残存高6.9　残存：3/5　内外底部：黒色漆塗り→漆絵(赤色漆)	04058
100	上層	鉄製品	釘	残存長5.0　幅0.4　厚0.3	04240
101	上層	銅製品	キセル(吸い口)	長6.0　口径0.4～0.8　残存：完形	04241
102	上層	銅製品	キセル(吸い口)	長6.6　火皿径1.8　口径1.0　残存：完形　羅宇一部残	04242
103	上層	鉄滓			04243

図版61　SD1633B区画溝跡上層出土遺物（2）

(単位：cm)

No.	大別層位	種 別	器 種	特 徴	登 録
104	上層	木製品	差歯下駄	長22.5　幅10.5　高2.8　残存：9/10　逆舟形露卯下駄	04059
105	上層	木製品	差歯下駄	高10.6　幅6.8　厚1.6	04060
106	上層	石製品	硯	長(6.4)　幅(5.0)　厚1.4　残存：一部	04272
107	上層	石製品	砥石	長9.8　幅3.9　厚2.3	04268
108	上層	石製品	砥石	長(8.7)　幅3.5　厚2.6	04267
109	上層	石製品	砥石	長8.3　幅5.5　厚3.7	04266
110	上層	石製品	砥石	長(10.7)　幅(10.6　厚8.0	04264
111	上層	石製品	砥石	長(5.8)　幅(5.2)　厚3.1	04269

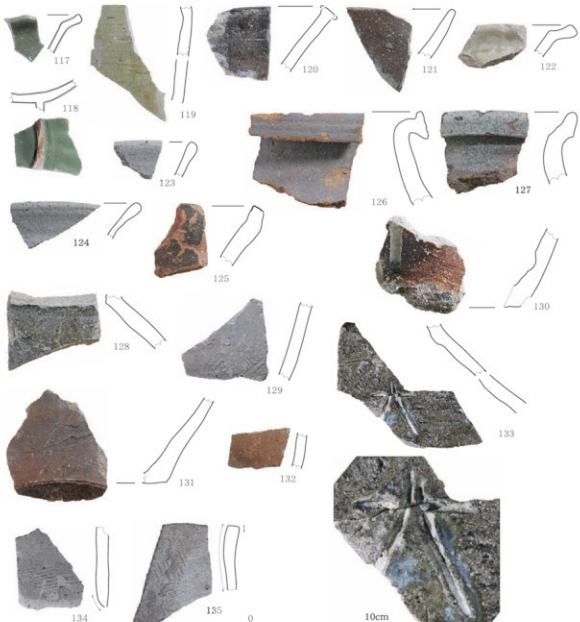
図版62　SD1633B区画溝跡上層出土遺物（3）



(単位：cm)

No.	大別層位	種　別	器　種	特　　徴	登　録
112	上層	石製品	石臼(上臼)	径(30.0)　厚7.9　残存：1/3	04260
113	上層	石製品	石臼(上臼)	残存長19.0　残存幅9.2　厚5.6　残存：一部	04263
114	上層	石製品	茶臼(下臼)	径(32.0)　厚9.9　残存：1/3	04261
115	上層	石製品	砥石	長(5.7)　幅3.1　厚1.0	04270
116	上層	石製品	砥石	長(6.4)　幅2.5　厚0.8	04265

図版63　SD1633B区画溝跡上層出土遺物（4）



(単位：cm)

No.	大別層位	種別	器種	産地	特徴	登録
117	確認面	青磁	盤	龍泉窯系	波状縁	04198
118	上層	青磁	盤	龍泉窯系	外：鎬蓮弁文　内：双魚文	04229
119	上層	陶器	瓶子	瀬戸	沈線(草線)3方所　【古瀬戸瓶子Ⅱ類】	04225
120	上層	陶器	片口鉢	常滑	【常滑10～11型式期】	04251
121	下層	陶器	片口鉢	常滑	【常滑3型式期ｏ】	04182
122	下層	陶器	折縁深皿	瀬戸？	【古瀬戸中Ⅳ期ｏ】	04183
123	堆積土	陶器	片口鉢	常滑	【常滑5型式期】	04250
124	確認面	陶器	片口鉢	常滑	【常滑5型式期】	04256
125	堆積土	陶器	片口鉢	在地		04249
126	上層	陶器	甕	常滑	【常滑6a型式期】	04220
127	上層	陶器	壺	在地		04221
128	下層	陶器	甕	渥美		04184
129	堆積土	陶器	甕	渥美	押印(縦線+斜線)	04247
130	堆積土	陶器	三筋壺	常滑		04735
131	確認面	陶器	甕	常滑		04257
132	上層	陶器	甕	常滑	押印(縦線+斜線)	04223
133	堆積土	陶器	甕	渥美	刻書「大」	04245
134	堆積土	転用紙			押印(簾状)　渥美産甕の破片を紙石に転用	04246
135	上層	転用紙			押印(簾状)　渥美産甕の破片を紙石に転用	04222

図版64　SD1633B区画溝跡堆積層出土遺物

【ＳＤ2015区画溝跡】（図版40・47）

Ｄ区南端東側で確認したコ字形の溝跡である。東西40.0m、南北27.5m分を検出した。ＳＥ2199井戸跡、ＳＫ2229土壙、ＳＤ2113溝跡より新しく、ＳＤ2110溝跡より古い。本溝は東西39.0m以上、南北26.0mの範囲を囲んでおり、これを**区画Ｋ**と呼称する。上幅0.7～0.9m、下幅0.4m、深さは0.3mある。断面形は残りのよいところでみると逆台形である。堆積土は自然堆積とみられ、暗褐色やにぶい黄褐色シルトである。堆積土からロクロかわらけ、転用砥（図版207－11）、鉄製品、銭貨「熙寧元寶」（初鋳1068年）（図版207－18）が出土している。

（２）遺物包含層

ＳＸ1397はＤ区西端からＢ区東端で検出した。住宅地区で確認したＳＸ1200湿地跡と同じく、氾濫で埋没したＳＤ1100河川跡が湿地化した部分に形成された遺物包含層である。

【ＳＸ1397遺物包含層】（図版40・65～68）

ＳＸ1397は2001年にＢ区中央部、2004年にＤ区とＢ区北部、2005年にＢ区の残りについて調査を行った。このうち、2001年の成果は『Ⅱ』で報告している。その際、４時期の変遷（A→B→C→D）があるとしたが、後の調査でＳＸ1397は大別３層に分けられ、Ｂ区ではＳＸ1397が形成されたのち、ＳＤ2474→ＳＤ2241という変遷をとることがわかった。『Ⅱ』との対応関係は、以下のとおりである。

ＳＸ1397Ａ→ＳＸ1397中層

ＳＸ1397Ｂ→ＳＸ1397上層

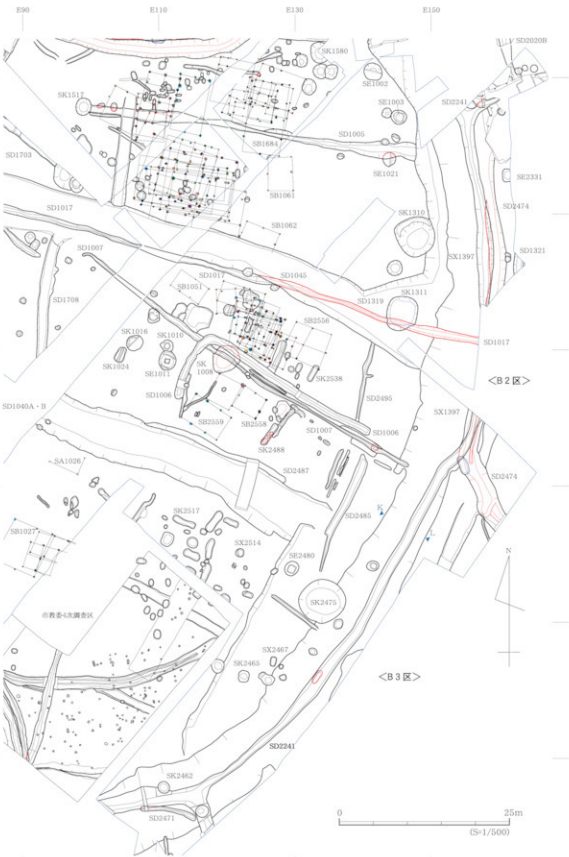
ＳＸ1397Ｃ→ＳＤ2474

ＳＸ1397Ｄ→ＳＤ2241

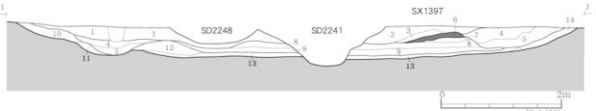
ここでは、見直しを行った『Ⅱ』の成果を含めて記述することとする。ＳＸ1397は、ＳＫ2103土壙より新しく、ＳＤ1650・1633区画溝跡、ＳＥ2466・2468・2472・2473井戸跡、ＳＫ2461・2462・2475 2549土壙、ＳＤ1007・1017・2113・2150・2165・2196・2241・2248・2333・2471・2474・2479溝跡より古い。幅は8.0～11.0m、深さは0.5～0.7mある。断面は中央に向けてゆるやかに傾斜する。堆積土は炭化物を多量に含む層をキーとして３層に大別できる。下層は炭化物を含む黒褐色や褐灰色粘土層、中層は炭化物・灰・焼土を多く含む黒褐色や灰黄褐色粘土層、上層は地山ブロックを含む黒褐色粘土や褐灰色粘土質シルトである。

廃棄層と考えられる中層は、Ｄ区南部からＢ２区にかけて顕著に認められる。遺物は各層から出土しているが、中層が分布する範囲から多く出土し、Ｄ区北部から中央部はほとんど出土しなかった。そこで、遺物が多く出土したＤ区南部からＢ２区では、出土傾向をみるため「西岸」と「東岸」に分けて遺物を採り上げた。その結果、西岸は東岸に較べて中層が顕著に認められるとともに遺物の出土量も多かった。ＳＸ1397の出土遺物のほとんどが第Ⅳ期のものである。したがって、西岸から出土した遺物や炭化物・灰・焼土といった廃棄層は、当時の在地領主の屋敷である区画Ｇに由来するものと考えられる[註1]（図版69～85）。

下層からは、ロクロかわらけ皿（２）・小皿（３～10）・柱状高台小皿（11・12）、手づくねかわ



図版65　B2区中央部～B3区の検出遺構



No.	土色・土性	混入物など	備考	No.	土色・土性	混入物など	備考
1	褐灰色(10YR5/2)シルト	黒Y層軟土ブロックを多量に含む	大別上層	8	黒褐色(10YR2/3)粘土	炭化物を含む	大別下層
2	黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト			9	黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト	炭化物・焼土粒を含む	
3	黒色(10YR2/1)粘土	焼土・炭化物を含む		10	黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト	炭化物を含む	
4	黒色(10YR2/1)粘土	焼土・炭化物を多く含む		11	黒褐色(10YR3/3)粘土	地山ブロックを含む	
5	黒褐色(10YR3/2)粘土	黒色粘土ブロックを多量,炭化物・焼土を含む	大別中層	12	にぶい黄橙色(10YR7/4)粘土		無遺物層
6	炭化物層			13	黒色(10YR1.7/1)粘土		
7	黒褐色(10YR3/1)粘土	炭化物を多く含む	大別下層	14	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト	地山ブロックを含む	

<D区南>

J—I　断面写真（西から）

J—I　西岸断面写真（北から）

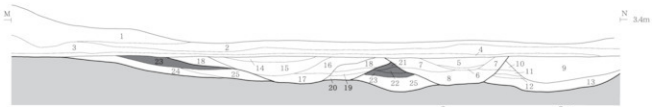
D区南端西岸の断面アップ（北から）

K—L　断面写真（南から）

No.	土色・土性	混入物など	備考	
1	にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト	地山ブロック・黒土・炭化物を含む	遺物1層	大別上層
2	にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト	黒褐色粘土をラミナ状に含む	遺物2層	
3	灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土	2層をラミナ状に含む		
4	黒褐色(10YR3/1)粘土		遺物3層	
5	にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト	黒褐色粘土をラミナ状に含む		
6	黒褐色(10YR3/2)粘土		遺物4層	大別下層
7	黒褐色(10YR2/3)粘土			
8	黒色(10YR2/1)粘土	炭化物を多量に含む	遺物5層	

<B2区南東部>

図版66　SX1397遺物包含層（1）断面

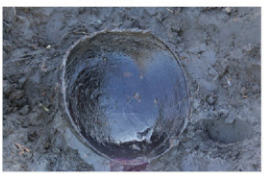


No.	土色・土性	混入物など	備考
1			第Ⅰa層
2	黒色(10YR3/2)粘土質シルト		
3	黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土		第Ⅰc層
4	褐灰色(10YR4/1)シルト		
5	灰黄褐色(10YR4/2)シルト		
6	黒褐色(10YR3/1)粘土		SD2241堆積土
7	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		
8	黒褐色(10YR3/1)粘土		
9	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質粘土	10・11層を薄くラミナ状に含む	
10	灰黄褐色(10YR6/2)シルト		
11	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		SD2474堆積土
12	にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土		
13	黒褐色(10YR3/2)粘土	12層を多量に含む	

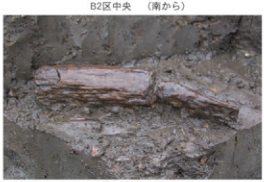
No.	土色・土性	混入物など	備考
14	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		SX1397上層
15	黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土	焼土・炭化物を含む	
16	褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト		
17	黒褐色(10YR3/2)粘土	炭化物を含む	
18	黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土	焼土・炭化物を多く含む	
19	黒色(10YR2/1)粘土	炭化物を多く含む	
20	黒色(10YR2/1)粘土	炭化物を多量に含む	
21	黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土	焼土・炭化物を多く含む	SX1397中層
22	灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土	炭化物を含む	
23	黒色(10YR2/1)粘土質シルト	焼土・炭化物・灰・植物遺体を多く含む	
24	褐灰色(10YR4/1)粘土		SX1397下層
25	黒褐色(10YR3/2)粘土	黒褐小塊色粘土層をラミナ状に含む	

<B2区中央>

B2区中央　(南から)



下層　漆椀



下層　横槌

下層　ロクロかわらけ小皿

下層　白木椀

下層　鞍（前輪）

図版67　SX1397遺物包含層（2）　断面、遺物出土状況

下層　鞍（前輪）

下層　連歯下駄

下層　白木椀

中層　ロクロかわらけ小皿

下層　部材

図版68　SX1397遺物包含層（3）　遺物出土状況

らけ皿（１）・小皿、常滑産片口鉢（18～20・26　18・20＝４型式期、19＝５型式期）・三筋壺（22）・甕（13～16　13・14・16＝２～３型式期、15＝４型式期）、在地産片口鉢（21）、瀬戸産花瓶（25）、須恵器系陶器壺（24）、白磁壺（17）、転用砥（23）、漆碗（27・28・35・36）・皿（29）、白木椀（30）、鞍（前輪　44）、箸（33）、折敷、連歯下駄（42・43）、柄杓底板（40）、曲物側板（45）・底板（39）、横槌（38）、鎌柄（37）、手火（41）、木製部材（31・34・46）、不明木製品（32・47）、鉄鏃（51）、砥石（48～50）、切石（53）、壁土（52）、ウマ上顎歯、同定不能骨片、クルミ核が出土している。23は破片が砥石に転用された須恵器壺である。

中層からは、ロクロかわらけ皿・小皿（56～62）、手づくねかわらけ皿（55）・小皿（54）、脚部とみられるかわらけ、渥美産壺、常滑産鉢・三筋壺（63～65）・甕（67）、須恵器系陶器壺（66）、白磁椀、漆紙文書（68）、漆椀（69）・小皿（70）、不明漆製品（71）、曲物底板（72）、横槌（73）、鞘（76）、連歯下駄（74）、刀形？（77）、棒状木製品（75）、手火、小刀（83）、不明鉄製品（84）、砥石（78）、切石（79・81）、鉄滓（80）、壁土（82）、焼米が出土している。76は幅が3.2cmであることから、腰刀の鞘と考えられる。鞘口（鯉口）の側面は半円状に刳り抜かれ、把縁が食い込む呑み口式の鞘である。

植物化石の種実分析の結果、中層はイネを主体とし、オオムギ、イヌビエ－ヒエがこれに次ぎ、他にモモ、コムギ、アサ、オニバス、マメ科、ヒシ属、シソ属、ナスなどが認められた。また、花粉分析を行ったところ、ホタルイ属、サナエタデ近似種、オニバス、ヒシ属が出土した。分析を行った三村昌史氏らは、湿地の岸辺にはタデ科植物が生育し、そこから離れた幾分水深のあるところはオニバスやヒシといった水生植物が生育していたと指摘している（註２）。

上層からは、ロクロかわらけ皿（91・92）・小皿（93～98）、手づくねかわらけ皿（85・86・88～90）・小皿（87）、ほかに渥美産甕（107）、常滑産鉢・三筋壺（100・101・106・108）・甕（109～112）、瀬戸産卸皿（105　前Ⅱ期）、在地産片口鉢（103・104）、須恵器系陶器壺、白磁四耳壺（99）、転用砥（102）、漆椀（113～115・117）・皿（116）、包丁（126）、手火、飛礫（119）、砥石（120～124）、曲物底板（118）、木製部材、鉄滓（127）、壁土が出土している。102は破片を砥石に転用された瀬戸産瓶子（Ⅰ類、前期）である。また、大型植物化石はモモ、オニグルミ、ヒョウタン仲間が出土した。

ＳＸ1397から出土したかわらけは、ロクロ小皿が主体を占める。これに対し手づくねは、ロクロに較べて出土量が少なく、とくに皿は残存率が低く表面が摩滅したものもあった。また、漆塗りの食器（椀・皿）は、すべて内外とも黒色漆仕上げであった。

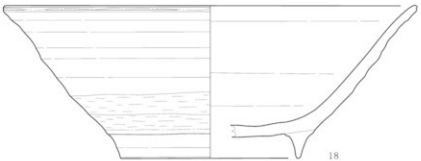
（註１）図版の遺物観察表では、西岸を「Ｗ」、東岸を「Ｅ」と記した。また、『Ⅱ』で報告した遺物については、観察表に「Ⅱの再録」と記している。

（註２）植物遺体の分析結果は、附編１に収録している。

（単位：cm）

No.	大別層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	登　録
1	W-下層上面	手づくねわらけ	皿		口径(16.0)　残存：一部　口縁部：一段ナデ	04116
2	W-下層	ロクロかわらけ	皿		底径6.4　残存：一部　ロクロナデ　底部：回転糸切→スノコ状圧痕	04519
3	E-下層上面	ロクロかわらけ	小皿		口径8.2　底径5.5　器高(1.5)　残存4/5　ロクロナデ　底部：回転糸切	04119
4	E-下層上面	ロクロかわらけ	小皿		口径(9.6)　底径(6.0)　器高2.1　残存：2/5　ロクロナデ　底部：回転糸切	04129
5	W-下層上面	ロクロかわらけ	小皿		口径7.9　底径4.8　器高(2.0)　残存：完形　ロクロナデ　底部：回転糸切　口縁部緑釉状	04112
6	W-下層上面	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.0)　底径(5.5)　器高1.7　残存：1/2　ロクロナデ　底部：回転糸切	04113
7	W-下層上面	ロクロかわらけ	小皿		口径(7.0)　底径(4.2)　器高1.7　残存：2/5　ロクロナデ　底部：回転糸切	04114
8	下層	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.0)　底径(5.4)　器高1.6　残存：2/5　ロクロナデ　底部：回転糸切→スノコ状圧痕	05006
9	W-下層上面	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.0)　底径(5.7)　器高1.8　残存：1/4　ロクロナデ　底部：回転糸切	04115
10	W-下層	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.0)　底径(4.6)　器高2.1　残存：一部　ロクロナデ　底部：回転糸切	04161
11	W-下層	ロクロかわらけ	柱状高台小皿		残存：1/2(脚部のみ)　ロクロナデ　底部：回転糸切→スノコ状圧痕	04106
12	W-下層	ロクロかわらけ	柱状高台小皿		脚部径6.2　残存：1/2(脚部)　ロクロナデ　底部：回転糸切	04160
13	下層	陶器	壺	常滑	【常滑2～3型式期】	05005
14	下層	陶器	壺	常滑	【常滑2～3型式期】	05004
15	下層	陶器	壺	常滑	【常滑4型式期】	04110
16	下層	陶器	壺	常滑	【常滑2～3型式期】	05001
17	W-下層上面	石器	磨			04109

図版69　SX1397遺物包含層下層出土遺物（1）



（単位：cm）

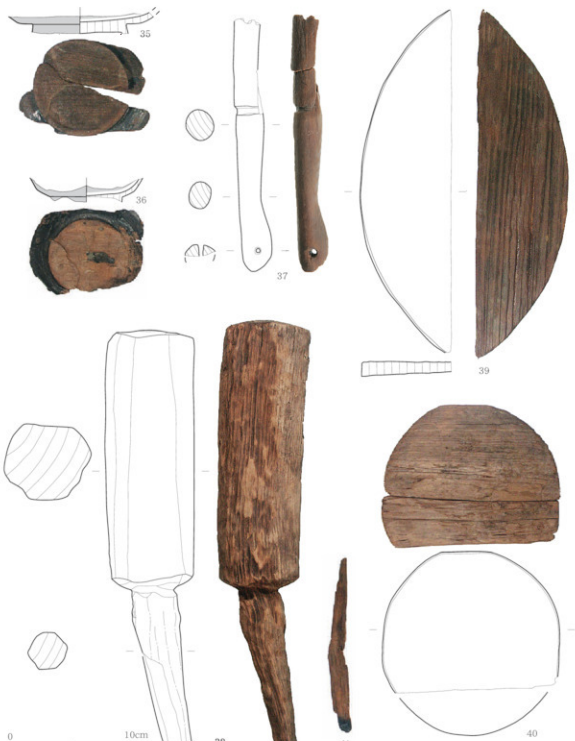
No.	大別層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	登　録
18	W-下層	陶器	片口鉢	常滑	口径(34.4)　高台径(15.0)　器高12.8　残存：1/3　回転ナデ→回転ケズリ　【常滑4型式期】	04102
19	下層	陶器	片口鉢	常滑	【常滑5型式期】	05002
20	W-下層	陶器	片口鉢	常滑	【常滑4型式期】　18と同一個体か	04103
21	下層	陶器	片口鉢	在地		05008
22	W-下層	三彩壺		常滑	底径(8.8)　残存：一部	04159
23	W-下層土面	転用砥			須恵器長頸壺の破片を砥石に転用	04111
24	W-下層	陶器	壺	須恵器系		04104
25	下層	陶器	花瓶(仏花瓶)	瀬戸	底径(6.4)　残存：一部　底部：回転糸切	05038
26	下層	陶器	片口鉢	常滑	回転ヘラケズリ→ナデ　SD2474下層(05027)と同一個体　山茶碗系	05003

図版70　SX1397遺物包含層下層出土遺物（2）

(単位：cm)

No.	大別層位	種別	器種	特徴	登録
27	W-下層	磯器	椀	口径(15.8)　底径8.0　器高5.3　残存：2/3　内外面：黒色漆塗り　底面に刻書	04098
28	W-下層	磯器	椀	口径(16.4)　底径7.8　器高6.2　残存：5/6　内外面：黒色漆塗り	04101
29	下層	磯器	皿	口径(15.8)　底径8.0　器高2.5　残存：1/3　内外面：黒色漆塗り	05054
30	下層	木器	白木椀	口径(15.2)　高台径(9.2)　器高5.2　残存：2/3	05047
31	下層	木製品	部材	長11.2　幅1.6　厚0.9	05050
32	下層	木製品	不明木製品	長7.6　幅2.7　厚2.3	05043
33	下層	木製品	箸	長(14.6)　幅0.7　厚0.5	05051
34	下層	木製品	部材	長10.9　幅4.6　厚3.3	05055

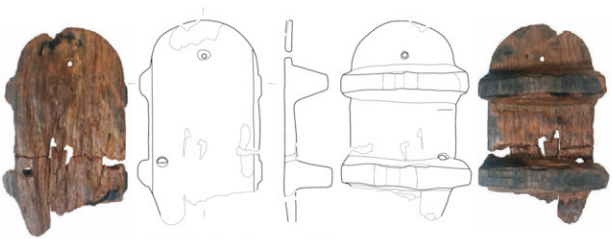
図版71　SX1397遺物包含層下層出土遺物（3）



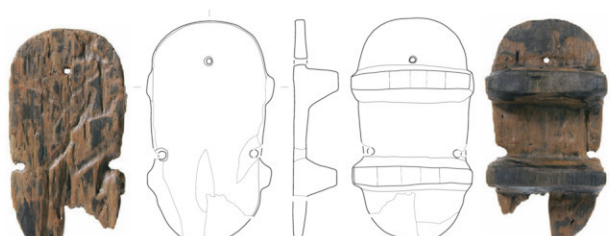
（単位：cm）

No.	大別層位	種　別	器　種	特　徴	登　録
35	下層	漆器	椀	高台径8.0　残存高1.4　残存：1/4　内外面：黒色漆塗り	05056
36	下層	漆器	椀	高台径6.0　残存高2.0　残存：一部　内外面：黒色漆塗り	05057
37	W-下層	木製品	鎌柄	残存長21.5　幅2.4　厚2.6　握り部に1ヶ所穿孔(径：0.5)あり	04097
38	W-下層	木製品	横槌	残存長34.8　身幅6.9～7.6　柄幅1.9～4.0　残存：ほぼ完形	04100
39	下層	木製品	曲物底板	残存径28.5　厚1.2　残存：1/4	05049
40	下層	木製品	桶円底板	径14.5　厚0.8　残存：2/3	05041
41	下層	木製品	手木	残存長14.8　幅1.5　厚0.2	05232

図版72　SX1397遺物包含層下層出土遺物（4）



42



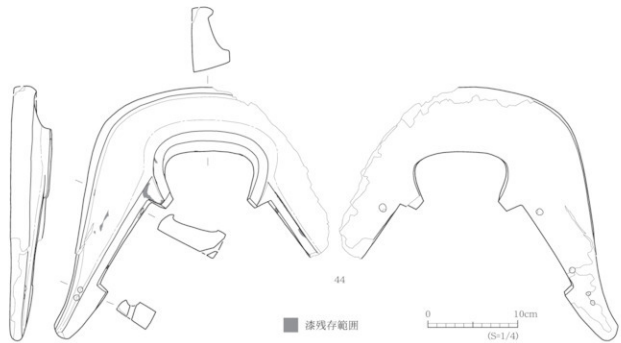
43

0 10cm
(S=1/4)

(単位：cm)

No.	大別層位	種 別	器 種	特 徴	登 録
42	下層	木製品	漆塗下駄	残存長22.4 幅13.6 高5.2 残存3/4	05044
43	下層	木製品	漆塗下駄	長24.5 幅13.0 高4.9 残存4/5	05046

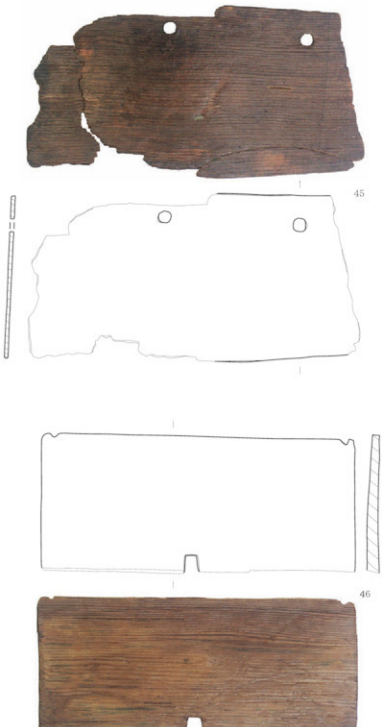
図版73 SX1397遺物包含層下層出土遺物（5）



（単位：cm）

No.	大別層位	種　別	器　種	特　　徴	登　録
44	下層	漆製品	輪・前輪	幅30.7　高28.0　厚1.7～4.0　黒色漆塗り　海無鞍　二枚岩木　周縁部が覆輪状に高まる	05048

図版74　SX1397遺物包含層下層出土遺物（6）



(単位：cm)

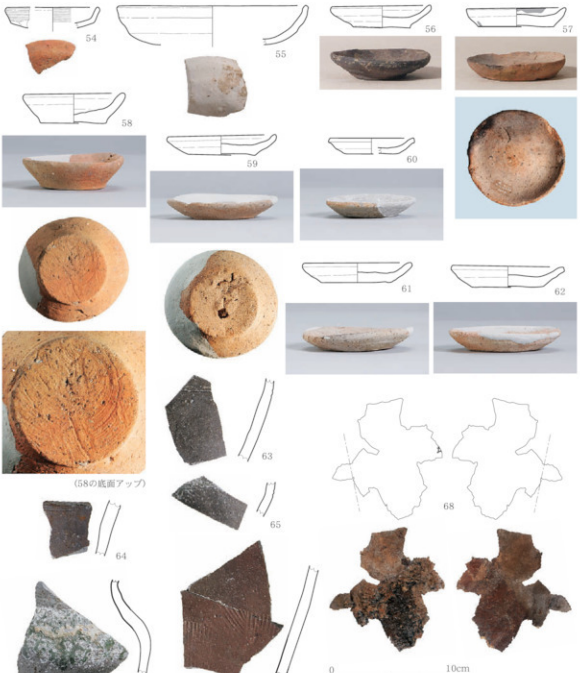
No.	大別層位	種　別	器　種	特　徴	登　録
45	W-下層	木製品	曲物側板	現存長27.6　幅14.2　厚0.3　穿孔(径：1.0)2カ所	04099
46	下層	木製品	部材	長26.2　幅11.5)　厚0.6～1.0	05053
47	下層	木製品	不明木製品	長104.4　径2.7	05060

図版75　SX1397遺物包含層下層出土遺物（7）

（単位：cm）

No.	大別層位	種　別	器　種	特　　徴	登　録
48	W下層	石製品	砥石	長26.9　幅21.8　厚11.3	04518
49	W下層	石製品	砥石	長19.5　幅8.1　厚7.8	04107
50	W下層	石製品	砥石	長(7.2)　幅3.3　厚2.0	04105
51	下層	鉄製品	鎌	残存長6.4　幅0.5～1.4　厚0.2～0.3	05065
52	W下層上面	壁土			04117
53	W下層	石製品	切石	長(10.2)　幅8.4　厚10.7	04520

図版76　SX1397遺物包含層下層出土遺物（8）



（単位：cm）

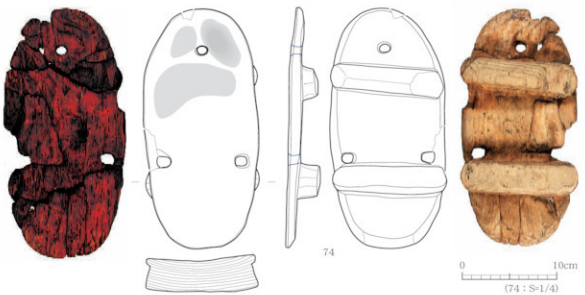
No.	大別層位	種別	器種	産地	特徴	登録
54	W-中層	すづくねかわらけ	小皿		口径(8.0)　残存：一部　口縁部：一段ナデ	04125
55	W-中層	すづくねかわらけ	皿		口径(16.0)　残存：一部　口縁部：二段ナデ	04165
56	W-中層	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.4)　底径4.8　器高(1.8)　残存：3/5　ロクロナデ　底部：回転糸切　Ⅱの再録	01093
57	W-中層	ロクロかわらけ	小皿		口径8.3　底径6.2　器高1.6　残存：完形　ロクロナデ　底部：回転糸切　口縁部に油煙状付着　Ⅱの再録	01094
58	W-中層	ロクロかわらけ	小皿		口径8.5　底径5.5　器高2.4　残存：4/5　ロクロナデ　底部：回転糸切→スノコ状圧痕	04123
59	E-中層	ロクロかわらけ	小皿		口径(9.1)　底径(5.6)　器高(1.2)　残存：3/5　ロクロナデ　底部：回転糸切	04126
60	W-中層	ロクロかわらけ	小皿		口径(7.2)　底径(4.6)　器高1.3　残存：1/4　ロクロナデ　底部：回転糸切	04124
61	E-中層	ロクロかわらけ	小皿		口径9.1　底径5.9　器高1.7　残存：ほぼ完形　ロクロナデ　底部：回転糸切	04127
62	E-中層	ロクロかわらけ	小皿		口径9.4　底径6.0　器高(1.7)　残存：一部　ロクロナデ　底部：回転糸切	04128
63	W-中層	陶器	三筋壺	常滑	04122と同一個体　沈線(複線)	04121
64	W-中層	陶器	三筋壺	常滑	沈線(複線)	04162
65	W-中層	陶器	三筋壺	常滑	04121と同一個体　沈線(複線)	04122
66	E-中層	陶器	壺	須恵器系	四耳壺か	04164
67	E-中層	陶器	甕	常滑	押印(鉄線＋縦)	04170
68	W-中層	漆紙文書			ウルシ面に墨痕　タテ10.2×ヨコ9.2	Ⅱの再録 01570

図版77　SX1397遺物包含層中層出土遺物（1）

（単位：cm）

No.	大別層位	種　別	器　種	特　徴	登　録
69	W-中層	漆器	椀	内外面：黒色漆塗り	Ⅱの再録　01213
70	W-中層	漆器	小皿	口径9.8　底径7.4　器高1.5　内外面：黒色漆塗り	Ⅱの再録　01252
71	W-中層	漆製品	不明漆製品	黒色漆塗り　端部に貫通孔　扁平　残存長11.1　幅1.2　厚0.4　孔径0.5	Ⅱの再録　01289
72	W-中層	木製品	曲物底板	底板厚0.9　【モミ属】	Ⅱの再録　01216
73	W-中層	木製品	櫂状	長33.3　身幅6.6～7.5　柄幅3.6～4.5　【コナラ節】	Ⅱの再録　01201

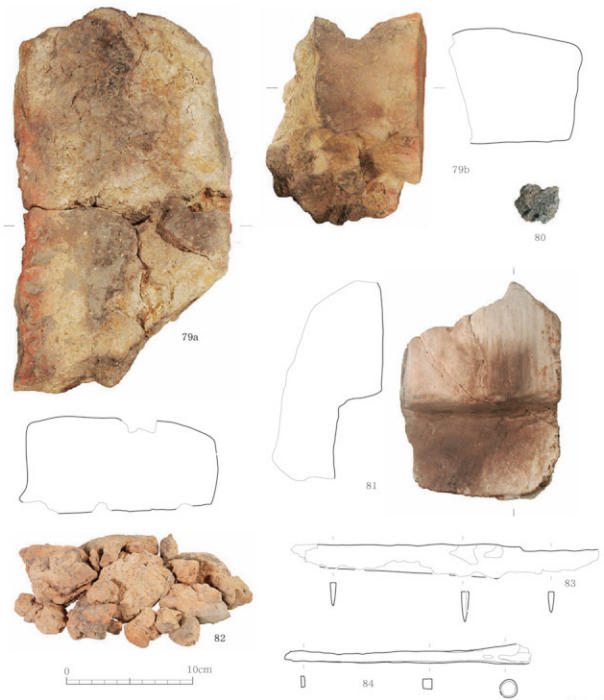
図版78　SX1397遺物包含層中層出土遺物（2）



(単位：cm)

No.	大別層位	種　別	器　種	特　徴	登　録
74	W-中層	木製品	建築下駄	左用　長25.4　幅12.1　高3.7　厚1.4　前壺径：1.2　後壺径：1.5	Ⅱの再録　01254
75	W-中層	木製品	棒状木製品	長19.2　幅1.4　厚0.8　【コナラ節】	Ⅱの再録　01244
76	W-中層	木製品	鍬	残存長12.7　幅5.2　厚0.6　【モミ属】	Ⅱの再録　01212
77	W-中層	木製品	刀形？	残存長13.5　幅3.9　厚2.4　【オニグルミ】	Ⅱの再録　02214
78	W-中層	石製品	砥石	長10.8　幅3.8　残存厚1.5　【砂岩】	Ⅱの再録　01404

図版79　SX1397遺物包含層中層出土遺物（3）



(単位：cm)

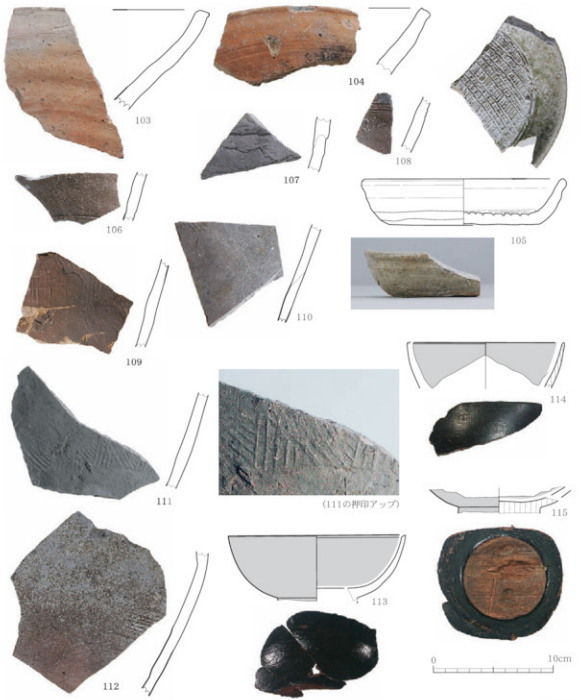
No.	大別層位	種　別	器　種	特　　徴	登　録
79	W-中層上面	石製品	切石	a：長(28.7)　幅15.6　厚7.6　b：長(16.2)　幅10.5　厚9.1	04136
80	W-中層	鉄滓			04132
81	W-中層	石製品	切石	長(15.8)　幅11.8　厚7.8	04131
82	W-中層	礎土			04130
83	W-中層	鉄製品	小刀	残存長24.3　刀部長18.3　刀元幅2.7　茎部長6.0　棟厚0.4～0.5　Ⅱの再録	01366
84	W-中層	鉄製品	不明鉄製品	残存長19.5　断面(先：長方形～0.9×0.3　中：正方形～0.8　基部：円筒形～径：1.4)　Ⅱの再録	01367

図版80　SX1397遺物包含層中層出土遺物（4）

（単位：cm）

No.	大別層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	登　録
85	北-上層	手づくねわらけ	皿		口径(16.2)　器高(3.9)　残存：一部　口縁部：二段ナデ　【2c後半】	04168
86	W-上層	手づくねわらけ	皿		口径(13.0)　残存：一部　口縁部：一段ナデ	04140
87	W-上層	手づくねわらけ	小皿		口径9.0　器高(1.6)　残存：一部　口縁部：一段ナデ	04166
88	W-上層	手づくねわらけ	皿		残存：一部　口縁部：二段ナデ　Ⅱの再録	01078
89	W-上層	手づくねわらけ	皿		残存：一部　口縁部：二段ナデ　Ⅱの再録	01079
90	W-上層	手づくねわらけ	皿		残存：一部　口縁部：二段ナデ　Ⅱの再録	01080
91	W-上層	ロクロかわらけ	皿		口径(14.7)　底径7.8　器高(3.9)　残存：完形　ロクロナデ　底部：回転糸切　Ⅱの再録	01081
92	上層	ロクロかわらけ	皿		口径(12.0)　底径7.2　器高3.6　残存：2/5　ロクロナデ　底部：回転糸切	05069
93	W-上層	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.0)　底径(6.0)　器高1.7　残存：1/4　ロクロナデ　底部：回転糸切　Ⅱの再録	01083
94	W-上層	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.0)　底径(5.2)　器高1.5　ロクロナデ　底部：回転糸切　Ⅱの再録	01085
95	W-上層	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.2)　底径(5.8)　器高1.8　残存：2/5　ロクロナデ　底部：回転糸切　Ⅱの再録	01082
96	W-上層	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.2)　底径5.0　器高1.8　残存：2/5　ロクロナデ　底部：回転糸切　Ⅱの再録	01084
97	W-上層	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.4)　底径4.6　器高1.6　残存：1/4　ロクロナデ　底部：回転糸切	04167
98	上層	ロクロかわらけ	小皿		口径(8.8)　底径5.9　器高(1.8)　残存：7/10　ロクロナデ　底部：回転糸切	05010
99	W-上層	白磁	四耳壺			04137
100	W-上層	陶器	三筋壺	常滑	沈線(単線)2方所	04138
101	W-上層	陶器	三筋壺	常滑	沈線(複線)	01089
102	W-上層	転用砥			瀬戸産灰釉の破片を砥石に転用　古瀬戸後Ⅰ期　【古瀬戸前期】　Ⅱの再録	01090

図版81　SX1397遺物包含層上層出土遺物（1）



(単位：cm)

No.	大別層位	種別	器種	産地	特徴	登録
103	E-上層	陶器	片口鉢	在地(白石カ)		04175
104	E-上層	陶器	片口鉢	在地(白石カ)		04169
106	上層	陶器	卸皿	瀬戸	口径(17.2)　底径12.6　器高3.8　残存：1/4　【古瀬戸前Ⅱ期　13c2/4半頃】	05039
106	W-上層	陶器	三筋壺	常滑	沈線(単線)	04139
107	上層	陶器	壺	越美	押印(花文orランダム施文)	05007
108	E-上層	陶器	三筋壺	常滑	沈線(複線)	04174
109	E-上層	陶器	甕	常滑	押印(籠状)	04171
110	上層	陶器	甕	常滑	押印(斜線)	05011
111	E-上層	陶器	甕	常滑	押印(網目+斜線)	04173
112	E-上層	陶器	甕	常滑	押印(網格子)	04172
113	W-上層	瀬器	椀		口径(14.8)　内外黒色漆塗り　内面に漆付着→漆容器に転用【ケヤキ】　Ⅱの再器	01217
114	W-上層	瀬器	椀		口径(12.2)　残存高4.8　残存：一部　内外面：黒色漆塗り	04724
115	上層	瀬器	椀		高台径6.8　残存高2.0　残存：1/4　内外面：黒色漆塗り	05061

図版82　SX1397遺物包含層上層出土遺物（2）

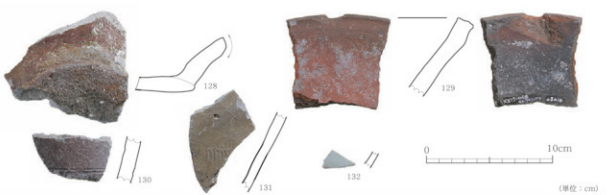
(単位：cm)

No.	大別層位	種　別	器　種	特　徴	登　録
116	上層	漆器	皿	口径(18.4)　器高(3.4)　残存：1/3　内外面：黒色漆塗り	05062
117	W-上層	漆器	椀	径7.6　厚0.7～1.0　【ケヤキ】	Ⅱの再録　01230
118	E-上層	木製品	曲物底板	径(16.5)　厚0.9　残存：1/3	04176
119	上層	石製品	残欠	径6.1　厚5.6	05256
120	W-上層	石製品	砥石	残存長6.6　幅5.5～9.1　【砂岩】	Ⅱの再録　01384
121	W-上層	石製品	砥石	残存長11.0　残存幅10.3　残存厚6.0　【砂岩】	Ⅱの再録　01400
122	W-上層	石製品	砥石	長5.2　幅2.6　厚1.3　【安山岩】	Ⅱの再録　01397
123	W-上層	石製品	砥石	長7.0　幅5.1～6.0　厚1.1　【細粒凝灰岩】	Ⅱの再録　01399
124	上層	石製品	砥石	長(5.8)　幅3.3　厚1.6	05253
125	上層	石製品	不明石製品	長11.2　幅10.7　厚2.9　全体に敲打痕	05255

図版83　SX1397遺物包含層上層出土遺物（3）

No.	大別層位	種　別	器　種	特　徴	登　録
126	W-上層	鉄製品	包丁	現存長24.6　刀部長13.2　柄部長11.4　棟幅0.3　　Ⅱの内録	01358
127	上層	鉄滓			05066

図版84　SX1397遺物包含層上層出土遺物（4）



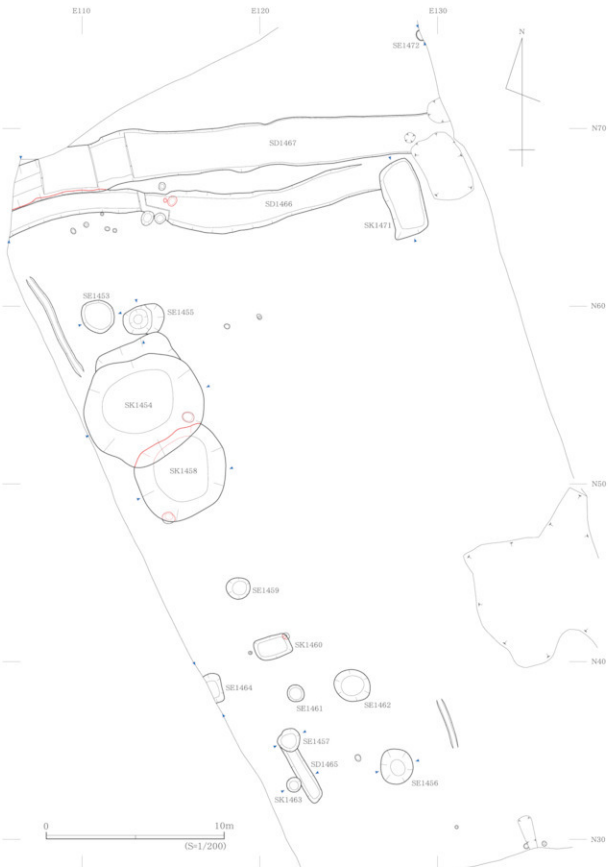
No.	大別層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	登　録
128	礫認面	転用硯			常滑産甕の破片を硯石に転用	05013
129	礫認面	陶器	片口鉢	常滑		05016
130	礫認面	陶器	三筋壺	常滑	沈線(複線)	05014
131	礫認面	陶器	甕	常滑	押印(籠状)	05015
132	礫認面	白磁	碗			05040

図版85　SX1397遺物包含層確認面出土遺物

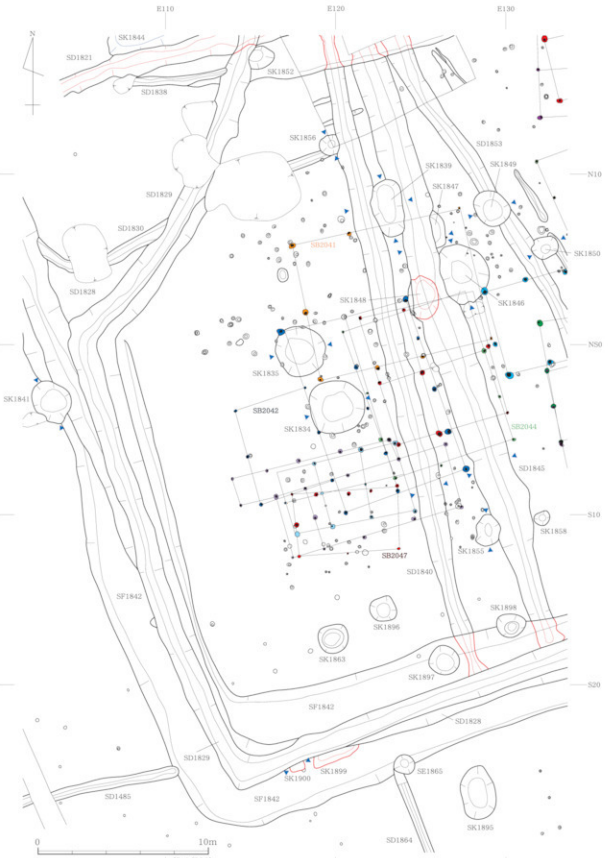
（3）５区

５区は３・４区とＳＸ1200遺物包含層を挟んだ東側にあり、遺跡全体からみて北東部に位置する。中・近世の遺構は、区画溝跡のほか掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、溝跡などを確認した。遺構の分布をみると東側の密度が高く、ＳＸ1200が形成された湿地跡に面する西側に少ない（図版86～92）。遺物は掘立柱建物跡の柱穴や井戸跡、土壙、溝跡から、土器・陶磁器・木製品・石製品・金属製品などが出土したが、Ｄ区に比較して出土量が少ない。

また、５区北東部は他に較べて遺構密度が極端に低い。これは、この部分が工事に伴う掘削で遺構が発見されたことにより、急きょ発掘調査を実施したため、遺構確認面が他の調査区に較べて30cmほど低くなり、柱穴や土壙・溝跡といった浅い遺構が削平されたことによる。

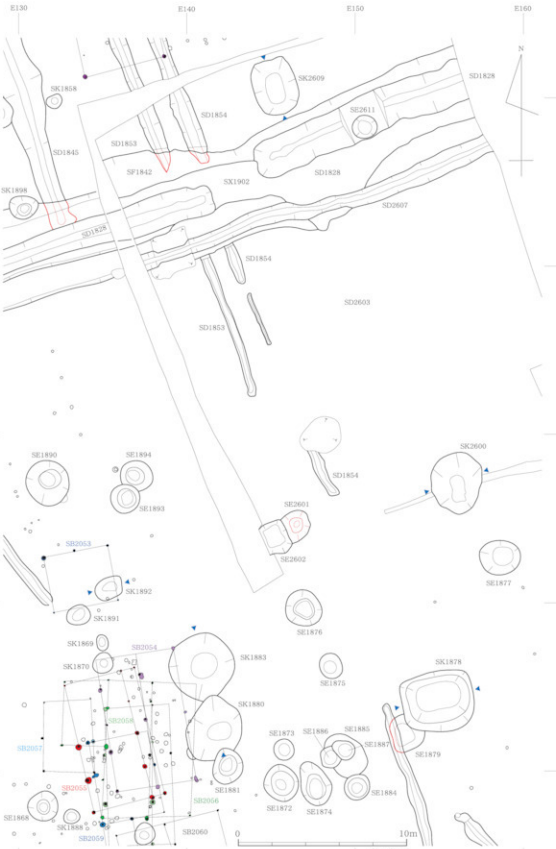


図版86　5区北端の検出遺構

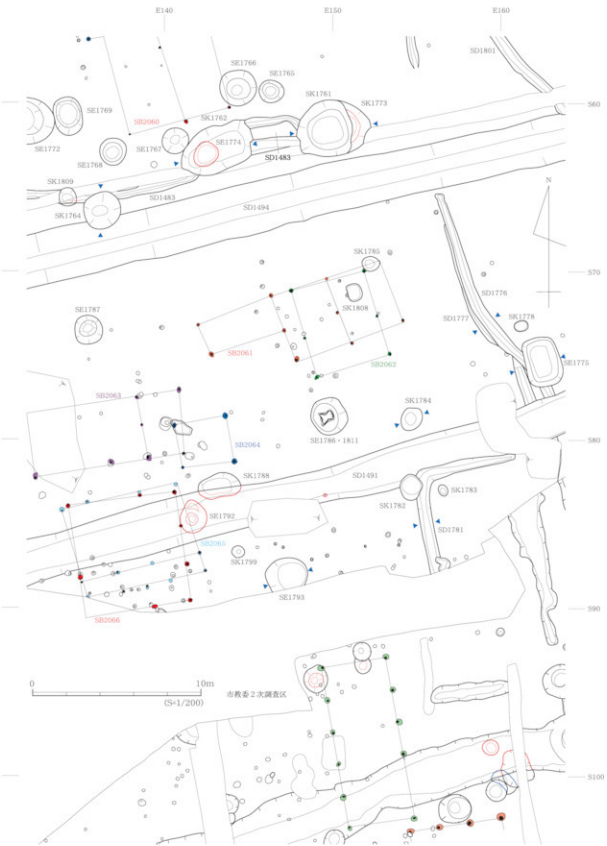


図版87　5区北西部の検出遺構

図版88 5区中央部西側の検出遺構



図版89　5区中央部東側の検出遺構



図版90　5区南端の検出遺構

5区空中写真（北から）　奥に見えるのは三陸自動車道

5区空中写真（南東から）

5区空中写真（北西から）

図版91　5区の検出遺構（1）

5区北部空中写真（東から）

5区北部（西から）

5区南部空中写真　上が北、中央下がSD1494区画溝跡

図版92　5区の検出遺構（2）

ａ．掘立柱建物跡

33棟の建物跡を確認した。これらは建物の位置にある程度のまとまりが認められ、**１）**北部（区画Ｉ・Ｊ内部－17棟：ＳＢ2031～2047）、**２）**中央部（区画Ｉ・Ｊと区画Ｈの間－10棟：ＳＢ2051～2060）、**３）**南部（区画Ｈ内部－６棟：ＳＢ2061～2066）の３群に分けられる。以下、主な建物跡について概要を述べることとし、すべての建物跡の属性は、第３表にまとめた。

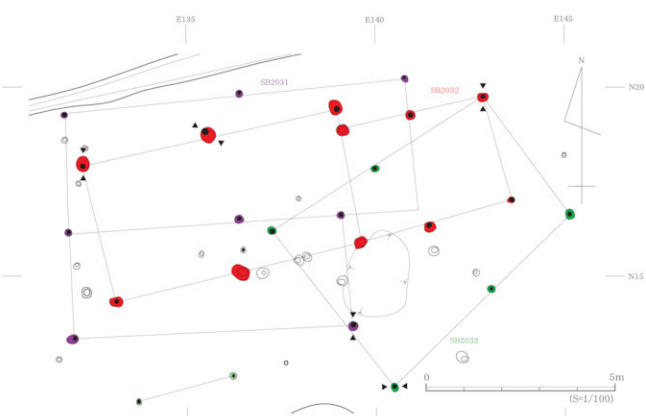
（ｉ）北部の建物跡

【ＳＢ2031建物跡】（図版93・94）

東西が北側柱列で２間、南側柱列で３間、南北１間の身舎の南側に２×１間の張出しが付く東西棟建物跡である。柱穴は身舎で６個、張出しで２個検出しており、すべてで径８～13㎝の柱痕跡を確認した。身舎は桁行きが北側柱列で総長9.0m、柱間寸法は西から4.6m・4.4m、梁行きは西妻で3.1mである。張出しは西妻からの出が2.8m、東西は7.3mである。方向は北側柱列で測るとＥ－6°－Ｎである。柱穴は身舎、張出しとも径25～33㎝の円形もしくは楕円形で、深さは20㎝ある。埋土はにぶい黄褐色もしくは暗褐色シルトである。

【ＳＢ2032建物跡】（図版93・94）

東西２間、南北１間の身舎の東側に２×１間の張出しが付く東西棟建物跡である。柱穴は身舎で７個、張出しで４個検出しており、うち９ヶ所で径10～15㎝の柱痕跡、２ヶ所で柱抜取穴を確認した。

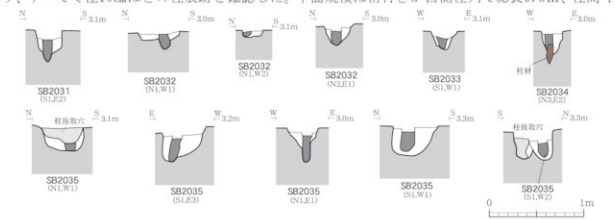


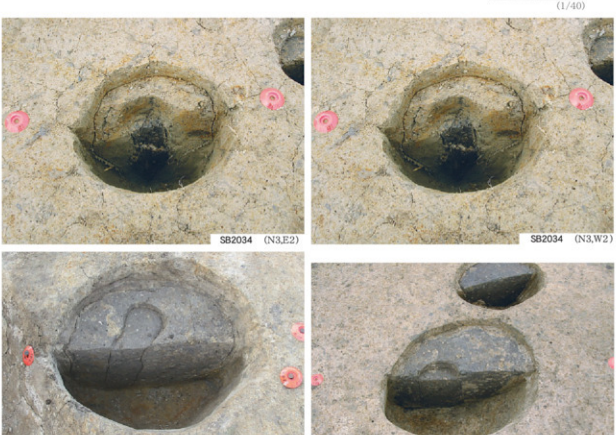
図版93　SB2031～2033建物跡

身舎は桁行きが北側柱列で総長6.9m、柱間寸法は西から3.4m・3.5m、梁行きは西妻で3.7mである。張出しは東妻からの出が総長4.1m、柱間は西から1.8m・2.3m、梁行きは2.8mである。方向は南側柱列で測るとE-14°-Nである。柱穴は身舎が径30～40cm、張出しが径25cm前後の円形もしくは楕円形で、深さは身舎、張出しとも25cm前後ある。埋土はにぶい黄褐色もしくは暗褐色シルトである。柱抜取穴から鉄製の皿が出土している（図版105－３）。

【ＳＢ2034建物跡】（図版94・95）

東西２間、南北４間の南北棟建物跡である。南から２間目に間仕切りを持つ。柱穴は10個検出しており、すべてで径10cmほどの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが西側柱列で総長9.3m、柱間寸法





図版94　SB2031~2035建物跡柱穴断面

は北から2.4m・2.5m・2.5m・1.9m、梁行きは南妻で総長4.7m、柱間は西から2.4m・2.3mである。方向は西側柱列で測るとN-24°-Wである。柱穴は径25cm前後の円形で、深さは側柱、間仕切りとも25cm前後ある。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

【ＳＢ2035建物跡】（図版94・95）

東西５間、南北２間の東西棟建物跡である。ＳＤ1854溝跡より新しい。柱穴は14個検出しており、すべてで径９～14cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長11.5m、柱間寸法は西から2.5m・2.4m・1.8m・2.0m・2.9m、梁行きは東妻で総長5.5m、柱間は北から3.8m・1.7mである。方向は北側柱列で測るとE-16°-Nである。柱穴は径20～50cmの円形もしくは楕円形で、深さは30～40cmある。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。埋土から銭貨「至大通寶」（初鋳1310年）（図版105－１）が出土している。

【ＳＢ2036建物跡】（図版95・97）

東西２間、南北２間の南北棟総柱建物跡である。ＳＤ1854溝跡より新しい。柱穴は９個検出しており、すべてで径10～12cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが西側柱列で総長6.0m、柱間寸法は北から3.7m・2.3m、梁行きは北妻で総長5.1m、柱間は西から2.5m・2.6mである。方向は西側柱列で測るとN-16°-Wである。柱穴は径25～35cmの円形もしくは楕円形で、深さは25～40cmある。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。

【ＳＢ2037建物跡】（図版95・97）

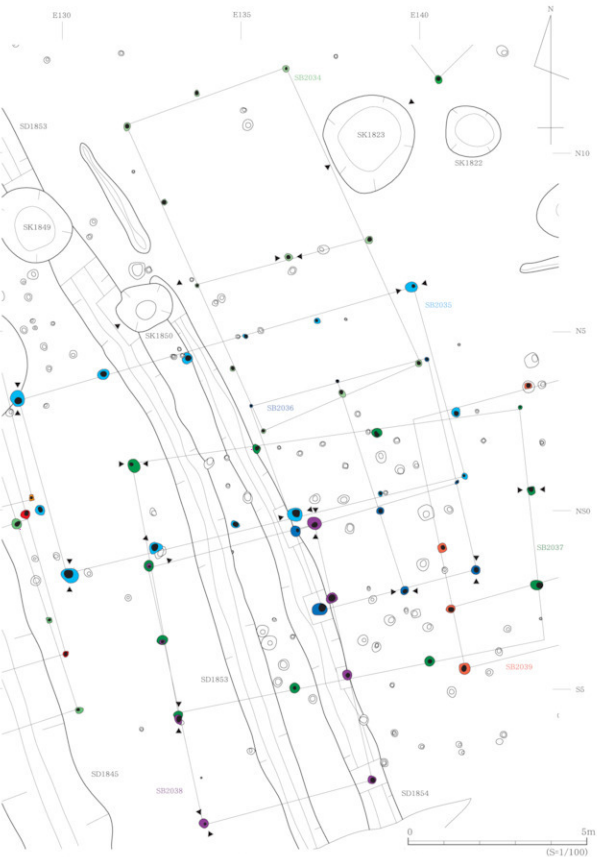
東西３間、南北３間の東西棟建物跡である。ＳＤ1854溝跡より新しく、ＳＢ2038建物跡より古い。柱穴は11個検出しており、８ヶ所で径11～15cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長11.0m、柱間寸法は西から3.5m・3.4m・4.1m、梁行きは西妻で総長7.1m、柱間は北から2.9m・2.1m・2.2mである。方向は北側柱列で測るとE-8°-Nである。柱穴は径25～40cmの円形もしくは楕円形で、深さは30～40cmある。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。埋土から砥石が出土している（図版106－４）。

【ＳＢ2039建物跡】（図版96・97）

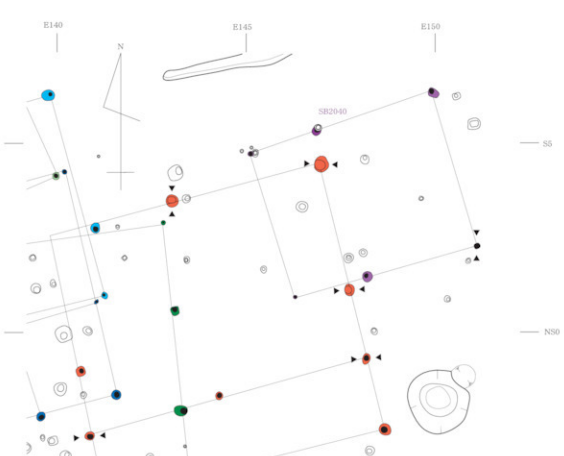
東西２間、南北２間の身舎の南側に廂もしくは縁を持つ東西棟建物跡である。柱穴は身舎で７個、廂（または縁）で２個検出しており、すべてで径10～17cmの柱痕跡を確認した。身舎は桁行きが南入側柱列で総長7.6m、柱間寸法は西から3.6m・4.0m、梁行きは東妻で総長5.3m、柱間は北から3.4m・1.9mで、廂（または縁）の出は2.0mである。方向は南入側柱列で測るとE-14°-Nである。柱穴は径20～30cmの円形もしくは隅丸方形で、深さは20～35cmある。埋土は暗褐色もしくはにぶい黄褐色シルトである。

【ＳＢ2041建物跡】（図版97・98）

東西３間、南北２間の東西棟建物跡である。ＳＫ1839・1846土壙より古い。柱穴は８個検出しており、すべてで径10cmほどの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが南側柱列で総長10.3m、柱間寸法は西から3.4m・2.7m・4.2m、梁行きは西妻で総長8.1m、柱間は4.0m等間である。方向は南側柱列で測るとE-14°-Nである。柱穴は径25～40cmの円形もしくは楕円形で、深さは30～40cmある。埋土



図版95　SB2034～2038建物跡



図版96　SB2039・2040建物跡

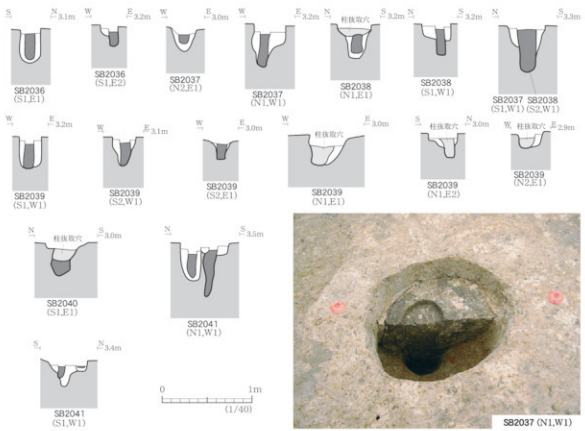
は暗褐色もしくはにぶい黄褐色シルトである。

【ＳＢ2042建物跡】（図版98・99）

東西２間、南北４間の身舎の西側に２×１間の張出しが付く南北棟建物跡である。身舎は床束を持つ。柱穴は身舎で15個、張出しで３個検出しており、すべてで径10～16㎝の柱痕跡を確認した。身舎は桁行きが東側柱列で総長10.4m、柱間寸法は北から2.3m・3.1m・2.6m・2.4m、梁行きは南妻で総長7.5m、柱間は西から3.3m・4.2mである。張出しは西側柱列の中央に設けられ、身舎からの出は4.3m、南北は総長5.7m、柱間は北から2.7m・3.0mである。方向は身舎東側柱列で測るとN-19°-Wである。柱穴は身舎側柱が径30㎝前後の楕円形、束柱や張出しは径20㎝ほどの円形で、深さは身舎が30～50㎝、束柱や張出しは20㎝前後ある。埋土はにぶい黄褐色もしくは暗褐色シルトである。柱痕跡よりかわらけ皿が出土している

【ＳＢ2043建物跡】（図版98・99）

東西２間、南北２間の南北棟総柱建物跡である。ＳＢ2046建物跡より新しく、ＳＫ1846土壙より古い。柱穴は８個検出しており、すべてで径13～17㎝の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが西側柱

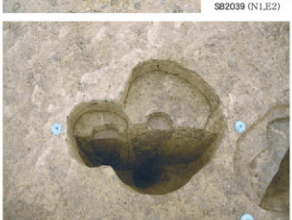


SB2037 (N1,W1)

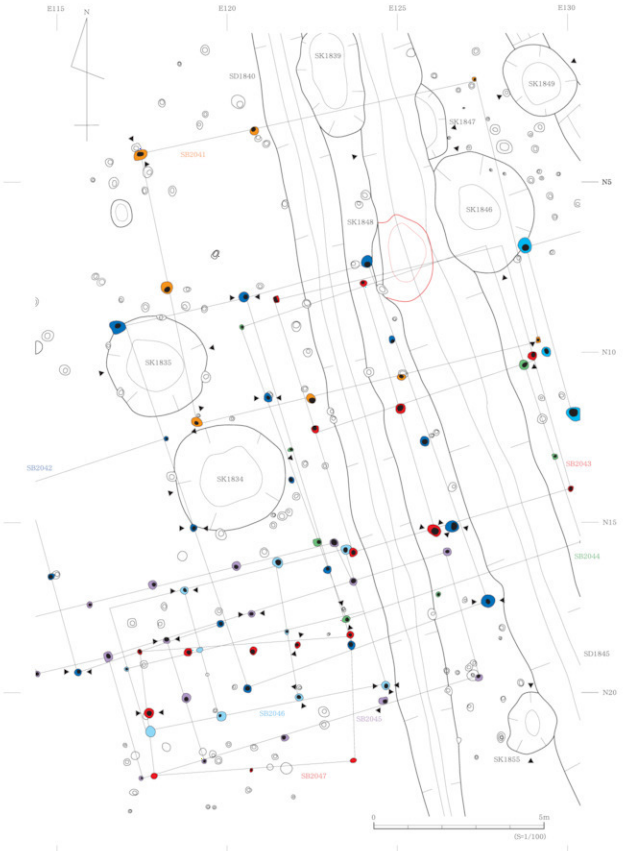
SB2039 (S1,W1)

SB2039 (N1,E2)

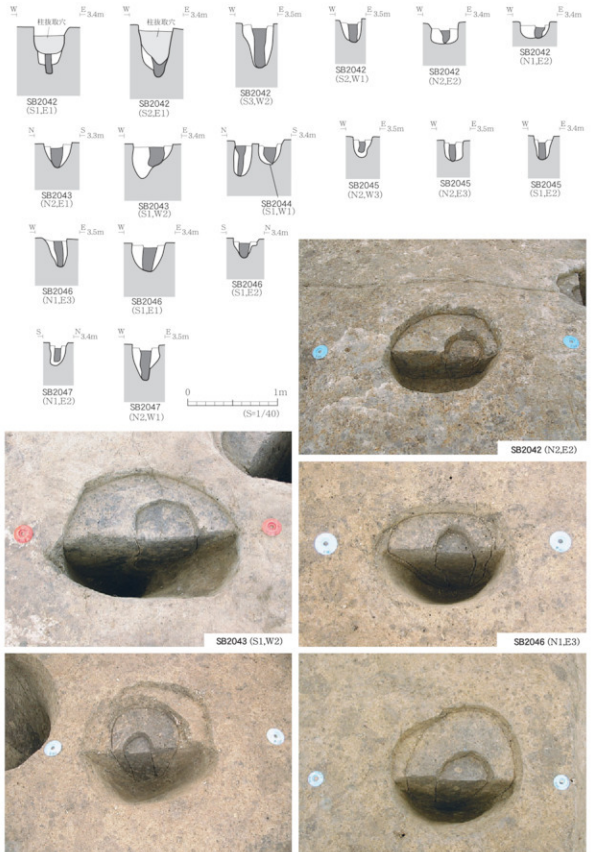
SB2039 (S2,E1)


SB2041 (N1,W1)

図版97　SB2036～2041建物跡柱穴断面



図版98 SB2041~2047建物跡



図版99　SB2042～2047建物跡柱穴断面

列で総長7.8m、柱間寸法は3.9m等間、梁行きは南妻で総長6.6m、柱間は西から2.4m・4.2mである。方向は西側柱列で測るとN-17°-Wである。柱穴は径30～45cmの円形もしくは楕円形で、深さは30～50cmある。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。

【ＳＢ2044建物跡】（図版98・99）

東西２間、南北３間の南北棟建物跡である。ＳＫ1846土壙より古い。柱穴は８個検出しており、すべてで径９～15cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが西側柱列で総長9.2m、柱間寸法は北から3.9m・2.9m・2.4m、梁行きは南妻で総長7.3m、柱間は西から2.8m・4.5mである。方向は西側柱列で測るとN-20°-Wである。柱穴は径15～25cmの円形もしくは隅丸方形で、深さは30cmほどある。埋土はにぶい黄褐色シルトである。

【ＳＢ2045建物跡】（図版98・99）

東西４間、南北１間の身舎の北側に４×１間の張出しが付く東西棟建物跡である。身舎は西妻から１間目に間仕切りを持つ。柱穴は身舎で11個、張出しで５個検出しており、すべてで径６～15cmの柱痕跡を確認した。身舎は桁行きが南側柱列で総長10.3m、柱間寸法は西から1.9m・2.4m・3.1m・2.9m、梁行きは東妻で3.8mである。張出しは北側柱列と１間西にずらして設けられ、身舎からの出は1.7m、東西は総長9.5m、柱間は西から2.1m・2.0m・2.4m・3.0mである。方向は身舎南側柱列で測るとE-17°-Nである。柱穴は身舎、間仕切り、張出しとも径20～25cmの円形もしくは隅丸方形で、深さは20～30cmある。埋土はにぶい黄褐色シルトである。柱痕跡よりかわらけ皿が出土している。

【ＳＢ2046建物跡】（図版98・99）

東西３間、南北２間の東西棟総柱建物跡である。ＳＢ2043建物跡より古い。柱穴は10個検出しており、８ヶ所で径９～15cmの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが南側柱列で総長7.1m、柱間寸法は西から2.1m・2.4m・2.6m、梁行きは東妻で総長4.2mである。方向は南側柱列で測るとE-12°-Nである。柱穴は径20～35cmの円形で、深さは20～30cmある。埋土はにぶい黄褐色もしくは暗褐色シルトである。埋土から銭貨「聖宋元寶」（初鋳1101年）（図版105－２）が出土している。

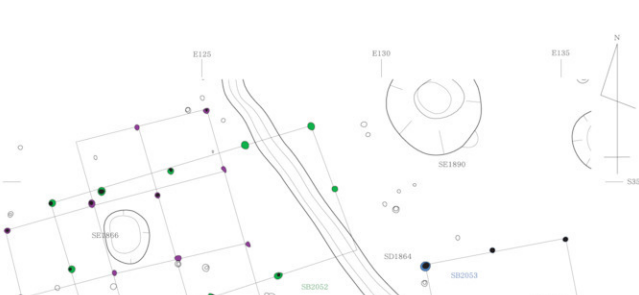
（ⅱ）中央部の建物跡

【ＳＢ2051建物跡】（図版100）

東西２間、南北３間の身舎の西側に１間の張出しが付く南北棟建物跡である。身舎は床束を持つ。柱穴は身舎で11個、張出しで２個検出しており、６ヶ所で径10cmほどの柱痕跡を確認した。身舎は桁行きが東側柱列で総長6.4m、柱間寸法は北から1.7m・2.2m・2.6m、梁行きは南妻で総長3.7m、柱間は西から1.8m・1.9mである。張出しは西側柱列の中央に設けられ、身舎からの出は2.6m、南北は1.9mである。方向は身舎東側柱列で測るとN-15°-Wである。柱穴は身舎側柱、束柱、張出しとも径15～25cmの円形もしくは楕円形である。

【ＳＢ2052建物跡】（図版100）

東西４間、南北２間の東西棟建物跡である。ＳＤ1864溝跡より古い。柱穴は11個検出しており、７ヶ所で径10cmほどの柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが北側柱列で総長7.4m、柱間寸法は西から1.4m・2.0m・2.1m・1.9m、梁行きは西妻で総長3.9m、柱間は北から1.9m・2.0mである。方向は



図版100　SB2051～2053建物跡

北側柱列で測るとE-17°-Nである。柱穴は径15～20㎝の円形である。

【ＳＢ2054建物跡】（図版101）

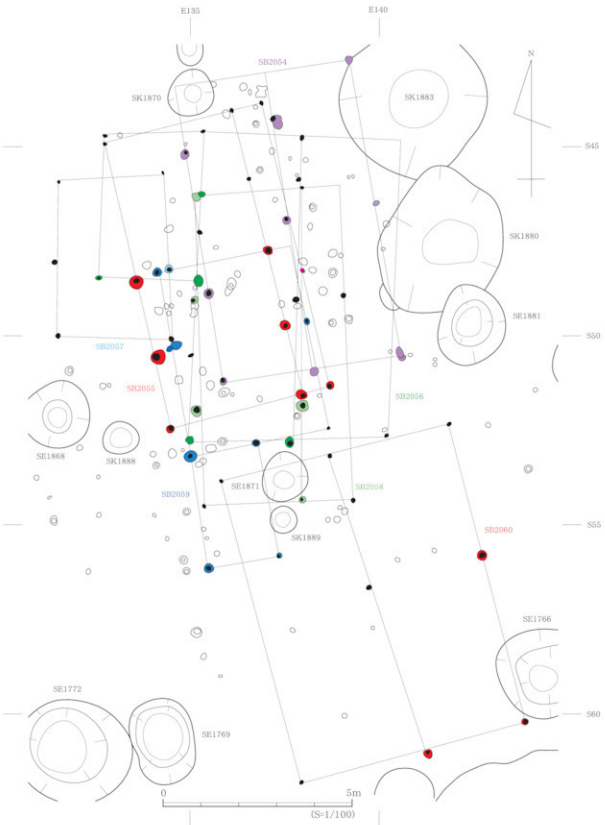
東西２間、南北４間の床束を持つ南北棟建物跡である。ＳＫ1870土壙より古い。柱穴は側で８個、束で２個検出しており、うち６ヶ所で径10～16㎝の柱痕跡、１ヶ所で柱抜取穴を確認した。身舎は桁行きが西側柱列で総長7.9m、柱間寸法は北から1.8m・2.1m・1.7m・2.3m、梁行きは南妻で総長4.8m、柱間は2.4m等間とみられる。方向は東側柱列で測るとN-10°-Wである。柱穴は身舎側柱、東柱、張出しとも径20～35㎝の円形もしくは楕円形である。

【ＳＢ2055建物跡】（図版101）

東西１間、南北４間の身舎の東側に縁もしくは廂を持つ南北棟建物跡である。柱穴は身舎で９個、縁（または廂）で２個検出しており、すべてで径10～20㎝の柱痕跡を確認した。身舎は桁行きが東入側柱列で総長7.7m、柱間寸法は北から1.8m・2.0m・2.0m・1.9m、梁行きは南妻で3.6m、縁（または廂）の出は0.7mである。方向は東入側柱列で測るとE-4°-Wである。柱穴は身舎が径25～40㎝の円形、縁（または廂）が径20㎝の円形である。

【ＳＢ2056建物跡】（図版101）

東西２間、南北４間の身舎の西側に１間の張出しが付く南北棟建物跡である。身舎は床束を持つ。柱穴は身舎で11個、張出しで２個検出しており、うち９ヶ所で径10～12㎝の柱痕跡を確認した。身舎は桁行きが西側柱列で総長8.2m、柱間寸法は北から1.7m・2.3m・2.0m・2.3m、梁行きは南妻で総長5.2m、柱間は2.6m等間とみられる。張出しは西側柱列の北２間に設けられ、身舎からの出は2.5



図版101　SB2054～2060建物跡

m、南北は3.8mである。方向は身舎西側柱列で測るとN-10°-Eである。柱穴は身舎側柱が径20～30㎝の楕円形、東柱や張出しは径15㎝ほどの円形である。

【ＳＢ2058建物跡】（図版101）

東西１間、南北３間の身舎の東側に廂もしくは縁を持つ南北棟建物跡である。柱穴は身舎で８個検出しており、そのすべてと廂（または縁）の２ヶ所で径８～15㎝の柱痕跡を確認した。身舎は桁行きが西側柱列で総長8.2m、柱間寸法は北から2.8m・2.9m・2.5m、梁行きは南妻で2.6m、廂（または縁）の出は1.3mである。方向は西側柱列で測るとN-2°-Wである。柱穴は径20～30㎝の円形もしくは隅丸方形である。

【ＳＢ2059建物跡】（図版101）

東西２間、南北２間の身舎の南側に１間の張出しが付く南北棟建物跡である。柱穴は身舎で６個、張出しで２個検出しており、うち７ヶ所で径９～15㎝の柱痕跡、１ヶ所で柱抜取穴を確認した。身舎は桁行きが西側柱列で総長4.9m、柱間寸法は北から2.0m・2.9m、梁行きは南妻で総長3.7m、柱間は西から1.8m・2.0mとみられる。張出しは南妻の西側に設けられ、身舎からの出は3.0m、東西は1.8mである。方向は西側柱列で測るとN-11°-Wである。柱穴は身舎が径20～35㎝の円形、張出しは径15～20㎝の円形である。

【ＳＢ2060建物跡】（図版101）

東西２間、南北３間、床束を伴うとみられる南北棟建物跡である。柱穴は８個検出しており、すべてで径10～17㎝の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが東側柱列で総長8.1m、柱間寸法は北から3.6m・4.5m（２間分）、梁行きは南妻で総長6.1m、柱間は西から3.4m・2.7mである。方向は東側柱列で測るとN-14°-Eである。柱穴は径20～30㎝の円形である。

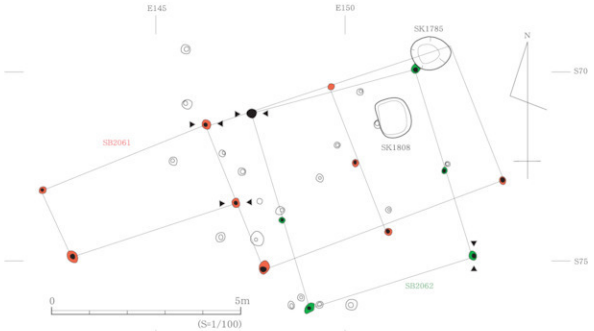
（ⅲ）南部の建物跡

【ＳＢ2061建物跡】（図版102・103）

東西２間、南北２間の身舎の西側に１間の張出しが付く東西棟建物跡である。身舎は束柱を持つ。ＳＫ1785土壙より古い。柱穴は９個検出しており、８ヶ所で径10～13㎝の柱痕跡を確認した。身舎は桁行きが南側柱列で総長6.7m、柱間寸法は西から3.4m・3.3m、梁行きは西妻で総長4.2m、柱間は北から2.3m・1.9mである。張出しは西妻の北側に設けられ、身舎からの出は4.6m、南北は1.9mである。方向は西妻で測るとN-21°-Wである。柱穴は径20～30㎝の円形もしくは楕円形で、深さは30㎝前後ある。埋土は地山小ブロックを多く含む暗褐色シルトである。

【ＳＢ2063建物跡】（図版103・104）

東西４間、南北２間の東西棟建物跡で、東妻から１間目に間仕切りを持つ。柱穴は７個検出しており、すべてで径10～20㎝の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行きが南側柱列で総長8.9m、柱間寸法は西から4.6m（２間分）・2.2m・2.1m、梁行きは東妻で総長3.8m、柱間は1.9m等間とみられる。方向は南側柱列で測るとE-10°-Nである。柱穴は径20～45㎝の楕円形で、深さは25㎝ほどある。埋土は地山小ブロックを多く含むにぶい黄褐色もしくは暗褐色シルトである。



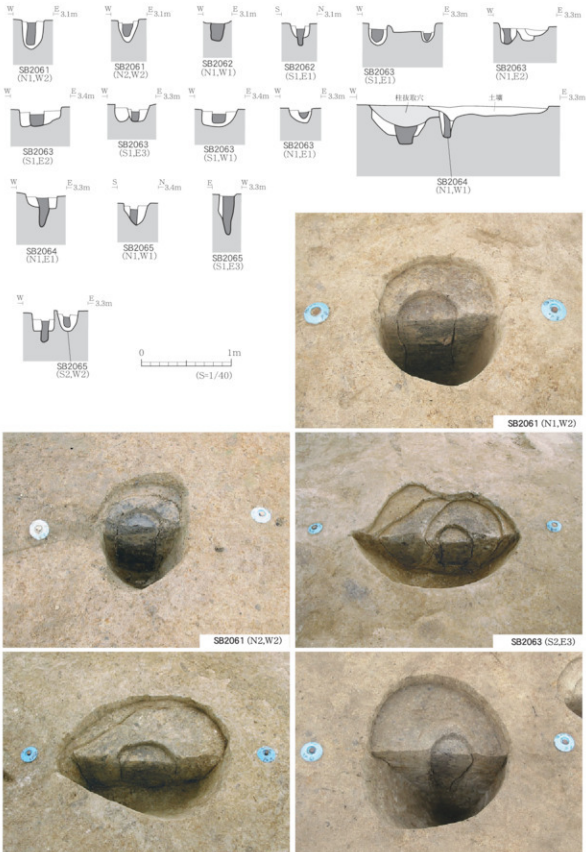
図版102　SB2061・2062建物跡

【ＳＢ2065建物跡】（図版103・104）

東西３間、南北１間の身舎の南側に東西４間の廂もしくは縁を持つ東西棟建物跡である。ＳＢ2066建物跡より新しい。柱穴は身舎で８個、廂（または縁）で５個検出しており、13ヶ所で径７～16㎝の柱痕跡を確認した。身舎は桁行きが南入側柱列で総長7.2m、柱間寸法は西から2.2m・2.1m・2.9m、梁行きは東妻で4.4m、廂（または縁）の出は1.1mである。廂（または縁）の総長は7.2m、柱間は西から2.2m・1.5m・1.4m・2.1mである。方向は南側柱列で測るとＥ-13°-Ｎである。柱穴は径20～25㎝の円形もしくは隅丸方形で、深さは25～40㎝ある。埋土は地山小ブロックを多く含むにぶい黄褐色もしくは暗褐色シルトである。埋土から凝灰岩製の切石が出土している。

【ＳＢ2066建物跡】（図版103・104）

東西３間、南北３間の方形の建物跡である。ＳＢ2065建物跡、ＳＤ1491溝跡より古い。柱穴は８個検出しており、うち７ヶ所で径10～18㎝の柱痕跡を確認した。平面規模は東西が北側柱列で総長6.3m、柱間寸法は西から4.3m（２間分）・2.0m、南北は東側柱列で総長6.5m、柱間は北から2.1m・2.3m・2.1mである。方向は東側柱列で測るとＮ-９°-Ｗである。柱穴は径20～30の円形もしくは隅丸方形で、深さは20㎝ある。



図版103　SB2061～2065建物跡柱穴断面